
バカとテストと召喚獣～最強の親友！？～

新炎飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 最強の親友！？！

【Nコード】

N0026H

【作者名】

新炎飛鳥

【あらすじ】

普通に小説を読んでいた主人公が時空の狭間の管理人に気に入られバカテスの世界へトリップ！？ありえない強さを持つ主人公と、バカテスの住人達や他の作品からも技や道具にキャラがでてくるどたばた（？）コメディーがここに爆誕！！え？期待度？んなもん星一つ以下だ！！ついでに恋愛要素は0.5も無い！！！（注 この小説は作者の駄目な才能により、何かと比べるのも失礼なぐらい粗末な物です。別に暇つぶしだから関係ねえ！！やそんな事気にしないって方はこのままご覧ください。それ以外の方が読まれると気

分が悪くなるどころか胸糞悪くなります・・・
(

ブローグ前編 最強主人公誕生！？（前書き）

はじめまして、新炎飛鳥と申します

まずこの小説をこれを読む方に注意があります
まず主人公の強さがありえないです。最強です

基本が原作沿いで、もしかしたら他の作品からもキャラや技や道具
等などを持ってくるかもしれせん

もしもバカテストだけがいい！！という方や

オリキャラなんて出すな！

なんて方はバックすることをお勧めします

確実に気分を損なわれます

もしかしたら、ハーレム状態になる可能性が高いです（主人公かな
り優柔不断なので）

ついでにご都合主義です

それでもいいという方のみお読みください

あと、この小説、かなり展開が速いところが多々あります

ご了承ください

プロローグ前編 最強主人公誕生！？

2月。日 神炎家

良太の部屋

『アハハハ。いやマジで最高だね、バカテスは』

今小説（バカとテストと召喚獣）を読んで大爆笑しているのが今作の主人公神炎良太である

『ふう。面白かった。実際にバカテスの世界に行って見たいな』

そのとき、先ほどまで読んでいた本が光った

『なんだ！？まさかこれはお約束の！？』

良太は結構オタクである

そのとき、良太の視界が真っ白になった

（白い空間）

『ここはどこだ？』

早速トリップの王道のセリフを言う良太

？「ここは次元の狭間よ」

声がしたほうに振り向くとそこには

『クロノトリガーの謎じいさん！？』

そう某有名ゲームに出てくるじいさんが居たのだ

？「ちがうわよ！！あなたの記憶の中にあつた次元の狭間を管理するものの姿をとっただけよ」

『ふーん。だったら俺がイメージしたらその姿になるのか？』

？「そうよ」

『だったら』

ピカッ

『この姿の方があつてるかな？』

？「へえ。なかなか好みじゃない。ありがと、礼を言っわ」

今の？の容姿は某有名ギャルゲーのシンデレ王女である

『んであんたの名前は？』

？「無いわ」

『は？』

？「無いといったの。時空を管理するだけの私に名前は不要だから」

そういつたときのこいつの顔が悲しそうだった

『桔梗』

？「へ？」

『お前の名前だよ。無いと不便だろ？』

桔「あ、ありがと／＼／」

『それで？何で俺をここに呼んだんだ？（まあここはお約束で）』

桔「そうよ、あなたを異世界に招待しようと思って」

『心をよまれた！！！（まさに王道じゃなーか。つかこいつはことりか！？）』

桔「はいはい、バカなこと考えてないで今なら特典で何かほしい能力を3つまであげられるけど？」

『そうか・・・じゃあまず一つ目が瞬間記憶能力（これはあそこじや必須だしな）二つ目が俺の世界のアニメやゲームの武器、能力、技を出したり使えるようにしてほしいもちろんそれに必要な魔力とかなしで召喚獣も使えるようにな。三つ目は身体能力の限界突破だ』

桔「わかったわ。おまけで貴方の元の世界のアニメやゲームの技の知識と特別に向こうでの住居とある程度のお金を用意しておくわ。まったく住居を無しでどうするつもりだったのかしら」

あはは・・・そのときは主人公たちの誰かに居候させてもらうか魔

術とかを利用して何か造ろうと考えてました・・・

桔梗が俺に手をかざす。すると頭にアニメやゲームなどの知識が流れ込んできた

『ぐわぁ・・・いつつー。さすがにアニメとかの知識が一気に送られると頭がいてえな』

桔「さてそろそろ異世界に送るけど。準備はいい？」

『ああいつでも良いぜ』

桔「ああ。言い忘れてたけど元の世界ではあなたの存在がなくなってるから。それが能力の代償」

『ああ。予想してた』

うーんこれも王道ですなあ
死んでないけど

桔「そう。じゃ行くわよ。ちなみに向こうの着いたときの場所と年齢変化と容姿変化があるから」

『それもお約束だな。容姿は今好きなように変えられるか？』

桔「ええ、今でも大丈夫よ」

『そうかじゃあ。』

ピカッ

光りが収まったときには黒髪黒眼だったのに空髪炎眼になっていた
ついでに容姿もかっこよくなっていた（無自覚）

『前からこうしたかったんだよね』

これに容姿は含まれてはいない

桔「／／／／（かっこいい／／／）」

『どうした？顔真っ赤だぞ？』

桔「何でもないわよ！！それより行くわよ」

『ああいつでも良いぜ。それと俺のこと名前で呼んでくれよ良太ってさ』

そのとき良太の足元に魔方陣が現れた

桔「そのうちこっちから連絡するわね良太」

『おうまってるぜ』

良太が笑いながらさういうと魔方陣が光り良太は異世界へ旅立って
行った

桔「良太。そのうち会いに行くから」

良太が居なくなった空間でその言葉は響いた

プロローグ後編 明久達との出会い

某所はるか上空

空に魔方阵が現れた。そこから出てきたのは

『ふう。一瞬だったな。ん？なんか落ちてるような・・・』

良太が現れたのは上空よって必然的に下に落ちてゆく

『あはは。確かに約束だけさあ・・・どうやって助かるう？』

数秒考えた良太の脳内にあるひらめきが！

『投影を使ってあれを出せばいけるか？なら！イメージするんだ。投影するものを強く！もつと強く！』

そのとき作っていないのに魔術回路が働くイメージが頭をよぎり良太の手を光りが包み込む

光が収まりその手にはペンダントが現れた

『出来た！！短い間だが頼むぜ！！』

？「起動パスワードを設定してください」

『・・・どうしても言わないとだめ？』

？「はい」

んなもん考えてねえよ・・・

よし、これでいいや

『我時空を越えし者なり
無限を冠する我が友よ
具現せよ無限の力

構築せよ無限の装甲
把握せよ無限の魔法

我に無限の運命を打ち破る力を

――インフィニット セットアップ』

インフィ「起動パスワード認識しました。バリアジャケットを設定してください」

『あいよ』

インフィ「バリアジャケット設定されました スタンバイレディ
セットアップ」

青がかった空色の光が良太を包みその中から現れたのは空を基調とした服と両手には青いガントレット、足には赤いレギンスを履きそして右肩に大剣（見た目は某運命の名を持つ機体の剣ちなみに名前もまんまである）がかつがれている

『我に翼を』

インフィ「イエスマスター ウイング」

良太の背中に青みがかった空色の羽が出た

インフィ「マスター」

『ん？なんだ？』

インフィ「早く制御しない地面に激突します」

『へ？ってまじだやべー！』

そして急いで姿勢制御をおこない何とか公園の林の奥に着地できた。
そして良太はBJを解除しデバイスをリリースモードにし、首にかける

『ふいゝ。ん？なんか目線が低いような？』

インフィ「今のマスターの外見は6歳程度です。」

（なるほど10才若返ったのか。あ、でも今が原作の時間軸なら明久たちに絡めないな）

インフィ「マスター。近くに生体反応があります」

『ん？』

ガサガサ

でてきたのは？

？「君だあれ？」

（ん？この顔とこの髪の色・・・明久に似てる？）

『俺は神炎良太って言うんだ君の名前は？』

？「ぼくは、よいいあきひさ」

『明久君がよろしくね。』

（まさかまじで明久だとは。見た目6歳ぐらいか？なら原作の10年前にきちまったのか。よかったー、今が原作の時間軸だったら最悪だったぜ）

あき「よろしく！良太君」

？「あきくゝんどこ？」

あき「あ、おねえちゃんだ。おねえちゃん」

（おねえちゃん？確か明久には姉がいたな、たしかバカテスの5巻で出てたような・・・）

ガサガサ

？「やつとみつけたゝもうなにしてたの？」

あき「えつとねお空からなにか降ってきたからなんだろうって思っ
て、ここにきたら良太君がいたの」

？「良太君？」

『あ、始めまして神炎良太と言います。ここでのんびりしてたら明

久君が来たんですよ。』

？「あ、ご丁寧にどうも私は吉井玲よしあきつていいます（かつこいい／＼）良太君失礼だけど今何歳？」

『歳ですか？今年で6になります。失礼ですがそちらのお年は？』

玲「そうなの。私は今年13になるのよ。」

あき「僕6さい！」

『吉井さんは13とは思えないほど綺麗ですね』

玲「やだ／＼お世辞なんていいわよ。それと私のことは玲と呼んで」

『じゃあ俺のことも良太と呼んでください。それと俺はお世辞は言わないし女の人に対しての評価は一切嘘をつく気はありませんよ（ニコ）』

玲「／＼／＼／＼（やっぱりかつこいい／＼／＼）」

あき「良太君。遊ぼうよ」

『ごめんね。俺これから用事があるんだ。だから今日は遊べないんだ。』

あき「えー」

『それじゃあ明日明久の家に迎えに行くからそのとき遊ぼうか？』

あき「うん!!」

『あ、それと明久君1+1は?』

あき「え」と1!!」

このときからバカだったのか

いやでもまだ6歳だし、まだ見込みはある!!

『答えは2だよちゃんと覚えような』

あき「うん!!」

『玲?』

玲「ふえ!?! なっなに?」

『明日明久君と遊びに行くときに迎えに行くことになったから住所を教えてほしいんだけど』

玲「え? わ、わかった」

そして数分後

『うんわかったありがとう』

玲「い、いえ」

『それじゃあ明久君。また明日ね』

あき「うんまたあした!!」

そうして明久たちと別れた

そして町を散策中

『ふむ俺の予想が正しければどこかであれが「ぎゃあああああああ
あ」

インフィ「マスター。その角を右に曲がって300mほど行った
ところで悲鳴です」

『探す手間が省けたな行くか』

叫び声が聞こえたところに行くと

?「しよ、翔子それ以上はやめ・・・」

?「だめ、浮気は許さない」

10年後に見られる光景ができていた

(時期が合わないけどそこはご都合主義でBY作者)

このまま見ても良いがそしたら雄二が力尽きるか

『はいその君それ以上はこの子が危ないからやめたほうが良い
よ』

？1「だれ？（かつこいい／＼）」

？2「た、たすかった」

『俺の名前は神炎良太。良太と呼んでくれ君たちは？』

？「私は霧島翔子／＼」

？「俺は坂本雄二だ」

『翔子に雄二ね』

翔「それで私たちに何のよう？」

『ん？いやそこらを散歩してたら叫び声が聞こえたからその場所に来たら君たちがいたって訳。なんで叫んだの？』

雄「それは俺がアイアンクローを翔子にくらって叫んだんだ」

『そつなんだ。何でそんなことしたの翔子？』

翔「それは／＼雄二が浮気したら」

雄「してねえ！！！！それにお前とはそんな関係じゃない！！！！」

『そうか浮気は駄目だよ雄二。それと翔子もそんなことして無理に相手を押さえ込んじゃ駄目だよ？本当に自分のことを好きになってもらいたいなら自分を磨いて相手を浮気させないようにさせなくちゃ』

翔「わかった／＼／」

『うん、いいこだ』

雄「無視か！無視なのか！！」

思わず翔子の頭を撫でてしまう。

翔「／＼／＼／＼／（気持ちいい／＼／／）」

『さてとそろそろ行くか』

良太は頭を撫でるのをやめた

翔「あ・・・」

雄「何だよもう行っちゃうのか良太」

『おうもつ少しこの町見て回って家に帰らないとな。』

翔「また・・・会える？」

『翔子が望むならいつでも会えるよ』

翔「うん」

『そうだ。』

雄・翔「「？」」

良太は突然ポケットの中を探り出した

『あつたあつた』

取り出したのは自分の家の住所

（何であるのが分かったんだよ！？B Y作者）

トリップしたらポケットに住所のメモがある。王道じゃねえか！

良太がなぜか持っていたメモ帳にその住所を移し

『はい』

二人に渡した。

翔「これは？」

『俺の家の住所。何かあつたらきなよ』

雄「わかった」

『じゃあな二人とも。』

翔・雄「「またね（な）」」

そしてまた町をうろつく良太

そのとき

？「きゃ」

たまたま視界の真ん中にいたピンクの髪の毛の女の子が転んだのだ

『大丈夫？』

さすがに目の前で転ばれたら助けられないわけにも行かない。

？「は、はい。えつとあなたは？」

『俺の名前は神炎良太。良太と呼んでくれ。君の名前は？』

？「は、はい、姫路瑞希です。」

『瑞希がよろしくね』

姫「は、はい。」

『それでもう大丈夫？』

姫「は、はいおかげさまで」

実は膝を少し擦りむいていたのだが良太こっそりと回復魔法をかけていた

『そうよかった（ニコ）』

姫「はう／＼／／／」

『それじゃあね』

姫「は、はいありがとうございます」

互いに手を振り合って分かれた。しっかりと自分の家の住所は渡しているあたりキツチリしている
またしばらく散歩していると

?1「や、やめるんじゃない姉上その関節はそれいじょうまがらなあ！
」

?2「何でやられてるのかわかってる？秀吉」

ああ、あの秀吉いじめかさすがにとめてやらんとかawaiiそうだな

『はいその双子さんストップ』

?2「あなただれ？（かつこいい／＼／＼）」

『俺の名前は神炎良太。良太でいいよ。君達は？』

優「私は木下優子／＼。この子は秀吉よ」

秀「木下秀吉じゃ。（ボソボソ すまん助かったぞ、良太。」

『おうよろしくな。んで優子何があったか知らんが家族に暴力はいかなあ』

優「ごめんなさい」

『ならよし、兄弟仲よくやんなよ』

そういつて優子の頭を撫でる良太

優「あ／／／／／」

『さてそろそろいかなとな。』

自分の家の住所を渡すことを忘れない良太

『それじゃあな優子、秀吉』

優「あ、うんまたね良太」

秀「またの良太」

そういつて自分の家へ向かう良太であった

そして

『ふうここがここでの俺の家か』

そこには一人で住むには大きい家があった

『とりあえず入ろう』

ガチャ

『へえー広いな』

そして数カ月後

明久達と遊んで帰ってきた良太

作（すっかりバカテスの世界を満喫してるな）

ガチャ

『ん？あれは？』

リビングに手紙らしきものがあつた見てみると。

桔「これを見てるってことは無事に着いたみたいね。私の用意した家は気に入ってもらえたかしら？なぜかは知らないけど10年前に送ってしまったみたいだから異世界に修行に行つて強くなつてきなさい♪それとこの手紙を読み終わったら他の異世界のどこかに転移するようにセットしてあるから。原作に絡みたいなら9年後までにこの次元に帰つてこれるよう修行することね。安心なさい平行世界には送らないから。それまでにここでの戸籍も用意しとくから。それじゃがんばってね」

ピカ

『へ？』

いきなり足元に魔法陣が展開し良太を光が包み込んだ
光が収まったときには良太はそこには居なかった

そして、手紙には少しだけ続きがあり

「まあ理由はなんとなくだけどね」

と書かれていた

それから8年後の12月

8年間家主が不在の家の前に魔法陣が現れる
その魔法陣から出てきたのは

『や、やっと帰ってきたー。期限ぎりぎりまで修行するもんじゃな
いな』

8年前桔梗に強制修行のために他の異世界に飛ばされてい良太であ
った

『さてとまずは文月学園に入学しないと』

戸籍は桔梗が用意してくれてるはずだ

『明久たち元気かな？』

そう言いながら良太の向かう先は文月学園

物語はこれから約1年後(?)にある振り分け試験から始まる。

第一章 第一話 振り分け試験の一日

『この調子なら2000点はかたいかな（ボソ）』

ん？こんにちは神炎良太です

現在振り分けテストの真っ最中です

とりあえず現実でテスト受けてる間、読者が暇だと思っから、この文月学園の説明をするぞ

まず、科学と偶然とオカルトによって開発された「試験召喚システム」

これはテストの点数に比例した強さを持った召喚獣を召喚するというシステムであり、これを使い近年の学力低下を打開できないか？とゆう考えの下実験的に設置されたのがこの文月学園だ

この文月学園には一年から二年にあがるときに振り分けテスト（今良太が受けているのがこれ）がある（振り分け試験のみならずこの学園の試験は問題数が無制限、時間は一時間でこれによって本人の学力しだいでも得点が稼げる）

その振り分けテストの結果によって二年の時のクラスと召喚獣の武器、服装が決まる

クラスはFからAの6クラスあり、Fが最低クラスでAが最高クラスだ

クラスによって生徒の学力に合った設備があり、その設備不満があるのなら先ほど紹介した「試験召喚システム（以後召喚システム）」を使用した「試験召喚戦争（以後試召戦争）」がある

これは基本的に下位クラスが上位クラスに仕掛けるものであり、下位のクラスが勝利した場合は上位の設備と入れ替え

上位のクラスが勝った場合は下位のクラスの設備がワンランク落とされるというものである

これで大体説明できたかな？

まあ当たり前なんだが桔梗からもらった能力のおかげで本気を出したら自分でもどれぐらいまで点が延びるのか分かん

ん？あの子辛そうだけど大丈夫かな？・・・あれは瑞希か？あれ？
そっぴや瑞希ってたしか・・・倒れるんだって倒れた！？

『「姫路さん（瑞希）！？」』

『おい、瑞希大丈夫か！？おい！！』

俺はすぐにかかけよって呼びかける。

ザワザワ

先「試験途中での退席は「無得点」扱いとなるがそれでいいかね？」

明「ちょ『ちよつと待つてくださいよ！！いくらなんでもそれはないんじゃないんですか！！』良太！？」

明久が俺の名前を読んだような気がするが無視だ

先「な、なんだね神炎。試験途中での退席は「無得点」それがこの試験のルー『ざけんな！！ルール？だから？そのせいで無茶して生徒が体調を崩しても良いって言うのかよ！！』」

先「な、何だね、その口の聞き方は、君も無得点扱いにするぞ」

『無得点にでも何でもしやがれ！！俺は瑞希を保健室に連れて行く』

そういいながら俺は瑞希を背中に背負う

ガラガラッ ピシャン

明「姫路さん・・・大丈夫かな（それに良太も10年前にいきなり消えて今までどこに居たんだろう？）」

キンコーンカーンコーン

保健室

姫「んっ？」

ようやく起きたか
かなり無理してやがったな

『よ、起きたか瑞希、そして久しぶりだな』

姫「りよ、良太君！？ここは？それに10年前にいきなり消えて今までどこに居たんですか！？」

『それが10年ぶりに会った親友に言う言葉かよ、それと落ち着け。ここは保健室、お前がテスト中に倒れたから俺が連れてきてやったんだ』

姫「でも私が倒れたのはテストの途中でしたよね？」

『そうだな、途中退席でテストは二人とも無得点。Fクラス行きは確定だな。あと瑞希、敬語はなしじゃないとずっと無視するぞ』

姫「そうなんで『敬語』」

姫「あ、ごめん。そういえば良太君のほかに誰か私のことを呼んだような」

『ああ、あれは明久だ』

姫「吉井君だったんだ。今度お礼言わないと。でも私のこと覚えてるかな？小学校以来だし」

『気にするなって、明久はバカだけど優しいし、瑞希みたいに可愛い子のこととは絶対覚えてるからな』

姫「（か、可愛い／＼／＼）うん、そうだよ。それに吉井君が私のこと覚えて無くてもお礼は言えるし」

『お、なんだ？瑞希は明久狙いか？（ニヤ）』

姫「ち、ちがうよ／＼／＼！確かに吉井君は優しいし好きな人はいるけどそれは吉井君じゃないよ！」

本当は明久だと知っているがそこまでは追求しない

『へえ。瑞希にそんなに思われるだなんてそいつは幸せ物だな。俺は応援してるぜ』

姫「そ、それは／＼／＼（良太君だなんて言えないよ／＼／＼）」

『まあそれは置いといて、瑞希そろそろ帰らなくて良いのか？』

姫「え？」

たしかテストが終わったのが15時で今は16時45分か結構話し込んだな

姫「ああ！早く帰らないと鞆は教室に置きっぱなしだし」

『ほれ、寝てる間にもってきといたよ。ついでだし送っていくよ』

姫「この時間なら一人でも帰れるよ」

『こっちは気にするなつて。それに最近瑞希の家の近くで不審者が出たらしいからな。そんな危険なときに瑞希を一人でかえせるかつての』

姫「ええ！？だったらその・・・おねがいしようかな？」

『かしこまりました。お姫様』

姫「／／／・・・あ、そうだ良太君」

『ん？』

姫「おかえり」

『・・・ああ、ただいま』

その後瑞希と雑談しながら帰り家まで送り届けた。途中で何回か顔が赤くなつてたがまだ熱が残つてたのか？

その帰り道

ザッザッザ・・・ピタ

『おい、その瑞希の家からつけてきてる変質者、姿出せや』

電信柱の陰に隠れながら付けるって古典すぎだろ

変「よく分かったな。お前が瑞希ちゃんの近くに居るのが悪いんだ
かく」御託は良いからさっさとこいよ。へ・ん・し・つ・しゃ・さ
ん」

変質者だと思ったら瑞希のストーカーかよ

あいつも大変だねえ

変「変質者じゃねえ！！こうなったら痛い目を見てもらっぜ！！！」

変質者はナイフを持ってそのナイフを突き刺そうとしてきた

さて瑞希のストーカーなら遠慮はいらないな

久々に本気で仕留めるか、たまには本気だしとかないと
体が鈍っちゃうし

なにより俺の大切な友達に害が及ぶからな

俺は拳を構える

神炎流拳術

『悪いが、本気で行かしてもらっぜ！！神炎流を相手にして怪我を

しても怨むなよ！！！」

俺はそう言つと脳のリミッターと体のリミッターを外した。

神速

リミッターを外すと視界の色がカラーから白黒に変わり、周りの動きがゆっくりになる

俺は体を右に開きながら腰を落とし変質者の左腕が伸びきったところで変質者の顎に左アッパーを出し、宙に浮かばせる。そしてすぐに跳躍しながら回し蹴りを下段、上段、そして俺の目の前で横向きになったところで良太の足元に魔方陣らしきものが浮かび良太はそれを足場に使い変質者をさらに上に蹴り上げた

エア・ハイク

飛燕三連脚

そしてもう一度エア・ハイクを使い軽く跳躍そして上から変質者の腹に拳を入れて地面に叩き落す。

その勢いを利用し回転しながら変質者の鳩尾に回転の勢いを加えた踵落としを決める。

獅子連弾・改

この間約3秒

このコンボを叩き込まれた変質者は呻き声を出す暇も無く気絶した変質者が気絶したのを尻目に良太はリミッターを掛けなおし、携帯で警察を呼ぶ

『あ、警察ですか？今変質者を捕まえたので引き取ってもらえませんか？はい、住所は……』

数分後近くの交番から警官がやってきてストーカーを引き取った

こうしてテストの日は終わった。俺も学校に飽きてきたからかったらと思うていた

だが、二年になってからの学園生活が退屈じゃなく最高に面白くなると考えると顔が緩んでしまうのだった

第一章 第二話　再会した親友

俺がこの文月学園に入学してから2度目の春が訪れた
校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎えるための桜が咲き誇つて
いる

別に俺は花を愛でるほどの雅な人間じゃない
今俺の頭の中を閉めているのは、確定したFクラスへの不安と不安
とちよつとの期待であつた

噂に聞けばFクラスは設備はみかん箱とござ
壁はぼろぼろ窓も破損がすごいらしい

ついでに去年のFクラスの人はその精神性にきつかったらしく、
必死で勉強してクラスアップしたらしい
いくら先を知ってるからと言つてもそんな噂があつたクラスに期待
を持つほうが無理である

？「神炎、姫路。遅刻だぞ」

不意にそんな声が門の右側から聞こえた。

『すいません西村先生。寝坊しまして。あと気のせいじゃなければ
瑞希の名前が聞こえた気がしたんですけど？』

そう、今声をかけてきたのはバカテス名物（？）西村先生通称鉄人
だ。鉄人の由来はトリアスロンが趣味だかららしい
本人にそれを言ったら怒るけど

それに今瑞希の名前が聞こえてきたのは気のせいですよ？先生

姫「はあ、はあ。お、おはようございます、西村先生、良太君」

『のわあ！！瑞希いつからそこに？』

鉄「俺が声をかけたときには居たぞ。神炎、姫路お前らのクラスはこれに書いてある。俺個人としては非常に残念だったんだがな」

西村先生がそう言いながら封筒を箱から取り出して俺たちに渡した。

『しょうがないっすよ。無得点じゃFクラス以外は無いですし』

姫「あ、良太君急がないと。それじゃあ西村先生失礼します」

『そっだな、それじゃあ先生失礼します』

頭を下げたあと瑞希の後を追う

俺の所属のFクラスは旧校舎側にあり、瑞希に置いてかれた俺は渡り廊下を爆走中である

もちろん一般男子の平均のスピードで

ドタドタドタ

・・・うんHR中のクラスに迷惑だ。

前方に瑞希を発見！！そして二人同時にFクラスの扉に手をかけた。

ガラガラッ

『「あの、遅れて、すいま、せん」』

一応、急いできたっていう演技はしておく

理由はなんとなくだ

クラスは俺と瑞希の登場にみんな唖然としている
クラスで唯一唖然としてなかった福原先生が

福「ちょうどよかったです。今丁度自己紹介しているとこなので、
姫路さんと新炎君もお願ひします。」

姫「は、はい。姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

『新炎良太だ、よろしく頼む』

あれ？まだ固まってるし、えーっと明久と雄二と秀吉はと、お、い
たいた

明久はこの前あったのに固まってるってことは、あのやろう忘れて
やがったな

雄二と秀吉はやっぱり固まってる

F1「はい、質問です」

姫「な、なんですか？」

F1「何でここに居るんですか？」

普通なら失礼極まりないな質問だがこれはFクラス全員の疑問とも
いえる

なぜなら俺は平均的な学力（実際は学園一というかこのクラスに落
とされるまでバカなら一度は噂になっている・・・筈）で瑞希は学
年二位の実力の持ち主だ
Fクラスに居るのがおかしいのである

『俺も瑞希も当日体調を崩してしまつてな。それで無得点扱いだ』

その答えを聞いて納得したFクラスのみんなは試験の言い訳を始めた
いやいやいくらなんでも「彼女が前日寝かせてくれなくて」は無い
だろう

本当だとしても人のせいにするなよ・・・まあここには雄二と明久
が居るんだあの二人ならこの状況に満足しないで、試召戦争を仕掛
けるしな

姫「で、ではよろしくお願いします」

『よろしくな』

そういつて俺は瑞希と雄二と明久の隣に座つた（康太と瑞希の間で
もある）

ここでようやく我に返つた雄二が

雄「良太、いきなり消えて10年もどこに行つてた。翔子が心配し
てたぞ」

それに便乗して明久も

明「そ、そうだよ。良太今までどこいつてたの？10年も居なくな
るだなんて良太が居なくなつたときの姉さんを慰めるの大変だつた
んだから」

そうして二人は顔をあわせ

明・雄「ってなんで雄二（明久）が良太を知ってるんだよ!？」

それを聞いた俺は

『あー悪かったな。この10年間いや去年には帰ってきてたから9年か、その間はいろいろと世界を回って勉強してたんだよ。それと瑞希とかと親友だってことを黙ってたのは面白そうだったから』

ま、世界は世界でも異世界だがな

そついやなのは達は元気にしてるかな？そろそろStsに入ってるはずだし

つかあのあと（自宅からの強制転移）一番最初にたどり着いたのがなのはたちの世界ってある意味幸運だったかもな即効でいき倒れて高町家に転がり込むことになったけど

しかも一週間もしないうちにジュエルシード事件に巻き込まれたし・
・

そんなことを考えてると瑞希が服の裾を引っ張り

姫「良太君、二人と知り合い？」

と上目遣いに聞いてきた。ちくしょう可愛すぎだろ／／／

『あ、ああこの二人とは親友』

雄「ああ、それなら名前で呼び合ってるのも納得した。ところで姫路」

姫「は、はい。なんですか？えーつと・・・」

雄「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

姫「は、はい姫路ですよろしく願いします」

そういつて深く頭を下げる瑞希

おお、ちゃぶ台に頭がぶつかりそうだ

そういえばFクラスの設備を説明してなかったな

まず床の変わりに畳であるそしてボロボロでかび臭い

次に壁

落書きやひび割れが無い箇所を探すほうが難しいな

そして窓

隙間風が入ってきそうで寒そうだつか隙間風が入ってきて寒い

さらに机の代わりにちゃぶ台。物によっては足が折れている物もあるようだ俺のは・・・比較的ましだ

最後に座布団

これは綿が少なかったりボロボロで綿が出たりしてる奴があるようだ

雄「姫路、明久がブサイクですまん」

ん？どうやらいつの間にか明久が話しかけて雄二にいじられてるようだ

姫「そうでもないですよ！ブサイクどころかその・・・むしろ」

雄「まあそういえば見てくれは悪くないよう見えるかもしれない。俺の知人にも明久に興味を持っている奴が居たような気もするし」

ん？これはあれか？明久に興味が会った奴・・・ああ、あのホ・・・
ゲフンゲフン同姓恋愛者か

『俺の知人にも居るぞ多分雄二と同じ人だ』

明「え、だれ？」

『「確か、久保」』

明「え、どの久保さんだろ？」

『「利光だったかな」』

久保利光 性別♂

明「・・・・・・・・・・」

『おい明久。声を殺してざめざめと泣くな』

こいつもう嫁にいけないとか思ってるんだよな
まさか声に出して言わないだろう

明「僕もうお嫁にいけない。」

まじで声に出していいやつた!!!!

雄「半分冗談だ安心しろ」

明「え？残りの半分は？」

バンバン

福「はいはい、その人たち、静かにしてくださいね」

あれ？確か福原先生が注意するのってもうちょっと後だったはず
やっぱ俺がこの世界に来て少しずれてるか

『あ、すいま』

バキィッ、バラバラ

教卓がくずれた、まああれだけボロボロだったらこうなるか

福「替えを用意してくるのでしばらく待っててください」

『あ、先生俺がいつてきますよ』

福「そうですか？ならお願いします」

『はい』

そういつて席を立つ前に

『あ、雄二後で話があるから』

しばらくして教卓を持って戻ってきたら明久と雄二が何か話していた

『何してるんだ二人とも？』

明「あ、良太。実は」

ふむふむ、話の内容を簡単に言つとこのクラスの設備だと体の弱い
瑞希に負担がかかるからそれを助けるためにAクラスに試召戦争を

仕掛けるのか面白そうだな

それにあいつにはこのクラスの設備はきついだろうしな

『よしその悪巧み、一緒にやってやるぜ。それに俺もそのことを話そうと思ってたしな』

雄「なるほど良太は姫路の友達だからあいつの体が弱いことを知ってるのか」

『そういうこと。それにあいつは大切な人だからな』

雄「ほほう、良太も姫路が好きなのか？だから試召戦争をしようとする？」

『確かに瑞希のことは好きだが今は友達としてだぞ？・・・まああいつの為なのにも違いないが』

雄「ふーん。まあいいかそれよりそろそろ教室に戻るぞ」

そして教室に戻り、雄二の自己紹介の番になった

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表とでも坂本とでも好きに呼んでくれ」

おおさすが雄二小学校のときに神童と呼ばれてたことはあるな、なんとなくだが威厳がある

雄「さてみんなに一つ聞きたい」

そっいつて雄二はみんなの視線が自分に集まったのを確認した後、

まあたしかにな・・・

雄「みんなの意見はもつともだ。そこでこれは俺とそして学年一の頭脳を持つ良太の提案だが――」

ちよつとまで！何でここで俺の名前が出てくるんだよ！しかも雄二のやつ学年一の頭脳をもつて所だけを強調しやがった！！まあいい、ならおれはあいつの最後の台詞に合わせるだけだ。

雄「――FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

ここで俺達は戦争の引き金を引いた

第一章 第三話　開戦！試召戦争！……（前書き）

えー、タイトルに間違いがあったことに評価でのコメントで気がつきました

それにともない、小説を少し、修正させていただきました
大変失礼いたしました

プロローグの前書きも修正させていただいたのでよろしければそちらも読んでいただけるとありがたいです

こんな風に間違い等々大量にある作者ですがこれからもこの小説を読んでいただけたらうれしいです

第一章 第三話 開戦！試召戦争！…

Aクラスへの宣戦布告

俺にとつては知ってたということと自分の頭脳の優柔さが分かつて
いる為（決して慢心ではない）驚きはしなかったが他のFクラスの
みんなはそうではない

F5「勝てるわけが無い」

F6「これ以上設備を落とされるのはいやだ」

F10「姫路さんがいたら何もいらない」

・・・おい、今姫路にラブコール送った奴出て来い
混沌に送ってやるから

さて、ここでAクラスとFクラスの通常の場合の戦力差を示してみ
ると

A1:F5

これでも負けるかもしれないのだ、非難の声が上がるのは当然であ
る（良太が本気を出したら話は別だが）

雄「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

F1「何を馬鹿な事を」

F3「出来るわけないだろう」

F4「何の根拠があつてそんなことを」

否定的な意見が教室中に響き渡る

確かに平均にも届いてない点数のFクラスではAクラスにどうやっても勝てないだろうしかし

雄「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことが出来る要素がそろっている」

そう雄二の言う通りだ。このクラスのメンバーなら・・・

雄「それを今から説明してやる」

昔と変わらない不敵な笑みを浮かべる雄二

雄「おい、康太。良太が邪魔なのは分かるがそこまで必死な形相をして畳に顔をつけて姫路のスカートを覗こうとしてないで前に来い」

康「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

姫「は、はわっ」

瑞希は慌ててスカートの裾を押さえ、って瑞希さん？なんでこっちに擦り寄ってるんですか？・・・ゲフン話を戻そう。何とか俺の隣にいる瑞希のスカートを覗こうとしている不届き者・・・もとい保体の成績が総合の8割をしめていて、正直小説を読んだときはそのエロへの探究心（？）には尊敬の念も抱きかけてた。さてその人物とは・・・

明「流石だ。あそこまで恥も外聞も無く覗こうとするなんて・・・手鏡を買って覗き込むことしか思いつかない僕とは大違いだ」

・・・その前にこいつに制裁を加えないとな。まあそれはあとでやっとかとして

雄「土屋康太。こいつがあ有名な寛黙なる性識者だ」

康「・・・！！（ブンブン）」

土屋康太の名前自体は有名じゃないだがその後のムツツリーニは違う。これは男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を持ってその名を知られている

F5「ムツツリーニだと・・・？」

F6「馬鹿な、やつがそうだというのか・・・？」

F9「だがみる。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・」

F7「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

さて、よく意味が分かっていた方々も大体予想がついただろうムツツリーニとはムツツリスケベという意味である！！！！もちろんこいつもこの後で制裁を下しとくのも忘れる気は無い

雄「そして姫路に良太。この二人は説明するまでもないだろううちのクラスの主力だ。皆だつてその力をよくしってるはずだ」

あれ？なんか言い方に違和感が？この言い方だと・・・

F2「な、なるほど俺たちには最強の味方がいるというわけか」

おっとここで釘を刺しておかねば

『先に言っておくが、その点数は無得点の為適用されてない』

クラスの士気が少し下がる・・・

雄「そ、それに木下秀吉だっている」

雄二は士気をとりもどすために主力メンバーの紹介を続ける

秀吉は演劇部のホープのこととその姉（優子）で有名なのである

雄「それに島田美波もいる。明久を殺すことに関しては右に出るものはいない」

明「いや雄二その紹介はどうかね？」

美「いやあ」

明「島田さんも照れるところじゃないよね」

明久の必死の突っ込みもあり先ほどよりも少し士気が上がってきている

雄「そして俺も全力を尽くす」

雄二も神童とまで呼ばれてた男だそして士気は最高潮に達する

雄「さらに言えば吉井明久だっている」

・・・・・・シンーーーーー

そして90度の角度で一気に落とした
うんやっぱり明久の名前は落ち扱いか

F4「誰だよ吉井明久って」

『聞いたこと無いぞ』

明「ほら、せつかく上がってた士気に陰りが・・・って良太は僕の
親友でしょ!!」

きつちりつつこむなあ

雄「知らないなら教えてやるこいつの肩書きは観察処分者だ!!」

・・・・・・

F6「それってバカの代名詞じゃなかったか？」

明「ち、ちがうよちょっとお茶目な16歳につけられる愛称で」

明久・・・それは見苦しいぞ

雄「そうだバカの代名詞だ!!」

明「肯定するなバカ雄二!!」

観察処分者・・・成績が著しく悪くまた学習意欲に欠けるものが任

命されるぶつちゃけ先生の雑用

すこし詳しく説明するのならおもに力仕事などを特例の召喚獣でこなす

特例召喚獣とは特別に物に触れるようになった召喚獣である（通常は触れない）

姫「すごいですね。召喚獣って力持ちって聞きましたからそんなことが出来るなら便利ですね」

明「そ、そんなことはないよ」

その通りなのである。俺は白金の腕輪を自作してあるからいいが（それでも主に家での鍛錬のときにのみ使用する）

明久の場合はまんま教師の雑用だけなので便利でもなんでもないそれに特別召喚獣はその痛みや疲労の何割かがフィードバックするため明久は試召戦争ではおいそれとは召喚できない（俺は最前線に出るつもりだが）

それを知ってるのか雄二は

雄「気にするなどうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

明「雄二そこはフォローするべきじゃない？」

きっぱり明久を雑魚扱いにした

雄「とにかく、俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

明「うわ、すごい大胆に無視された」

これはほっとくか

雄「皆、この境遇には大いに不満だろう」

F【当然だ！！！！】

雄「ならば全員ペンを執れ！！！！出陣準備！！！！目標はDクラスだ！！！！」

F【おおーーーーー】

よし俺は・・・

『明久、Dクラスへ宣戦布告をしにいつてこい！！』

明「何で僕が行かないと『いけば瑞希が惚れる』いつてくるよ！！」
かもよ・・・』

ガラッ バタバタバタ

最後まで言い切ってないのに行っちまったよ・・・

雄「良太・・・明久は何処にいったんだ？」

『Dクラスに宣戦布告（ニヤッ）』

雄「そうか（ニヤッ）」

数分後・・・

ガラガラ　ゴロゴロゴロ

明「騙されたあ！！！！」

明久がボロボロになりながら転がり込んできた

雄「『やはりそうきたか』」

俺と雄二のユニゾン。やっぱこうなったんね

明「やはりって何だよ！使者への暴行は予想通りだったてこと！？」

雄「『当然だ。これぐらい予想できないで代表（雄二の親友）が勤まるか』」

明「少しは悪びれるよ！」

悪びれてその怪我がどうなったらいくらでも悪びれるよ？

『遊んでないで体を鍛えてたらこんなことにならなかったんじゃないか？昔、俺は警告したはずだが？』

明「うつ。で、でもそんな昔のこと・・・」

『お前は貧弱すぎる。精神はへたれの部分以外なかなかだが、体を

鍛えておかないと将来困ることが多いぞ?」

明「・・・・・・・・」

今の言葉は俺が異世界への強制転移をされる前の2週間ほど前に遊んだときに言った言葉である

姫「吉井君、大丈夫ですか?」

ボロボロの明久に心配になったのか瑞希が声をかける

明「あ、うん、大丈夫。ほとんどかすり傷」

美「吉井、本当に大丈夫?」

島田も明久に声をかけている
さて、あれに被せますか

明「平気だよ。心配してくれてありがとう」

美「そう、よかった・・・『うちが(俺が)殴る余地はまだあるんだ・・・・・・・・』」

明「ああっ!もうだめ!死にそう!」

殺気一歩手前の気を軽く当ててながら言ったら腕を押さえ転げまわる明久

雄「そんなことはどうでもいいから今からミーティングするぞ」

ガラ

雄二が扉を開け教室を出る
確か屋上に行くんだよね

姫「良太君・・・」

この後の展開を思い出していると瑞希が俺に何かを懇願するような
目をしている

・・・はあ

しゃあねえ、やるか

・・・ファーストエイドでいいかな？

我ながら甘いな

『明久ちよつとじつとしてろよ？』

明「え、何良太？」

『癒しの力よ（ボソッ ファーストエイド』

明久の体にあるかすり傷の痛みだけを消す

詠唱した理由はなんとなくだ（怪しまれることに気づいてない）

明「あれ？痛くなくなった？」

秀「良太何をしたんじゃ？」

あれ？怪しまれた？・・・よしそれっぽいことって誤魔化そう

『ん？昔瑞希に使ってやってた魔法。ま、これは詠唱を交えて深層意識にこれは痛みをなくす物だって思わせることで実際に痛みを感じなくする物だな。だから子供や明久みたいに自己暗示やらかかりやすいやつに効果がある』

即席にしてはまあまあだな

まあ明久は騙せるな

これでかすり傷まで直してたら本当の魔法だって説明しないといけないところだよ

秀「それにしても明久災難じゃったな」

秀吉が明久の肩をたたき慰める

康「……………（サスサス）」

先ほどの後があつた場所をさすつてる康太

『畳のあとなら消えてるぞ康太』

康「……………（ブンブン）！！」

『いや今更否定しても、お前がムツツリなのは周知のことだから』

康「……………（ブンブン）！！」

『ここまでバレてるのに否定し続けるなんて、ある意味すごいよな』

康「……………（ブンブン）！！」

『――予想の色は？』

康「みずいろ」

やっぱ即答か

『やっぱムツツリーニの二つ名を持つてる康太はいろんな意味ですごいな』

康「……………（ブンブン）！！」

『さてとそろそろいくか。ほれ明久、秀吉、康太、瑞希、島田いくぞ』

逃げないように明久の腕を引っ張りながら着いてくるように告げる
横に島田がならんだ

『そついやお前とは自己紹介してなかったな。俺は神炎良太。好きに呼んでくれ。出来れば名前がいいけどな』

本人は気づいてないがこのときの良太の表情はどっかのハーレム小説主人公並みの笑顔である

しかも良太の容姿は普通の状態でも大抵の人は顔を赤らめてしまうものである
したがって……………

美「う、うちは島田美波／＼／＼あの……………リョウってよんでいい？」

このように顔が赤くなるのである

『もち。俺も美波ってよんでいいかな？』

美「う、うん／＼／／」

『美波？顔が赤いけど大丈夫か？』

美「だ、大丈夫よ／＼／」

『そうか？きつくなったら言えよ？』

美「う、うん・・・／＼／／（な、なんで顔が赤くなるのようちが好きなのは吉井でしょ！！）」

そんな会話をしてるうちに屋上に到着していた

ガチャ ガンッ

扉が開くと同時に空からまぶしい光に2名を除き皆目を細めている
目を細めてないのはこういうことに慣れている良太と心地いい風と
共にはためくスカートの中を覗こうとした不届き者・・・康太がコ
ンクリートとキスをしている

雄「明久、宣戦布告はしてきたな」

雄二がフェンスの前に腰を下ろす

明「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

俺たちもそれに習い各々腰を下ろした

皆康太がコンクリートとキスをしていることには突っ込まないのか

美「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね」

雄「そうなるな。明久、今日のお昼ぐらいはまともなものを食べるよ?」

明「そう思うならパンでもおごってくれとうれしいんだけど」

姫「えっ? 吉井君ってお昼食べない人なんですか?」

明「あや。一応食べてるよ」

雄「……あれは食べてるといえるのか?」

明「何が言いたいのさ」

雄「いや、お前の主食って……水と塩だろう?」

明「きちんと砂糖だって食べてるさ!」

『明久、それは食べるとは言わないぞ』

秀「舐める、が正しい表現じゃな」

雄「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

明「し、仕送りが少ないんだよ」

『明久。仕送りがもらえるだけでもお前は幸せなんだぞ？世の中親が居なくて養ってももらえないやつなんてそれこそ想像がつかないくらいにいるからな。それに仕送りが少ないと感じたらバイトをすればいいだろう？』

明「う……………」

姫「……………あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

明「『彘？』」

突然の爆弾宣言に我が耳を疑った

そーだった！！瑞希のブラック弁当イベント忘れてた！！！（知ってるだけでなく十年前に被害に遭ったため若干トラウマ化）

料理教える前に飛ばされたから悪化してるのは確実やん！！！！

『やめろ瑞希！！弁当なら俺が「良太は黙ってて！！」」

明久が止めに入りやがった！！こいつ、そこまで臨死体験がしたいか！！！！

雄「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

明「うん！」

明久は嬉しがっているがそれは地獄への入り口だ
ここまできたらなんとしても明久だけに被害を留めないと……

美「……………ふーん。瑞希って『美波ちよいこっちこい』なにリヨウ？」

被害が拡大する発言をしようとした美波を皆とは少しはなれたところを呼ぶ

『美波、瑞希の料理はな．．．（ぼそぼそ）』

美「本当に？」

『ああ。俺も被害に遭ったことがあるからな』

美「そうなんだ．．．」

ああ、美波が明久に同情してる
皆のところに戻る

『ただいま』

雄「おう、良太何の話をしてたんだ？」

『ああ、ちよつとな』

心なしが瑞希の目が怖い．．．

明「姫路さんって優しいね」

姫「そ、そんな．．．」

明「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君の事を好き」明久、
今ふられると弁当がなくなるぞ』にしたいと思ってました」

秀「明久。それではただ欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

雄「『明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな』」

雄二と声がそろつ。こいつとは考えが良く会つのだ

明「だって……お弁当が……」

うーん教えないほうがいいよな
地獄への入り口だけど

雄「さて、話がかかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

かなり逸れてたよな

秀「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

まあ普通はそうだよな

でも今回は瑞希の体調が厳しいだろうし、だからといってAクラスに真正面から試召戦争を仕掛けても勝てないしな

『まずEクラスは敵にならないから戦争を仕掛けない。そしてDクラスに戦争を仕掛けるのはFクラスを試召戦争に慣れさせる意味合いもあるがこれはさつき雄二が言いかけたAクラスに勝つ為の布石でもある。そして今の状態ではAクラスにしかけても勝つことは出来ない。だがこれだけは言える……俺達のクラスは条件・作戦そ

して士気が整えば・・・最強だ。だろ？雄二」

雄「ああ」

姫「あ、あのっ！！」

瑞希にしては珍しい大きな声
どうしたんだ？

『ん？どうした瑞希？』

姫「えっと、その。さっき言いかけた、って・・・良太君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

雄「ああ、それが、正確には明久もいたけどな。それはついさっき、姫路の為に良太に相談されてな」

こいつ俺の名前を強調しやがった！！確かに相談をしようとはしたけど結果的には明久が雄二に相談しただろ！！って瑞希！顔を赤らめてこつちをチラチラ観るなよ！！あーなんか明久の視線が痛い

明「そ、それはそうと！」

ナイス明久！！

明「さっきの話。Dクラスに勝てなかったら意味無いよ」

『負けるわけ無いだろ？』

戦力がまったく知られて無いこの状況でDクラスに負けるほうが難

しい

『さっきも言っただが俺達は最強だ。この言葉が信じられないか？』

明「そ、そんなことは無いけど・・・」

『ならそれでいいだろ？さて・・・雄二作戦を説明してくれ』

雄「ああ、それじゃあ作戦を説明しよう」

気持ちいい風がそよぐ屋上で、俺達の戦争の勝利への準備が進んでいった

昼休み終了直前

今俺は何故かFクラスで開戦前の作戦部隊分けの発表と演説をしている

『諸君！知つての通りこれより我々FクラスはDクラスに対して試召戦争を仕掛ける！そのための部隊の隊長を確認する。まず前線部隊！木下秀吉！！！！』

秀「精一杯やらせてもらおう」

『次に中堅部隊！観察処分者 吉井明久！！』

『前線部隊！敵と接触するまで全速力で走れ！！やられそうになったら順次中堅部隊と交代だ！後ろは気にするな！俺がフォローに入る！！中堅部隊は前線部隊の状況を常に把握！状況に応じて動け！！』

Fクラス【了解！！】

いまさらだが代表じゃなくて俺が指示出しているの？・・・いまあいいや

『さあ。戦争を始めようか』

今はDクラス戦に集中しよう

第一章 第四話、良太、力の片鱗を見せること（前書き）

今回から本格的に戦闘シーンが入ってきます

そこで一つ注意があります

主人公が戦闘で自重しません

もう普通にばった敵を倒しています

そして技も自重しません

下手をしなくてもテイルズ系の技が中心になります（だってテイルズの技大好きなんだもん）

ごらんになる際にはこの点にご注意ください

第一章 第四話 良太、力の片鱗を見せること

試召戦争ルール

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目においてもっとも近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死にいたると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召還獣を喚びだしたにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北を持つてのみ決定される。この勝負に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を

常に意識すること。

以上が試召戦争の大まかなルールである（wikiから引用）

『秀吉たちが戦闘には入ったか・・・』

今俺が居るのは秀吉たち前線部隊と明久たち中堅部隊の間にある渡り廊下を超えた所だ

ここから前線の様子が見えるがおされ気味のようだ
ほら負け犬（ひどー！）の悲鳴が

鉄「さあこい！負け犬が！」

F4「て、鉄人！？いやだ！補習室はいやなんだ！」

鉄「黙れ！捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講習だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷり指導してやるからな」

F4「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

鉄「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わるころには趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立てあげてやろう」

F4「お、鬼だ！誰か、助けっーいーやアアー（ボタン、ガチャ）」

西村先生それって・・・洗脳の間違いじゃあ・・・

おっと明久に釘刺しとかないと
後ろに振り返って

スウ

『明久ー！言い忘れたが退避したら雄二からお前に制裁を下す許可を貰ってるからなあー！！それと美波！もし明久が退避するようなそぶりを見せたら遠慮なく目潰しを頼む！！』

美「わかったー！任せてリョウ！！」

明「し、島田さん！？ギャー」

よしと

後ろで明久が騒いでいるが無視無視とそろそろ秀吉たちが下がってくるか

あいつらのところにいかねえと

『秀吉！ここは遊撃部隊が抑えるからお前らは中堅部隊に援軍を要請して補給に戻れ！！』

秀「そんな！おぬし一人では無茶じゃ！」

『無茶でも何でもやるんだよ！ごちゃごちゃ言う前に下がれ！！』

秀「くつ。すまん良太」

『気にすんな。このための遊撃だ』

秀「全員下がるんじゃ！ここは良太に任せるぞ」

秀吉の一言で下がっていく前線部隊のやつら

さてと今回は学年主任の高橋先生が立会だから総合科目か・・・
しかも今回は多対一・・・あれにするか

『高橋先生！Fクラス神炎良太この場に居るDクラス全員に勝負を仕掛けます！試獣召喚（以後サモン）！！』

その言葉と共に俺の足元に幾何学的な魔方陣が現れ、そこから俺の召喚獣が召喚される

俺は召喚獣の両腕を両腰に当てさせコンタミネーションを使い両腰から俺が最も得意としてる獲物の双剣・・・玄武刀と白虎刀を取り出す

神炎流双剣術

D【な！？】

驚いているDクラスの連中を無視し俺は名乗りを上げる

『Fクラス遊撃隊長 神炎良太、貴行等にお相手を願う。いくぞDクラス点数の貯蔵は十分か？』

名乗り終わると思回路を戦闘に切り替え、それとほぼ同時に再起動したDクラスが召喚を始める

《Fクラス 神炎良太 VS Dクラス×15
総合 1582点 ? 》

あらら（汗）人数が多すぎて向こうの点数が表示されねえよ・・・
まあいいか、明久たちが来る前に出来る限り減らす！！
召喚獣に構えさせ俺は召喚獣を突っ込ませる

D1「な！早い！？」

『遅い！！』

一人をすれ違いざまに切りつけ戦死させる
敵は4人で囲みに来てるか・・・なら！！

『甘い！蒼破刃、さらに！閃空裂破！！』

D2・3・4・5「くわあ！！」

振り向きながら衝撃破を放ち、その勢いのまま回転し剣圧で相手を
浮かしながら人体の急所を切り裂く

『ふっ！「はあ！」甘いな。不意を突くなら声を上げるな、気配を消せ』

D 6「ぐ！」

後ろから切りつけられるが気配を察し、回避して切り返し戦死させる

『幻狼斬！』

D 7「ぐわあ！」

高速で相手とすれ違い二度切り、後ろから一撃を入れすぐバックステップで距離をとる

『どうした？もう終わりか？貴様らは格下のFクラスにも勝てんのか？』

塚「く、もう少し持ちこたえろ！もうすぐ近衛部隊が援軍にくる！」

どうやら塚本が援軍を要請したようだ。親衛隊か・・・召喚獣にもあれが効くか試したいし・・・よし！親衛隊が来るまで粘ろう！！明久たちはもう少しかかりそうだしそれに向こうは援軍が来るまで手を出してこないみたいだ

D 8「待たせた！近衛部隊4名到着だ！」

きつた来たっ♪

んじゃ相手してもらおうか

コンタミネーションを使い双剣を戻し拳を構える

『神炎良太・・・我が拳にて貴行等三名の相手をしよう』

D 8・9・10・11「「「サモン!!」「」」

《Fクラス 神炎良太 VS Dクラス×4
総合科目 1582点 ? 》

やっぱ二人までしか同時に表示されないのか?・・・学園長と相談して強化しようかな?つとそれより実験、実験♪
相手がまだ固まっているところに召喚獣を滑り込ませる

『三散華!さらに!奥義 皇破!!!』

D 8「え!?!」

拳、肘、アッパーの三コンボのあと掌底を相手の心臓の位置に合わせ内部に衝撃を送る。うん、どうやら召喚獣が相手でも行けるようだ

『甘いぞ!!その軌道は乱れその姿は舞うが如く!!秘奥義 皇破・乱舞!!!』

D 9・10・11「「「な!?!」「」」

瞬間的に神速を使い掌底ではなく拳で外部と内部に衝撃を与え吹き飛ばす

そしてコンタミネーションを使い左肩から3本セットのダガーを取り出し、後ろに投げ目標にあたる

?「「「え?」「」」

そして俺は視線を前に向けたまま助けた人物に声をかける

『美波！！大丈夫か？』

美「え！？今のリョウがやったの？」

『そうだ。っと今投げたダガーをこっちに投げしてくれるか？』

美「う、うん」

美波から戻ってきたダガーをしまい中堅部隊に声をかける

『中堅部隊！お前たちの仕事は分かってるな？12人潰したんだこれで全滅したら制裁を下すぞ！！』

F【了解！】

そして明久を殺そうとしてる美波に声をかける

『美波、明久を殺すのは後にしろ。科学の点数が減ってるんだから補給しに俺と戻るぞ』

美「そうね。わかったわリョウ」

そうして本陣へと戻っていった

美「あ、あのリョウ」

本陣へ戻る途中美波が声をかけてきた

『ん？どうした』

美「さ、さっきは助けてあげてありがとう」

『ああ、気にするな。仲間を助けるのは当然だろ？』

美「・・・仲間じゃなかったら助けてくれないの？（あれ？ウチな
んでこんなことを聞いているの？）」

『そんなこと無いぞ。美波は大切な人（と書いて友達と読む）だから出来る限り全力で守るさ』

美「え・・・あ、ありがとう／＼／」

また美波が赤くなった。うーんなのはたちもよく赤くなったけど大丈夫って言うてたし・・・うん大丈夫だろう

『ういーっす戻ってきたぜー』

雄「おう、良太随分活躍してきたな」

『はは、まぐれよまぐれ』

雄「まぐれで12人も倒せるかよ」

本陣に戻ると雄二が出迎えてくれた。でもな雄二、Dクラスレベル

ならこれでも少ないくらいだぜ？伊達に次元世界を修行してきたわけじゃねえよ

・・・強制だったけど

美「それじゃあウチはテスト受けてくるね」

『おっ』

美波も補給を受けに行き少し手持ち無沙汰だ

『なあ雄二俺は次はなにを「代表、神炎！」どうした？』

須川が急いだ様子でやってきた。まさかあそこまで人数減らしといて全滅しかかっているのか？

須「吉井が教師の誘導のために偽情報を要請してきた内容の指示を！」

わおまじかよ

これが世に聞く修正力ってやつか？

『よし。やつらは短期決戦のために船越先生を呼んでくるはずだ。

吉井をだしに船越先生を呼び出せ！生徒と教師の垣根を越えた話があると言えは十分だ』

須「了解！」

須川が教室を出て放送室に向かう。これは雄二に罪を着せるからだ
いじょぶっ

ピンポンパンポン

《船越先生。 船越先生》

お、さつそく放送が入ってきた

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

きたきた

《教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

・・・やっぱすまん明久

明日何とかごまかしてくれ

明「す、須川あああああ！！！！！！！」

明久の叫びが聞こえたのは気のせいじゃないんだろうな

その後雄二達本隊と中堅部隊の援軍に行きぎりぎりのところで救助成功

その際に明久が美波を窓を割るなどの行為の犯人に仕立て上げたことにより制裁が強化されたことをここに追記しておく

中堅部隊の生き残りが科学のテストを受けなおした後

雄「明久よくやった」

雄二がムチャクチャ笑顔で明久を褒め、それに対して明久は疑問を抱いているようだ

まあ、あそこまで笑顔だったら俺も警戒とまでは行かなくても疑問には思っわな

明「校内放送、聞こえてた？」

雄「ああ、ばっちりな」

あー明久の目が血走ってるよ・・・

明「それより雄二、須川君が何処にいるか知らない？」

雄「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

おいおい須川のために少しはぼかしてやれよ

ああほら明久が家庭科教室からパクってきたっぽい包丁を隠してるし、さらに靴下に砂をつめてるし・・・

明「やれる、僕なら殺れる」

『殺るなっちゆうに』

雄「ちなみに、だが」

こいつ、俺が言ったとばらすきか！！！！

雄「あの放送を指示したのは『雄二』だ。良太！？裏切ったな！！！！」

ふ、何のことやら裏切ったんじゃないかって売ったんだよ！！！！！！

明「シャアアアツ！」

よし明久の矛先が雄二に行った！

しかし雄二は予想していたのか特に慌てずに回避の手段をだす

雄「あ、船越先生」

明久は卓袱台を蹴散らし掃除用具入れに飛び込んだ

『さて、バカはほおっておいてDクラスと決着をつけにいくぞ』

雄「そうだな、下校しているやつも増えてきたし頃合か」

康「……………（コクコク）」

『おっしや！Dクラス代表の首を取りに行くぞ！！』

F【おう！】

ここで決着をつけるためにFクラス全員で渡り廊下に向かう
と、その前に

『あ、明久、船越先生が来たってのは嘘だからな』

明久に真実を告げて先に行った雄二たちを追いかける

下校中の生徒達を避けながら渡り廊下へ向かう

渡り廊下が視界に入ると、下校中の生徒に混ざって戦闘している両
軍が見える

雄「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄二の声が戦場に響き渡る
ん？あれは・・・塚本か！

近い先生は・・・古典、竹中先生か！

『竹中先生、Fクラス神炎良太がDクラス塚本亮次に古典勝負を仕掛けます！サモン！！』

塚「な！？ちい！サモン！！」

《Fクラス 神炎良太 VS Dクラス 塚本亮次
古典 118点 98点 》

『いくぞ！連牙弾！！』

拳を構え塚本の懷に飛び込みボディに入れて浮かす！
そこから右足を上げ連続で蹴り続け、最後に吹き飛ばし戦死させる
そして声を高らかに上げる

『Dクラス塚本討ち取った！！』

そこからFクラスの士気がさらに上がりかけたがDクラスの本隊が到着し、士気が少し下がる
しかし、平賀を見つけたときには回りは近衛部隊4人のみ。明久も反対側に見え、作戦は決まる

『そうと決まれば・・・』

と目立つように平賀の前に躍り出て平賀を狙う！

『Fクラス神炎良太がDクラス』させないわ！Dクラス玉野美紀以下3名サモン！』ちい、どけ！サモン！！』

近衛部隊の4人が俺を迎え撃つ

《Fクラス 神炎良太 VS Dクラス ×4
現代国語 130点 ？ 》

『飛燕連脚！！崩襲脚！！』

一人を回転しながら蹴り、そのまま落下の勢いを加えてもう一人を仕留め、拳を強化する

『我が舞踏、とくと見よ！！秘奥義 殺劇舞踏拳！！』

25もの打撃を残りの二人に浴びせ、近衛部隊の掃除を終え、平賀のほづを見ると

姫「ご、ごめんなさい！！」

瑞希の召喚獣に打ち取られた瞬間だった

第一章 第五話 明久、暁に散ること（なにその不吉なサブタイトル！？B.Y.

試召戦争も終わり俺は今、階段の前に立っている
周りに他の生徒の姿は見えない

なぜ試召戦争も終わったのに教室に戻っているのか？

それは……

瑞希が平賀を打ち取った後明久が雄二に奇襲をかけるが雄二に見破られ失敗（まあ一度奇襲を受けたんだ。警戒しないほうがおかしい）その後平賀と会話し、瑞希と雄二が秘密の話をたようだ

そのときなぜか瑞希が顔を赤らめこっちを見ていたが……その後教室に戻り明久、雄二と共に帰路につき（自宅は明久の家の近くである）雑談をしながら帰っていたのだが、明久が教科書を忘れたのに気づき、俺が取りに行くことにした
というわけである

俺は左右をもう一度確認し、階段を見上げる

そして少し下がり屈伸をする

まあ何をするかというと、トリップ前に読んだある小説に出てくることを真似るだけである

『ゴールは3階。目標タイムは10秒つて所か』

深呼吸をし、少し心を落ち着かせる

そして、息を軽く吸い

『レディ………ゴー！』

とその声と共に走り出す

階段の最初の段に足をかけ三段飛ばしで駆け上がる

踊り場に足をつけると共に体を限界まで曲げる

そしてそれを4階まで繰り返して、階段を上がった先にある壁にタッチする

『9・6秒・・・軽くにしてはまあまあつて所か』

そして、Fクラスに向かい歩き出し、1分ほどで教室に着く

『W A W A W A 忘れ物』

と、まあ有名であろう台詞(?)を言いながら教室に入る

?「え、りよ、良太君!？」

『へ?』

とまああけてみたら教室には瑞希が居たからびつくりだ

ってそうじゃない!!やべーこのイベント今日だったっけ?(良太の瞬間記憶能力はあまり万能ではない。後天的なものになる為辞書と変わらない。時間をかければ思い出せるが通常の記憶のようにパツと思い出すことは出来ない(テストのときは出題科目の設定がされてる為高得点が取れる))

うん間違いないな瑞希の卓袱台の上にはラブレターセットみたいなものがあるし

姫「あ、あのっ、これはっ」

瑞希はなぜか慌てている

ってそうかいくら友達でもラブレターを見られるのは恥ずかしいもんなん

『大丈夫分かってるって』

姫「えつとーっふぁ」

『危ない!!』

瑞希が慌ててラブレターを隠そうとした拍子に卓袱台に足を引っ掛けた

それを急いで抱きとめた為自然と顔の距離が近くなる

姫「・・・・・・・・／／／／／／／／／／」

『・・・・・・・・／／／／／／／／／／』

いやね、瑞希みたいな可愛い子の顔が息がかかるくらい近かったら赤くなってる思考がとまるってとまらない奴がいたら出てきて」

というかね俺も健全な男子なわけなんですよ

もうね・・・・・・・・言わなくても分かかってお願い・・・・・・・・って痛いって石投げないでってそんなデカイ石投げられたら俺でもきついって!!!!

姫「ね、ねえ／／／手紙・・・・・・・・みた？」

『う、ごめん／／／／』

何時までも固まっているわけには行かないので答える

ちなみに手紙の中にはストレートに「あなたが好きですと」書いてあった

『・・・・・・・・その手紙の相手ってこのクラスなの?』

姫「うん・・・クラスメート」

『なるほど。よかつたらそいつの何処がいいか教えてくれないか?』

姫「や、優しいところとか・・・／／／」

確かにあいつは優しいな

『ん、納得言つた。・・・瑞希』

姫「なに?」

『その手紙。いい返事が貰えるといいな』

姫「うん!」

瑞希のその笑顔に再び顔が熱くなった

『んじゃ、また明日』

姫「あ、あのっ」

『ん?』

明久の教科書を回収しながら答える

姫「い、一緒に帰らない?」

『いいぞー・・・・・・・・へ?』

まで今瑞希はなんていった？

一緒に帰ろうと言ったか？

まあ家は近いからいいが

そうして瑞希を家におくって行った後

明久の家へ

ピンポーン

明「はい」

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポ「誰だよ！こんな嫌がらせす」ガガガン！！「ぐわ！」

『よっ』

まあ簡単に解説すると

一度呼び鈴を鳴らす

←
明久が返事をする

←
制裁を思い出したので嫌がらせついでに連続ピンポン

←
明久が出てきたところで三散華を入れる

←
明久が床に突っ伏し俺がよっと言う

『教科書ここに置いとくからな。あと手加減しといたからすぐに立

てるだろ？んじやな〜」

明久を放置し家に帰る

『ただいや〜』

誰もいないのは分かりきっているが一応ただいまは言う

『今日の晩飯はなんにするかな〜。あ、明日の弁当も考えねえと』

晩飯と明日の弁当を考えながらキッチンへと向かおうとする

ガチャ

？「……………え？」

『へ？』

廊下を歩き出そうとした瞬間にいきなりドアが開いた
あけたのは

『……………よう、翔子』

翔「……………良太？」

なぜか鞆を振り上げ戦闘態勢に入っていた翔子であった

『なんで家ぐぼわあ！……………！』

さてなぜ悲鳴を上げたか皆さん予想済みだと思つが解説しよう
解説も何もただ一文だけなんだが

翔子が抱きついてきた

まあただそれだけなんです

なんで翔子が呼び鈴も鳴らさずに来たか？それは10年前に合鍵を
渡していたのである（これは10年前からの親友全員がもっている）
忘れていたが

翔「……良太、今まで何処に言つてたの」

『えつと……まあ』

明久たちと同じ説明中……

『とまあこんなとこだ』

翔「……確かに嘘はついてない。でも本当のこととも言つて
ない」

『………』

よ、よくわかつたなーなんて言えたらいいが

……ここは最終的な雄二の負担を減らしてやるか

『……確かにその通りだ。でもそれには理由がある今はいえな
いがそうだな、今Fクラスが試召戦争をしているのは知ってるか？』

翔「………うん」

『それでその最終目標はAクラスなんだ』

翔「……………それで？」

『おそらく雄二は最終的に一対一の代表戦に持ち込むはずだ。その
とき了承する代わりに何か条件でもつけて俺が話さないといけない
状況でも作れば話そうと思う』

翔「……………わかった」

意外だ

まさかこんな簡単に承諾してくれるなんて

『まあ、それは置いといて。飯食っていくか？』

翔「……………うん」

とまあこんな感じで翔子と食事をし、翔子が帰った後に鍛錬をし、
買い物済ました

そんなこんなで試召戦争の一日目が終わった

第一章 第六話　実る恋、そして恐怖の……

翌日 時刻 午前五時

ピリリリリリリリリリリ　パカ　ピッ

『ふわぁ』

昨日翔子が帰った後買い物をし、鍛錬をしたら日付が変わっていた
急いで弁当の仕込みを済まし寝たはいいが睡眠時間は4時間ほどだ

『さてと……ん？』

よく見るとかけ布団に不自然な膨らみが二つ見える……気のせい
か俺に寄り添っているようにも見える（気のせいではない）

『………まさかな』

実は心当たりがある

10年前はよく俺の布団に潜り込んでいたからだ
……よし覚悟を決めよう

バサッ

『………やつぱりか』

布団をめくると何故か制服姿で寝ている瑞希と翔子がいた
こいつら何時の間に家に入り込んだんだ？まあ買い物の間と俺の寝
たあとだろうな

しかもこいつらいつも親の了承をちゃんと取っているあたりがなん
というかすごいと思う（侵入方法は合鍵である）
俺は何故か向こうの両親に気に入られてるし

『とりあえず。お前ら起きろ！！』

姫「…………ふぁ〜」。おはよう良太君、翔子ちゃん」

翔「…………おはよう。良太、瑞希」

さて皆さん混乱していると思うから解説をしておこう
俺の布団によく潜り込んでいるためかこの二人は知り合いというか
親友になっている
雄二は知らないようだが

『…………なあ昔から疑問に思っていたんだが、何で俺の布団に潜
り込むんだ？』

姫「え、えつとねそれは……………」

翔「……………」

何故か顔を赤くしてしまう二人

『まあそれは朝飯食ってから聞か。時間もあるし』

翔「…………わかった」

姫「うんっ」

そうして朝食を作りそれと一緒に弁当も作る

『あ、そうだ。瑞希、ちょっと来い』

姫「なに？」

『ちょっと卵焼き作ってみろ』

姫「わ、わかった」

瑞希が調理に取り掛かるが・・・って！？

『まで！卵焼きにリンゴは入れないぞ！！！！』

姫「え？でも甘みを出す為に・・・」

『いいか？その場合は・・・』

と、まあ即席の料理講座も開き朝食と弁当が出来る

「『いただきます』」

うんいただきますは大事だよな

『あ、そうそう翔子今日の昼休み屋上に来いよ弁当あるから』

翔「・・・わかった」

とまあおんぴりと食事は済み現在の時刻は7時

『なあ瑞希』

姫「なに？」

『さつきから気になっていたんだがお前の鞆の膨らみ具合から見て明久の弁当・・・作ってきたのか？』

姫「うんっ」

どうやら明久の地獄行きは免れてはいないようだ

『さてと、二人ともさつきのこと、答えてくれないか？』

「・・・／／／／／」

・・・さてどうするか

二人とも顔を赤くして俯いちまったし

まあゆっくり待つか

それから１０分ほど経過

あれから変わったといえば二人がこそこそ話しているくらいだ
そしてどうやら話す見たいで、二人そろって深呼吸している

「・・・・・・・・・・好きだから／＼／＼／」

『へっ？』

今この二人何とおっしゃいましたか？

姫「だから好きなんです！１０年前からずっと／＼／＼／」

翔「・・・・・・・・私も／＼／＼／」

うわーお

何時の間にフラグなんて立てたんだろう？俺
というかどうしよう

うゝん

『なあ聞いてもいいか？』

翔「・・・・・・・・なに？」

『今ここで答えを出さないとだめか？』

姫「できればそうしてくれると・・・・・・・・」

翔「・・・・・・・・でも強制じゃない」

『そうか・・・・・・・・』

さらに１０分経過

『よし』

この声に二人とも体をびくりとさせる

『俺は・・・・・・・・・・』

この瞬間も心臓がうるさい

『俺は・・・・・・・・選べない!!』

「・・・・・・・・え?」「」

まあそりゃあ驚くよな

勇気を出した告白の返事を選べないなんていわれたら
・・・・・・・・ねえ?

姫「あ、あのそれって?・・・・・・・・」

翔「・・・・・・・・どういうこと?」

『俺はどちらかを選んでどちらかが傷つくのはいやだ。だから・・・』
『・・・・・・・・』

ここで一旦言葉をとめ、深呼吸する

『だから、二人をもって言うのはだめかな?』

正直嫌われる覚悟をしてた

なのに、二人は何故か予想してたというような顔をしている

姫「良太君は優しいから……」

翔「……この返事の可能性が一番高いって二人で予想してた」

俺ってそんなにわかりやすいかな？

『でも、こんなだからさらに彼女を増やすかもしれないそれでもいいか？』

姫「その優しさも含めて私達は好きになっただよ？」

嬉しいことを言ってくれるねえ

『………あの〜それで返事のほうは？』

「これから宜しくお願いします／＼／＼／」

よかった

ふう〜と安堵の息を吐きながら時間を見ると8時

『………まずい！！二人とも急いでいくぞ！』

姫「え？……わわ」

翔「………急ぐ」

弁当と鞆を全員分持って急いで家を出る
すると

明「あ、おはようりょう、た……」

『おう、おはよう明久』

姫「おはようございます吉井君」

翔「・・・・・・・・おはよう吉井」

あれ？

『ん？翔子は明久を知ってるのか？』

翔「・・・・・・・・雄二から聞いている」

あ、なるほど

すると、固まっていた明久が起動した

明「何で良太の家から姫路さんと霧島さんが出てくるのさ！」

『昔からの親友だから』

姫「え？」

翔「・・・・・・・・」

『（ボソこいつに話してFクラスにばれてみる確実にFクラス全員を敵に回すことになる）』

姫「う、うんそうだね。それじゃあ私達が良太君のか、彼女／＼／
／ってことは皆にはない、しょ・・・・・・・・」

いきなり言った――――！！！！

明「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

明久はあまりのショックに固まっているようだ

『時間がない。今のうちに行くぞ！』

そして5分後明久の驚愕の叫びが聞こえた気がするが気のせいだと信じたい

そして学校の3階

『それじゃあ、また昼休みにな』

翔「・・・・・・・・わかった。良太」

『ん？んっ！？・・・・・・・・』

翔「ん・・・・・・・・」

翔「それじゃあ昼休みに／＼／＼／」

『／／／／／』

一応ここ学校何だけどなー

時間が結構やばいから人いないけど
さて隣のお姫様の怒りを静めないとな

『あゝみずんっ！？』

姫「んっ……」

瑞希、お前もか
いや嬉しいんだけどね

『／／／／』

姫「／／／／」

『い、行こうか／／』

姫「う、うん／／／」

と教室の近くまで来ると何時の間に追い抜いたのか明久が俺達の横を走っていった

姫「何があつたんだろう？」

『今日の数学のテストの監督の先生が船越先生だったんじゃないか？』

数分後それがあたっていたことを知る

時は飛んで

キンコーンカーンコーン

『終わったー！……！……！』

はつきり言って退屈だったテストが終わり昼休みに入る
どうやら明久は船越先生を誤魔化すのに必死で朝のことは頭からな
くなっているみたいだ

雄「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカ
レーにすっかな」

と雄二達主要メンバーが食堂に行こうとするので引き止める

『まで雄二達。お前らの弁当を用意してしまったんだが食わんか？』

明「いる！！」

『お前は瑞希に作ってもらったのがあるだろうが！』

明久が一番に飛びつくのをおかわす

雄「お、良太の料理が久しぶりだな」

秀「そうじゃな。良太の料理は絶品じゃしのう」

『なら、屋上でいいか？もう一人連れが居るんだ』

雄「ああ、いいぞ。なら俺は飲み物でも買ってくる昨日の礼もかね
てな」

美「あ、ウチも行く一人じゃ持ちきれないでしょ？」

雄「悪いな。それじゃ頼むぜ」

美「オツケー」

二人で教室を出る前に雄二が

雄「俺達の分もとって置けよ」

『安心しろ。一番食いそうなのは地獄に落ちるから（ニヤ）』

雄「そうか（ニヤ）そう遅くはないはずだいつてくる」

『さてとそれじゃあ屋上に行くか』

雄二達が飲み物を買いに行ったので屋上に向かう

明「そういえば良太。連れてって？」

『連れてって言うのは主に他のメンバーを示す言葉だ』

明「違うよ！もう一人は誰って意味だよ！！」

『ああ、そういうことか。あってみればわかる皆知ってるはずだからな』

秀「それってどういうことじゃ？」

『もうすぐわかるさ』

数分もしないうちに階段が見え反対側から翔子がやってくる

翔「……………良太」

何も知らない3人が歓声の声を上げる

瑞希の弁当は定番のおかずで見た目は旨そうだ

明「それじゃあ皆には悪いけど先に」「ヒョイ」「あっ、ずるいぞ
ムツッリーニ！」

『あ』

やめといたほうがという前に康太は口にエビフライをつかみ口へ入れ

康「・・・・・・・・・・（パク）」

ボタン　ガタガタガタガタガタガタ

豪快に前に倒れ、小刻みに震えだした

「・・・・・・・・・・」

秀吉と明久が顔を合わせる

姫「わわぁ、土屋君!?!」

瑞希が箸を取り落とす

康「・・・・・・・・・・（ムクリ）」

康太が起き上がり

康「・・・・・・・・・・（グッ）」

親指を立てた

おそらく旨いと伝えたかったんだろう

姫「あ、お口に会ったんですか？良かったです」

それが伝わったのか瑞希は喜ぶ

『さて明久。雄二が来るまで待つか？それとも今食べるか？』

明「雄二が来るまで待つことにするよ」

明久は震えながら返事を返す

とそのとき雄二たちがやってきた

雄「待たせたな・・・って何で翔子が居るんだ!？」

『何でって・・・俺が誘ったからだか？さて食べようか』

このあとはまあ予想通りに瑞希の爆弾弁当を明久が見事食し気絶をし（これにより瑞希と翔子との関係についての追求は無くなった）、作戦会議をするというので翔子を連れ出す

放課後明久を使者として強制で送り出し、その後明久が切れて雄二に襲い掛かったがカウンターをもらい撃沈、それを放置し翌日瑞希と翔子と一緒に登校し午前は再びテストをし、昼食をとり終わったところから話は続く

第一章 第六話 実る恋、そして恐怖の……（後書き）

恋心を抱いたイベントはいつか短編か間章として書きます

第一章 第七話 Bクラス戦前半

雄「さてみんな、総合科目テストご苦労だった」

教団に立った雄二が机に手をついてみんなを見ている
総合科目でやったもんだから補給テストが面倒で仕方が無かった

雄「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

【おおーーーーーー】

一向に下がらないモチベーション
Fクラスの唯一の武器とも言えるだろう

雄「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけには行かない」

【おおーっ！】

雄「そこで、前線部隊は姫路瑞希と神炎良太に指揮を取ってもらう。
野郎共、きっちり死んでこい！」

姫「が、がんばります」

『雄二は死んでこいといったが出来れば戦死する前に下がれ。戦力の低下は出来るだけ防ぎたいからな。フォーローは任せろ』

【うおおおーっ！】

瑞希が一緒だから前線部隊の指揮は最高潮に達している
ここで負けると話にならないから戦力は50人中の40人つぎ込む
そこに我が軍の最強戦力の二人を投入するほどの徹底振りだ
これで取れなかったらまずいことになる

キンコンカンコン

戦争の開戦を告げるベルになる

雄「よし、行くぞ！目指す（目標）はシステムデスクだ！！」

【サージェッサー！】

今回の戦争は数学を主な武器としていく
これはBクラスには文系が多いからだ
この渡り廊下戦はスピードが命なので瑞希とそれに付き添う俺以外
は全速力で廊下を走っていく
スピードが命とはいえ恋人を置いていくほど俺は白状じゃない

渡り廊下が見えるともう戦闘は始まっていて第一陣のほとんどが離
脱していた

『なっ！？』

Bクラスの人数は原作と違い20人程度に増えている
予想外の相手の戦力増強に多少戸惑いながら味方の戦力が分断され
ていないか確認しながら戦場に到着する

『すまん。遅れた！』

姫「お、遅れ．．．ました．．．」

俺は大丈夫だが瑞希は息が切れているのでこっそりと回復魔法をかける

B1「来たぞ！姫路瑞希と神炎良太だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ

やはり三日もあればAクラスに瑞希がいないのは伝わっているだろうしDクラス戦で俺が一人でDクラスを12人潰したのも伝わっているのだろう

そしてその声を聞きBクラス全員の目つきが変わる
俺達を警戒してるのが良く分かる

明「姫路さん、良太。来たばかりで悪いけど．．．」

姫「は、はい行ってきます」

『あいよ、まかせな。瑞希、無理はするなよ』

姫「うんっ」

そのまま分かれて戦場に突入する

B1「神炎良太だ！全員作戦通りいけ！」

B【了解！】

どうやら増えた十人は対俺用の戦力のようなだ

また高橋先生で総合科目か
今回はAクラスレベルにしといたはずだ

『さあ行こうかBクラス！高橋先生、Fクラス神炎良太がBクラス
10人に総合科目勝負を仕掛けます。サモン！！
前線部隊隊長 神炎良太、貴行等にお相手を願おう。さあBクラス
点数の貯蔵は十分か？』

今回の武器は背中の中側にコンタミネーションしてある大剣・・・
アロндаイトを構える

B2「油断するな！召喚獣の操作技術は観察処分者の吉井以上だ！
サモン！」

B「サモン×9！」

《 Fクラス 神炎良太 VS Bクラス×10
総合科目 3500点 平均 2100点 》

あはは（汗）まあ平均が表示されるようになっただけでもましかな
というか仕事はえー

B1「な！？神炎の点数はDクラス並みのはずだぞ！」

『実力なんてのはな、いくらでも偽装できるんだよ！！！！』

その言葉と共に一人目を潰す為に召喚獣を走らせる

『弧月閃！！』

B 1「ぐわ！」

すばやく相手の懐に潜り込み月の軌跡を描く一閃を放ち一人目をしとめる

『まだまだ！裂空破斬！！』

B 2「な！！？」

浮いた後の勢いを利用して回転しその力を使って相手を戦死させる

『まだまだ！幻狼斬！覚悟を決めろよお 秘技 天狼滅牙！！』

B 3 / 4 / 5「ぐ！！」

すれ違いざまに切り刻み一人反対に振り返ると同時に横に剣を薙いでさらに一人そのまま反対を向き天狼滅牙でさらに仕留める
そしてまだ固まっている残り5人のところに走らせる

『トドメだ！ 塵と化せ！！ これで、終わりだ！！秘奥義 緋焰
……滅焦陣！！』

B 6 / 7 / 8 / 9 / 10「ぐわあ！」

『時は戻せない。たとえ神であつても……』

大剣を叩き付けそのまま上に放り投げ自分も後を追いつ飛び上がる
そして回転し落下の勢いを加え再び大剣を叩き付け振り上げ5人を同時に仕留める

B11「な！？10人を相手に瞬殺だと！！」

B12「神炎良太と姫路瑞希。噂以上に危険な相手だ！」

どうやら瑞希も善戦しているようで残った8人に驚愕の様子が見れる戦場の様子を見るために一旦下がる

B長「中堅部隊と入れ替わりながら交代！戦死だけはするな！」

『今がチャンスだ！戦死しないように交代しながら攻めて仕留めろ！だが突出だけはするなよ！！』

相手の指示にあわせ指示を飛ばす

狙いは教室に釘付けにすることだがここで潰せるに越したことはない

『秀吉、明久！お前らは教室を見に行つて来い！』

明「なんで？」

『向こうの代表は根本恭二だ！雄二が調停の為に呼び出されたりし
いし、この隙に卑怯なことを仕掛けてくるぞ！』

根本恭二

噂ではカンニングの常連で目的の為に手段は選ばず、球技大会で相手チームに一服持ったとか喧嘩に刃物はデフォルト装備など信憑性が高いのからまったく無いのまでいろいろな噂がある男だ

明「なるほど。戻つておいたほうがよさそうだね」

『頼むぞ』

そうして明久と秀吉は数人を引き連れて教室に戻っていった

『さてと。瑞希、美波行くぞ!』

姫・美「うん（わかった）」

そして瑞希と美波の活躍のおかげで渡り廊下の向こうまで戦線をあげていてあと少しというところだとそこに

須「神炎! 島田がBクラスに人質にとられた!」

『やはりか』

原作通りの展開だ

『すぐに行く! 先に行っててくれ』

須「わかった!」

周りに誰も居ないのを確認してから手にしているリストバンドに触れ

『アウェイクン
起動』

リストバンド……白金の腕輪で召喚フィールドを形成

『サモン』

そして召喚をする

そして両肩にしまつてあるダガーを手に射程範囲まで移動する

明「総員突撃いいい！」

いつの間にか戻つてきていた明久が美波を無視し攻撃しようとしているところで隠れて美波を人質にとっている奴らの召喚獣にダガーを投合する

B13・14「どこから！？」

『美波！大丈夫か？』

美「リヨウ！！」

明「島田さん、大丈夫『連牙弾！』ぐぶわあ！」

召喚獣を消し美波に駆け寄り明久が来たところで連牙弾でボコる

『理由は言わなくても分かるだろ？』

気絶している明久をほおっておく

『さて、各員四時まで敵を教室前に釘付けにするぞ！』

【了解！】

先ほどの協定の内容は四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにし明日の午前9時に再開する

そしてその間は試召戦争に関する一切禁止するという内容だ

四時過ぎ 教室

さすがに明日まで放置すると変な噂が立つかもしれないので帰ってくる途中で明久を回収

そのまま引きずって教室まで帰ってきた

明「あれ？・・・ここは？」

『教室だ。今戦争は協定に従って休戦中』

秀「いくら試召戦争じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

『こいつの場合は仲間を見捨てた罰だ』

明「・・・・・・・・・・・・・・・・せ、戦況は？」

『計画通り教室前にまで攻め込んで相手の戦力は思った以上に削れたな』

なんせ俺だけに10人は戦死したし・・・

『ただ・・・こちらの被害は少なくはない』

廊下戦は俺と瑞希といった全戦力を注いだのだから圧勝して当然だし、被害と照らし合わせると決している状態とはいえない

『ま、ハブニングはあったが概ね順調だな雄二』

雄「まあな」

だが相手は根本、何かをたくらんでいるか切り札を持っているか・

ん？根本にとつての切り札？

あいつにとつて切り札レベルとなると相手の主力を封じるほどのものだろう

・・・あー！

いやでもあの時とは違って瑞希は俺と付き合ってる状態だ（翔子もだが）

あれがあいつの手にあるかは確認しないと分からない

だがあいつの手にあった場合は・・・

・・・うん、ぶちギレるな

康「……………（トントン）」

雄「お、ムツツリーニか。何か変わったことがあったのか？」

康太が雄二の肩をたたく

康太は渡り廊下戦には参加せず回りの警戒をもらっていた

『康太が言うにはCクラスの様子が怪しいそうだ』

康「……………（コクリ）」

確か根本はCクラスの代表と付き合ってたはずだ

おそらくこれで俺達がCクラスに交渉に行ったところにやつが現れこつちが協定違反をしたというつもりだろう

ここはとめるべきなのだろうがあえて何も言わない

べ、別に消化不良とか物足りないなんて思っていないからな！

明「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

『ほう。俺が居ても不安というか貴様は』

明「そ、そうとはいってないよ！」

まあいつの間にか秀吉と美波以外の主要メンバーで行くことになっていた

美「あれ？リョウに吉井たち皆そろって何処かに行くの？」

教室を出たところで鞆を肩に持っている美波と遭遇した

あれ？須川は？・・・まあいいか

『ちょうどいい美波Cクラスと一緒に来てくれ』

美「うん、いいけど」

『よしいくぞ』

こうしてイベントに必要な人材をそろえた俺達はCクラスへと足を進める

今俺達はCクラスにいる

やはり原作どおり根本の罨であつた

根「先に協定を破つたのはソツチだからな？これはお互い様だよな！」

根本が告げると同時に取り巻きが動き出す

そしてその後ろには先ほどまで戦場に居た小柄な先生・・・長谷川先生がいた

芳「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を『させるか！Fクラス神炎が受けてたつ！サモン！』

芳野が雄二に対し攻撃を仕掛けようとしたのを防ぐ

『雄二！さつさと下がれ！！』

雄「くっ、ここは逃げるぞ！」

『おらあ！！』

芳「ぐ！」

点数が表示される前に距離をつめ相手の腹部に入れられるだけ入れ、潰す

同レベルならあまり効かない拳だが、いくつも入れると十分になる

『あばよ〜とつつあ〜ん』

某怪盗13世の台詞と共に俺も逃げ出す

根「逃がすな！坂本と神炎を討ち取れ！」

背後から聞こえてくる根本の声に少し驚いた

目の前であれほどの力の差を見せたのに潰せる気で居るとは・・・バカか？

とそんなことを考えていると見知った背中が見えてきた

『急ぐぞ!』

姫「はあ、ふう……」

『瑞希大丈夫か?』

俺が追いつくと瑞希が遅れだした

姫「先に……行って……失礼!」きゃっ

明・美「良太!」^{リョウ}

姫「／／／／」

このままだとまずいので瑞希を俗に言うお姫様抱っこで運ぶことにした
しかしBクラスの身体能力が思いのほか早く俺達に追いつき始めてきた

『まずい……か。瑞希』

姫「なに?」

『ここからFクラスまで走れるか?』

姫「それくらいなら大丈夫だけど……」

『それじゃあ頼む』

一旦とまり瑞希をおろし、追っ手のほうに振り返る

『ここは俺が止めるからその間にお前らは逃げろ!』

雄「・・・わかったここはお前に任せる」

康「・・・（ピ）『康太は行け!お前はBクラス戦の勝利の鍵になるはずだ!』・・・（コクリ）」

美「んじゃ、ウチは残ってもいいかしら。隊長どの?」

いつの間にか俺の隣には美波がいた
こいつ・・・

『ふっ、勝手にしろ。だが戦死はするなよ』

美「当たり前よ」

すまん

美「さてどうするの、リョウ?」

さてどうするか

『一応選択肢としては先生を説得して先生に引いてもらうつと力ずくの二つあるが』

美「一応説得してみてもそれでだめなら力ずくで行きましょう」

『だな』

B 1「居たぞ！神炎と島田だ！」

B 2「ぶちころせ！」

そして追っ手がやってくる長谷川先生も一緒だ

『おうおう。死刑囚がやってきたわ』

B「なんだと！」

『まあいい。俺は先生に話があんだよ』

長「何ですか、神炎君」

長谷川先生が前に出てきた

少々息が弾んでいる

・・・運動不足なのだろうか？

『Bクラスが協定違反をしたことはご存知ですか？』

教師である以上、協定違反には加担できない

それは審判をする側の教師としては当然だ

だがそこらへんは根本がうまく言ってるはずだ

長「話を聞く限り、協定を破ったのはFクラスのようにですね。そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは戦争云々以前に人としてどうかと思います」

まあだろうな

だが客観的に見て疑問がいくつかある

『では聞きたいのですが何故根本がCクラスに居たんですか？まるで俺達がCクラスに行くことが分かってたかのように5人も引き連れて』

長「根本君はCクラス代表の小山さんと付き合っていると聞いています。恋人に会いに行くのに理由は要らないと思いますが？」

『それでしたら一人で行けばいいはずですよ。わざわざ取り巻きを連れて行く必要もないと思いますが？』

長「ここに居る彼らはCクラスに居る友達に会いに行っただけですよ。根元君と一緒に居たのは偶然ですよ」

『では何故先生が居たのですか？先生は先ほどまで戦場で立ち会っていましたし職員室に戻るついでにしても方向は反対ですよ。それに根本達の後ろにいた理由にはなりませんよ？』

長「そ、それは……」

B「ごちゃごちゃうるせえんだよ！サ『ちつ美波！逃げるぞ』まて！」

横で傍観していたやつらが限界に来て攻撃を仕掛けてこようとしたのを見たので場所を変えるために逃げる

『後もうちょいだったのにな』

美「しょうがないわよ」

B「……サモン!!」「……」

後ろから追っ手が召喚の声が聞こえる

この先は行き止まりのため戦闘が始まるのも時間の問題だ

『しゃあない。やるか!』

美「そうね!」

B「神炎!覚悟しやがれ!!」

『勝てると思ってるのか!サモン!』

《 Fクラス 神炎良太 VS Bクラス×4人
数学 160点 平均165点 》

……あれ?

『おつかしいな、もう少し点数あったはずなのに』

B「神炎の点数が減っている今がチャンスだ!」

美「リヨウ!サモン!!」

美波がフロアに召喚をする

なら、と背中 of 左側にコンタミネーションしてある弓……エンシ
エントボウを構える

『すまん、美波』

美「気にしないで！」

『紅蓮！秘技 陽炎！！』

B「くっ」

『ちっ』

炎を纏った矢を放ちさらに残像を残し不意打ちを仕掛けるがかわされる

そうした攻防をしばらく繰り返し一人が撤退したが美波も俺も消耗している

何かないか・・・あれだ！！

『美波、アレを！！』

手が開いた美波に指示を出す
その先にあるのは消火器！！

美「了解！」

抱え上げ安全弁を外す美波、よし、これで！

美「・・・・・・・・・・」

・・・・なぜか美波は動かない

『は、早く！弓じゃあんま持たない』

美「うーんどうしよっかな」

すごく楽しそうに笑顔を作ってくる

『み、美波！何が望みなんだ』

てか意外と連携がうまくてまじできつい！！

美「望み？うーん、そうね」

『今なら大抵の言うことは聞くから！』

美「今度の休み、駅前の喫茶店でクレープが食べたいな」

『わ、わかった奢ろう！』

美「よろしい。じゃ、最後に」

ま、まだあるのか！？

美「う、ウチのことを愛してるって、言ってみて？」

すまん！瑞希、翔子！

『美波』

美「なに？」

『愛してる』

美「／／／／／」

プシャアアアア

噴出す消化液

粉まみれになりながら、俺達は何とか脱出した
あー後が怖い……

『あーづかれた』

姫「あ、良太君。無事だったんですね」

『おうなんとかな』

教室に入ると共に出迎えてくれた瑞希

雄「無事に戻ったか」

『おう。だがどうする？このままだとＣクラスと連戦って形になる
し、案があるといえはあるが』

雄「どんなのだ？」

『ああ（ぼそぼそ）』

雄「よし、それでいい」

『ん、了解』

明「どうするのさ？」

『向こうがああ来るならこっちは目には目を、明日の朝、策を実行する』

この日はそれで解散となり続きは明日へと持ち越しになった

第一章 第八話 Bクラス戦後半 根本、良太の逆鱗に触れるのこと

第一章 第八話 Bクラス戦後半 根本、良太の逆鱗に触れるのこと
と

翌日

ピリリリリリリ ピッ

『ふわあゝあ』

現在の時刻は7時
とりあえず顔を洗う為におきとしよう

5分後――

『うし、目が覚めた』

目も覚めたので制服に着替えリビングへ向かう

ガチャ

？「あ、おはよう良太君」

？「・・・おはよう、良太」

『おはよう。瑞希、翔子』

リビングに入ると瑞希と翔子が制服姿で居た

さて、何故瑞希と翔子が俺の家にいるかというところを説明するのは昨日の解散後まで時間を遡らなくてはならない

今は解散をして帰宅路についている

そして俺の隣には今朝彼女（／＼／＼）になった瑞希と翔子が居る
本当は雄二や明久も誘おうと思ったのだがこれがばれたらＦクラス
全員を敵に回すことになるのでそれはあきらめた

雑談をしながら帰っている為かいつもより早く分かれ道についた気がする（翔子と雄二は家が駅方面である。俺や瑞希、明久は反対側）

『それじゃあ、翔子また明日な』

翔「・・・うん。（ボソッ　また後で」

翔子の呟いた言葉にこのときは気づかなかった

そうして俺の自宅前

『じゃあな、瑞希』

姫「うんっ。（ボソッ　また後で」

このときの瑞希の言葉は聞き取れたが何を意味するのか分からなか

つた……

『ふい〜』

その後

夕飯にするには早かったので先に鍛錬をし、汗を流したところだ

ピンポーン

ん？新聞の勧誘か？

『はい』

ガチャ

ドアを開く

『どちらさ、ま……………』

？「「こんばんは、良太君（良太）」」

そこに居たのはなんと

『こんな時間にどうした？それにその荷物は？』

瑞希と翔子だ

何故か明らかにこれから何処かに長期滞在しますといった感じのケ
ースと鞆を持っている

翔「……………私達、これから良太の家で暮らす」

・・・・・・・・はい？

『さて、何で付き合ったその日に同棲開始なんだ？それにそっちの両親の許可は・・・・・・・・聞くまでもないか・・・・・・・・』

そうだった

なぜかこういうことを渋らない親だったよ

翔「・・・・・・・・いずれは結婚するから、今から一緒に住んでも問題ない」

姫「そういうこと」

瑞希のキャラがなんか違うような・・・・・・・・まあいいけど

『・・・・・・・・まあ、使ってない部屋は2階にあるから好きに使っていいぞ』

と言った瞬間に二人は俺の横にある部屋に入っていった

『・・・・・・・・決めるの早いなー』

とまあこんな感じで二人との同棲生活が始まったのである

『さて、そろそろ学校に行くか』

時刻は7時45分

少し早いくらいだがまあいいだろう

姫「そうだね」

翔「・・・うん」

全員鞆と弁当を持って家を出る

『ふ、二人とも！？／／／／／』

家を出ると同時に二人が腕を組んできた
やわらかい感触が／／／／／

それが学校近くまで続き階段が上がったところで翔子と別れFクラスへ向かう

ガラッ

『はよーっす』

姫「おはようございます」

二人同時で教室へと入ると教室の外まで聞こえていた騒がしい声がピタッとやみFクラス全員の嫉妬や殺意のこめられた視線が俺へと突き刺さる

・・・一緒に来ただけでこの反応は予想外だったな

F1「なんであいつが姫路さんと一緒に登校してきてんだ!!」

F2「会長！やつを異端査問会にかけましょう！！」

須「いや、それをやるのはこの戦争がすべて終わってからだ。ここで神炎を失えば勝てなくなる」

【・・・・・チッ】

全員そろって舌打ちですかい

しかし気にしても仕方が無いのでそのまま近くにいた雄二に話しかける

『おはよう、雄二』

雄「おはよう、良太。朝から姫路と一緒にとはやるな」

『何を言ってるんだか。それより秀吉はきてるか？』

雄「ああ。秀吉！」

名前を呼ばれた秀吉がこっちにくる

秀「なんじゃ？」

『昨日言った作戦をやる・・・明久は？』

明「居るよ！」

『なんだいたのか明久』

明「酷くない!？」

『まあそれは置いて。仕掛ける相手はCクラスだ』

姫「なにをするの？」

『これを秀吉に着てもらう』

そういつて俺が取り出すはこの学校の女子の制服

明「……ところで良太、それどうやって手に入れたの？」

『………企業秘密だ』

秀「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

『秀吉には優子として、Aクラスの使者を装ってもらう』

これは事前に翔子と優子には許可を取ってある（優子は内容にもよるとのことだが）

それにしても流石双子

分からないわけではないが見分けがつきにくい

明久でも分かるところなんて喋り方とテストの点ぐらいだからな

『と、言うわけで秀吉、準備してくれ』

秀「う、うむ………」

『ああそうだ、一応別室で着替えることを進めておこう。お前の着替えて興奮するやつらが居るからな』

秀「……………そうするのでしょうか」

そういつて教室を出て行く秀吉

そしてドアが閉まると同時に教室にいた男子の殺意のこもった視線がぶつかる

だが所詮は素人の殺気

本物の殺気を受け続けてきた俺からしてみれば怖くもなんともない心が一つになったときの統率力は脅威だが……

秀「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

雄「さあな？俺にも良く分からん」

『同じく』

秀「おかしな連中じゃのう」

まったくだ

『んじゃ、Cクラスに行きますか』

秀「うむ」

明「あ、僕も行くよ」

それに明久がついて来る

それにしても

FからCまで遠すぎるだろ
面倒ッたらありやしないな

とそんなことを考えてるうちにCクラスの近くに居た

『さて、ここからは一人で頼むぞ秀吉』

秀「気が進まんのう」

『演劇の練習と思って』

秀「むう。しかたないのう」

『悪い』

ガラガラガラ

秀吉がCクラスの扉を開ける

秀「しずかにしなさいこの以下自主規制

秀吉がうまくCクラスの敵意をAクラスへと向けてくれたのを確認し俺達は早足でFクラスの教室へ戻っていった

『ドアと壁をうまく使え！戦線を拡大させるな！！』

あの後9時よりBクラス戦が再開され、俺達は昨日中断されたBクラス前の位置から進軍を開始した雄二の指示は敵を教室内に閉じ込めておくこと

その指示を実行する為に指示を出しているのだがここで問題が一つ

ある

瑞希の様子がおかしい

本来は俺と同じ隊長のはずなんだが指示を出す気配がないそれどころか戦闘にも参加しないようにも見える

・・・やはりか？いや確証が持てるまで早まるな

『勝負は単教科で挑め！補給も念入りに行え！』

まあいつもどおりだが指示を出しているのは俺だ
今のところはうまくやれている

・・・ちつ、左側がまずいか

『秀吉！少し任せた！』

そういい残し左側へ向かう

『ここは俺が食い止める！その際に点数が少ないやつは補給！点数が残ってるやつはこっちへ回れ！サモン！！』

《Fクラス 神炎良太 VS Bクラス×3

古典 351点 平均159》

『だああっしやー』

B1、2、3「ぐわあ」

突破しかけてた三人を強襲し、戦死させる

B4「し、神炎だ！！」

B5「くっどうする？」

どうやら俺のことを警戒されているようだ
もうこれがデフォなのか？

須「神炎！」

『ナイス』ここは任せた！』

須「え？ちょ！？」

須川が古典の点数が残ってるやつらを引き連れてきたのですかさず
バトンタッチ

そして秀吉の元に戻り戦況を聞く

『戦況は？』

秀「数学教師が教室内に拉致されたようじゃ」

『高橋先生を呼んで来い！』

姫「私が行きます！」

そっつい瑞希が先生に加わろうと駆け出すが急にその動きを止めて
うつむいた

どうやら何かを見て動きを止めたようだが
瑞希の見ていたほうへ視線を向ける

その先にはこちらを見下ろす根本恭二の姿がある

・・・パツと見何も無い様に見えるがよく見るとあいつは手に何か
持っている

『っ！！！！！』

見てしまったあいつが手にしているものを

見た目は何の変哲もない手に入れようとすれば普通に手に入るものだが、逆にいくら出しても手に入らないもの

それは三日前に瑞希が書いていたラブレターだ

『……ふ、ふははは。 やっちゃあいけないことをしやがったな根本』

声を出来る限り低く、殺気は漏らさずに

あれを手にしたからあの協定を提案してきたか

『瑞希』

姫「な、なに……？」

『何があつたかは把握した。 お前が参加しなくても何も言わないし、言わせない。 じゃ、いっちょいつてくるわ』

姫「あ……！」

瑞希が何かいいたそうにしているがそれを気にしているほどの余裕がない

その場で携帯を取り出しある人物へと電話をする

雄「どうした？ 良太」

『すまん、雄二。作戦無視をしちまう。だけど必ず根本の首はとってくるだから・・・許可してくれないか?』

雄「良太をそこまでキレさせるなんて何をしたのか知りたいぐらいだな。よし、行って来い。だが必ず根本の首はとってこいよ?」

『おう。サンキュウ』

電話を切りしまう

それと同時に高橋先生も来たようだ

『高橋先生。俺が道を開くと同時にBクラス内に入ってください』

高「わかりました」

了承をもらえると同時に左側古典のところへ走る

『Fクラス新炎良太 サモン』

もう必要なこと以外をしゃべる時間が惜しい

《Fクラス 神炎良太 VS Bクラス×10人

古典 351点 平均198点》

『邪魔だ!』

一気に白虎刀と玄武刀を出し、白眼と神速を併用する
そして一瞬で最高速にまで上げ相手の視界から消えるそして、その

まま敵を全員切り捨て再び相手の視界に現れる

『秘奥義 神魔滅殺陣 神魔と共に地獄に落ちろ』

その言葉と共に相手の召喚獣がすべて倒れる

B×10「な!!!?」

『先生!』

高橋先生に呼びかけそのままBクラス内に突入する

『根本恭二iiiiii!』

こいつは・・・俺の大切な人の気持ちを踏みにじることをしやがった・・・その罪は

『万死に値する!! 貴様に地獄を味合わせてやるよ、根本恭二!!』

その言葉と共に召喚獣を突っ込ませる

根「ふ、ふん、そんな戯言をサモン!」

根本は迎撃の構えを取る

《Fクラス 神炎良太 VS Bクラス 根本恭二

総合科目 3356点 2806点 》

腐ってもBクラス代表か

だが・・・異常な操作性を持ってない限り負けることは無い

まずは・・・これから！

『散沙雨！！』

玄武刀と白虎刀から5連突きが繰り出される。根本の召喚獣は反応できてない

根「な！？」

『そんな声を上げてる暇があるならよけたらどうだ？させないがな
秘技 秋沙雨！！』

神速ともいえる速度で10連続突きが繰り出される

『奥義 五月雨！！』

15連突きが繰り出され、そこから双牙斬で天井ぎりぎりまで打ち上げる

『さあ・・・断罪の時だ。混沌の力を司る精霊ジオよ契約者神炎良太の名において命ずる、混沌の力を持つ短刀をここに！カオスソード・デイベインシフト！！！！』

その言葉とともに現れるのは50を超える短刀である
その短刀はまさに混沌と言うしかない色（以後混沌色）をしその刀身は常にうごめいている。そして刹那の間に空中に居た根本の召喚獣を貫いた

『まだだ！！混沌よ我が呼びかけに答え我が刃に混沌の力を与えよ
カオスソード・ダブル！！』

その言葉と共に根本の召喚獣に刺さっていた短刀は消え良太の召喚獣の手にあった双剣は混沌色の光に包まれている
そしてそこに根本の召喚獣が落ちてくる

『混ぜ合わされし命に、今もたらされる刹那の奇跡、時空を超え・
ここに胎動せし技の奇跡魔人時空斬！！』

良太の口から言葉が紡がれると共に根本の召喚獣が切り裂かれるそして最後の一撃と共に良太が詠唱を始める

『まだ終われると思うな！！命を糧としかの者を打ち砕けセイグリ
ツド・シャイン！』

天使の力よ今このとき我が敵に天からの裁きをホーリージャッジメント！！

万象を成し得る根源たる力、太古に刻まれしこの記憶、我が呼びかけに答え、今ここに蘇れエンシエントカタストロフィー！！

技達よここに融合しおろかなる愚者に混沌の光をエストレア・ブレイカー！！！！』

光の輪が根本の召喚獣を囲み爆ぜ、天から降ってきた光に飲み込まれ、火、水、土、風の属性を持つ球体に潰され空色と混沌色が混ざった光の柱に吞まれる

『これで止めた！我と契約せし精霊達よ混沌にその力を注ぎ我が敵を混沌の運命へと誘え 神炎流最終秘奥義』

良太の召喚獣の頭上に混沌の色をした巨大な球体が出現し良太がその技名を口にする

カオス・オブ・フェイト

その言葉と共に良太の頭上に会った球体が根本の召喚獣を包み込み、その中から無数の斬撃が聞こえ、その球体が消えた後には根本の召喚獣の姿は消えていた

『俺は運命を打ち破る』

良太の弦きがやけに響いた・・・

第一章 終　　くBクラス戦勝利そしてAクラス戦ついでに良太郎活入部く

・・・・・・・・・・

俺のありえない力を目の当たりにしてなのか全員が固まっている

『根本恭二、討ち取った』

その言葉を聞くと同時に

【うおおおおお！！】

Fクラスの歓声が上がった

高「神炎君。ちょっと職員室まで来てください」

・・・・・・・・・・？

『あの、なんですか？』

高「あそこを見てください」

そう言われ高橋先生が指差す方を見ると

『壁が壊れていますね』

そう、壁が壊れていたのだ

心当たりといえばエストレア・ブレイカーくらいか

まあSLB普通に上回ってることを考えたら少ない被害か

高「後は言わなくても分かりますね？」

『・・・・・・・・はい』

そして高橋先生に連れられ職員室へ
のはずだが

『あ、あの先生、少しだけ待って欲しいんですけど』

高「・・・・・・・・しょうがないですね。少しだけですよ？」

『ありがとうございます！』

そうして根本の元へ行く

『さて、根本。瑞希の手紙を返してもらおうか？』

根「な、何の『お前の趣味が女装だと噂を流す』わ、わかった！これだ」

『ん、確かに』

そして瑞希の元へ行く

『ほれ、瑞希』

姫「良太君。ありがとう」

『気にすんなって』

そうして戦争終了を聞いた雄二もクラスに来た

『雄二！俺はこれから職員室に行かなきゃなんなくなつたから後頼む』

雄「わかつた」

そして職員室へ連行され、放課後（二人には先に帰ってもらつた）あの力については追求されなかつた

どうやら先生も信じたくはないようだ

後から聞いた話だと根本は女装を強制的にやらされた写真を取られ、その姿で帰宅したそうだ

『そついや家の学校つて珍しく学園祭が2回あるんだよな。学園祭の目玉といえばバンド・・・バンドといえば軽音楽部・・・・・・・・・・
・よし、見学に行こう』

今年はどのぐらいのレベルか気になるし

そうして職員室へ逆戻り

『えーっと音楽の担当は・・・・山中先生か』

ガラガラガラ

『失礼します。山中先生はいらっしゃいますか？』

山「はい」

返事が聞こえてきた

その方向へ視線を向ける
つといたいた

山「どうしたの？」

『あの、軽音部って今日やってるかわかりますか？』

山「ええ、今は音楽室に居るはずよ」

『そうですか、ありがとうございます』

山「どういたしまして」

『失礼しました』

退出し、音楽室へ向かう
えーっと・・・あった

コンコン

『失礼します。軽音部の見学したいんですけど』

ノックをし中に入る

？1「ありがとうーこれで後2人入部すれば」

？2「私ももう人数に入ってるのね」

『・・・あー』

？1「え？」

中に入るとショートで髪でカチューシャをしている子
黒髪ロングで少し大人びている子
そして金髪のロングの子の三人が居た

？1「もしかして入部希望！？」

『いえ、見学・・・』

？1「今部員が少ないんです、後悔はさせません！へび」

？2「やめろ、そんな強引に勧誘したら迷惑だろ」

とそのまま目の前で漫才を始める？1と2

・・・あれ？

『あの。もしかして、軽音部って今居る3人だけですか？』

？1「そうだよー」

『・・・・・・』

生徒手帳で廃部の条件を確認

4月末までに部活動人数が5人以下の部活は廃部とする

・・・

もしかしてこのままだと学園祭でバンドなし？

それは困る！！
なら・・・

『あの～・・・』

?1「何？」

『俺、軽音部に入部します』

?1「本当！？」

『は、はい』

?1「ありがとう～これで後1人入部すればーええつとお」

?3「琴吹 紬です」

『神炎 良太です』

?1「ドラムの田井中律、こっちはベースの秋山 漣あとはギタ
ーかな？」

『あ、俺2年なんですけど』

律「嘘お！？」

漣「す、すいません」

『もしかして、三人とも一年？』

紬「はい」

『そうか。皆のことを名前で呼んでいいかな？俺のこと名前で呼んで欲しいんだけど・・・ついでに敬語無しで』

律「おっけー良太」

漑「よろしく、良太」

紬「宜しく願います、良太君」

『おう、よろしく律、漑、紬』

律「あれ？珍しいね漑が赤くならないで名前を呼ぶなんてしかも男の」

漑「何でか呼べたんだ」

律「ふ〜ん（にや）」

漑「な、なんだ」

律「べつに〜。それで？良太は何の楽器弾けるの？」

『ん？全部弾けるぞ？ギター、ベース、ドラム、キーボードなんでもござれついでにボーカルもいける・・・らしい』

律「嘘！？じゃあ何か歌って！！」

目がキラキラと光ってる

久しぶりに見たよ

『……ギターと歌でいいか?』

律「うん!」

『あ……ちよいトイレついでに忘れ物取り入ってくる』

紬「いつてらっしゃい」

廊下に出てトイレに向かい用を足すそして戻るついでにギターを投影する

『ただいまーそんじゃ……』

そういつて少しチェックする

うん完璧

『んじゃあ似合わないけど ETERNAL BLAZE』

遙か天空響そらいている 祈りは奇跡に

黒天―真夜中―の蒼に溶けて流れてく涙の粒
迷いなく包み込む温もりに出逢った
真つ白な雪のようにどこまでも素直なコトバ
鉄の羽根纏った 僕を動かしてく

傷つくたびに 優しくなれる
君のその笑顔だけ守り抜きたい
願いはひとつ

時空を越え刻まれた悲しみの記憶
まっすぐに受け止める君は光の女神
あの日胸に灯った永遠の炎
深い闇解き放って 自由のトビラ開いてく
強く果てない未来へ

冷たい緑の月に映し出すココロの夜
淋し気に呟いた『君のそばにいたい』
真実と向き合うこと教えてくれた勇氣は
僕を駆け巡って希望に目覚めていく

触れ合う気持ち 離れないように
しっかりと抱きしめて
確かな想い貫いてゆく

銀の海に隠した空白のページ
君だけが知っている『本当』を僕に見せて
吹き荒れる切なさ生まれゆく誓い
もう何も恐くはないよ結んだ視線そらさずに

大切な『今』始める

君が君でいられる場所

悪夢―まぼろし―にさらわれぬように

消えない雨の苦しみも

鍵を壊してぶつけてよ 隣にいるから

すべてを信じて

時空を越え刻まれた悲しみの記憶^{とき}

まっすぐに受け止める君は光の女神^{てんし}

あの日胸に灯った永遠の炎

深い闇解き放って 自由のトビラ開いてく

強く果てない未来へ

そう、きつとここから始まる・・・

『と、まあこんなもんだ』

律「すごいよ良太!!」

漣「そうだよ!」

紬「すごく上手なんですね」

と、しばらく俺に対する評価が続き

『さて、必要な人数はあと一人。俺は全部いけるから問題なし。んで律がドラム、漑がベース紬は何が弾けるんだ？』

紬「私はキーボードくらいしか出来ませんが」

『とすると後は・・・ギターが欲しいな。まあ後どうするかはワックにでも行って何か飲みながら考えるか』

律「おっけー」

とまあそんな感じでやってきましたワック

『俺は席とって置くからこれで俺のも頼む』

漑「わかった」

そうして先に席に座り律たちをまつ

しばらくすると律、漑、紬の順できたのだがなぜか紬の表情が緩んでいる

律「ん？どした？」

紬「私ファーストフードのお店初めてで」

なんとも珍しい

律「そうなのっ？」

漣「うえ！？」

『へー』

紬「一緒にポテトもいかがですか？って聞かれるの夢だったんです」

『ほー』

紬「あ、すみません。はじめてください」

『つとすまん。それじゃあ作戦会議開始するか』

律「今月中に部員をあと一人獲得する為に！」

紬「いったい何を？」

『それをこれから考えるんだよ。たとえば今入部したら特典がつくとか』

漣「特典……」

律「そ、なんかもらえるとかな」

紬「車とか別荘とかですか？」

紬「なぜ自分の分のポテトを律に渡すんだ？それにその感覚のずれはいつたい……いや別荘とか俺も持つてるけどさ」

今貸し出し中だけどたまに掃除しに行ってるし

漣「すごいけど無理」

律「アイスおごるとか、宿題やるとか」

『まあ、そんな理由で来るやつにはろくなやつが居ないけどな』

紬「じゃあどうしたら？」

【うゝん】

・・・ん？

ふと店の外の道路を見ると眼鏡のショートと見た目天然っぽい子がくつついてるといつか天然っぽい子が眼鏡の子にだき・・・泣きついているように見えるそしてその状態で歩いている・・・
つて器用だな

律「によるりゝん」

律が飽きたのか飲み物をストローの袋にたらし遊ぶ

漣「『自分が飽きてどうする！？』」

律「じゃあ何か考えてよ」

漣「はあゝ、もう帰りたい」

『まあまあ』

紬「じゃあとりあえず」

翌日・・・

【せーの】

紬の提案はポスターを貼ってギタリストを募集しようと言うものだった

『よし、それじゃあ紬のやつは正面掲示板、残りのやつは廊下で。各自、練習は忘れるなよ？それじゃ解散！』

そしてこの日はテストを受け、翌日

俺達はこの騒ぎ最後の戦いの作戦を聞いている

雄「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だといわれていたのにも関わらずここまでこれたのは、他でもないみんなの協力があつてのことだ。感謝している」

壇上の雄二が珍しく、素直に礼を言う

『珍しいな雄二。素直に礼を言うなんて』

雄「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

そのまま雄二は言葉を進める

雄「ここまで、来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、

生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

F1「おおーっ」

F2「勉強だけじゃねえんだー！」

最後の勝負を前に、みんなの気持ちが一つになっている

雄「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと思う」

ミーティングに参加していたメンバーは聞いていた話なので驚かなかったが聞いてなかったクラスの皆は驚いている

『落ち着け！内容はこれから説明する』

俺が一括をし、皆を静める

『やるのは当然代表同士。つまり雄二と翔子だ』

明「馬鹿の雄二が勝てるわけなあぁ！！？」

思わず口に出ていた明久の頬をカッターが掠める
まあ明久は友達を本気で殺そうなんて考えてるわけが
なんて考えてるかもしれないが

雄「次は耳だ」

そこまでの友達と思っ
てないんだよね

雄「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやり合えば勝ち目は無いかもしれない」

『だがそれはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともにやれば俺達に勝ち目は無かった』

だが、こうして俺達は勝ち進んでいる

雄「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

「『俺（雄二）を信じて任せてくれ。過去に神童とまで呼ばれた力を、今皆に見せてやる』」

【おおーーーーー！】

『さて、具体的なやり方だが・・・一騎打ちではフィールドを日本史に限定する』

雄「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

明「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうなったら問題のレベルも上がるだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

『おいおい。あまり雄二を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか』

明「??それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知ってるのか?」

雄「いいや。あいつなら集中なんてしなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

だろうな

『さて、雄二がこのやり方ととった理由は一つ。ある問題が出れば翔子は確実に間違えるからだ』

雄「その問題は――大化の改新」

明「大化の改新? 誰が何をしたのか説明しろ、とか? そんなの小学生レベルで出てくるかな?」

『いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問い――
―年号だ』

雄「大化の改新がおきたのは645年。『こんな問題は明久ですら間違えない』」

そう言いながら明久を見る
あ、目をそらした

雄「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

明「ねえ。良太、雄二」

「『なんだ、明久？』」

明「霧島さんとは、仲がいいの？」

「『ああ、あいつとは幼馴染（昔からの友達）だ』」

恋人の関係でもあるけどな

明「総員、ねえええ！！」

「『なっ！？何故明久の号令で皆が急に上履きを構える！？』」

明「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様らを殺す！」

「『俺が一体何をしたと！？』」

ただ昔からの友達だっただけだよな！？

そしてしばらくのこたごたの後

雄「あいつには小さいころに間違えて嘘を教えてしまっただが俺達はそれを利用してあいつに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

【システムデスクだ！】

？「一騎打ち？」

雄「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

今回は首脳陣での宣戦布告だ

そして今雄二と交渉のテーブルについてるのは木下優子
秀吉の性別を女性にしたくらいで普通にかわいい

優「うーん、何が狙いなのかな？良太」

問いかけたのは雄二ではなく俺に

・・・なんでさ？

『Fクラスの勝利だが？』

優「まあ、面倒な試召戦争を手軽に「・・・一騎打ち受けてもいい」代表？いいの？」

いつの間にか居た翔子の提案の受け入れに驚く雄二

翔「・・・その代わり条件がある」

明「条件？」

翔「・・・うん」

そして瑞希に視線を移し顔を俺達に向け言い放つ

・・・そんなことをするから勘違いされるんだよ翔子

翔「・・・負けたほうがなんでも一つ言うことを聞く」

『交渉成立だな』

翔「・・・勝負は何時？」

雄「そうだな。十時からでいいか？」

翔「・・・わかった」

『よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ』

雄「そうだな。皆にも報告をしないといけないしな」

交渉を終わらせAクラスを後にする

俺達の試召戦争の終結はすぐそこまで迫っていた

翌日

飯「では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為等は即失格になります。いいですね？」

雄「ああ」

翔「・・・はい」

Aクラスのディスプレイモニターには視聴覚室でテストを受ける二

人が映し出される

飯「では、はじめてください」

そしてディスプレイに問題が映し出される

《次の○に正しい年号を記入なさい》

○年 大化の改新

明「あ・・・！」

出ていた大化の改新

明「これで、僕達の卓袱台が」

【システムデスクに！】

Fクラスみんなの声がそろっ

明「最下層に位置した僕らの、歴史的勝利だ！」

【うおおおおっ！】

教室を揺るがすような歓喜の声

《日本史勝負	限定テスト	100点満点
《Aクラス	霧島翔子	97点
VS		
《Fクラス	坂本雄二	53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった

高「Aクラスの勝利です」

・・・ですよー

翔「……雄二、私の勝ち」

床にひざを突く雄二に翔子が歩み寄る

雄「……殺せ」

明「『いい覚悟だ、歯を食い縛れ！』」

姫「二人とも落ち着いて！」

瑞希に後ろから抱きつかれる

明「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのにこの点数だトー」

雄「いかにも俺の全力だ」

『この阿呆がああ！』

が、とりあえず言いたいことは行つたので雄二を殺すのはやめるとする

翔「……でも危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ負けてた」

雄「言い訳はしねえ」

図星かこの野郎

翔「・・・ところで、約束」

雄「分かっている。何でも言え」

まあ、言われることがわかってるのは俺だけだもんな

翔「・・・それじゃあー」

翔子は俺に向かって歩いてきて

翔「・・・良太。話して」

言い放った

『ま、そうなるようにけしかけたのは俺だしな。真実を話そう。仲間を集めて話してもいいか?』

翔「・・・うん」

雄「まで、翔子」

翔「・・・なに?」

話がまとまったところで雄二が声をかける

なんだ?

雄「お前、良太のことが好きじゃなかったのか? てつきり良太に交際を迫ると思ってたんだが」

翔「・・・その必要はない。良太とはもう付き合ってる」

【な!?!】

姫「わ、私だって!!」

【（ギン）】

・・・まさかここでバレルとはなんて予想外

『・・・・・・親友諸君。今日の放課後俺の家に集合。10年間の真実を話す。んじゃ!』

その言葉を残し俺は本気で走り出す

【まてーーーー!!】

俺たちの追いかけてここが始まる・・・はずだが

『面倒だな。インフィニット』

インフィ「イエス、マスター」

階段をかけ下り、適当な教室に身を隠し、描写がなかったがいつも首にかけてある双剣がクロスしたペンダント・・・インフィニットデステイニーに声をかける

『我時空を越えし者なり

無限の運命の名を持つ我が友よ
具現せよ無限の力

構築せよ無限の装甲

把握せよ無限の魔法

光臨せよ無限の運命

その力は仇名す者を切り伏せる為に

――インフィニットデステイニー セットアップ!―!』

インフィ「スタンバイレディ セットアップ」

『転移、転移先は自宅』

インフィ「了解、転移」

セットアップしなくても転移は出来るがこっちのほうが安全である

そして放課後

ピンポーン

『はいはい』

説明をするための準備をしておわった後暇だからとベースをやっていた
しばらくすると明久たちが来たようだ

ガチャ ブン

『おっと』

あけると同時に拳が飛んできた
拳を向けてきたのは

『危ないな、明久』

明「黙れ！男の敵！！」

そんな風に騒いでいる明久を無視し

『よく来たな。さあ中に入ってくれ』

【おじゃましてーす（ただいま）】

【・・・ただいま！？】

ああ、説明忘れてた

『瑞希と翔子はここに住んでんだよ。親も了承済みで』

【うそぉ！？】

ま、普通はびっくりするよな

『まあそれは置いてリビングで話をしよう』

リビング

『さて、説明する前に一つ言っておこう』

【??？】

『俺はこの世界の人間じゃない。一般的にパラレルワールド、平行世界から来たんだ』

明「どうやって？」

『次元の管理人に気に入られてさ』

雄「馬鹿な!？」

『本当なんだよ』

秀「それじゃあ根本の時に使った魔法みたいな物はなんじゃ？」

『あれは昌術と俺のオリジナルの魔法だ』

明「僕達でもそれは使えるの？」

『いや、使えない。お前らの体にこれは合わないんだ』

正確には必要な魔力が足りない、だけどな

翔「・・・10年間何処にいつてたの？」

『あーあれか。あれは桔梗、次元の管理人の名前な。桔梗に強制的に他の次元世界に飛ばされた。しかも理由はなんとなく。だそうだ』

姫「次元世界？」

『そ。この世界のほかに次元がまさに無限ともいえるだけある。地球だっていくつか見たしな。そこからここに8年以内に帰ってこい

って無茶な内容の修行をな・・・』

翔「・・・その話、詳しく聞かせて」

『うーん全部話すには一ヶ月あっても足りないから最初に飛ばされたときの話でいいか?』

【……………（コク）】

康太かよ

『あれは、最後に明久たちと遊んだ後家に帰ってきたときだった』

内容は過去編として別で書きます

『とまあこんなことだ』

雄「信じられないけど、まあ実際に見たしな。信じるしかないだろ」

『さて、どうする?』

明「何が?」

『俺は戻ってくるまでに人を殺した、一人だけじゃなく何人もだ。そんな俺でもお前らは俺を仲間と、幼馴染とそういつてくれるか?』

数瞬

【当たり前（だよ・だろ・じゃろ）？】

明「人を殺していたって良太が良太であることには変わらないんだから」

『・・・そうか』

おれは、いい仲間に出会えた
・・・あ

『そっぴゃいいのか？』

明「何が？」

『時間』

現在の時刻

0時56分

【・・・・・・・・・・】

『泊まるか？部屋はあるが』

【お言葉に甘えます】

そうしてようやく

第一次試召戦争騒ぎ（俺命名）が終わった

第一章 終　　く B クラス戦勝利そして A クラス戦ついでに良太郎活入部　　（後書

あとがき

というより過去編に関する話です

過去編は俺の気分しだい（という名の思いつき）で書いていこうと思います

基本はこのまま進んでいきます

あと、今後クロスしていく作品が異様に多くなると思います
ほとんどが思いつきで出すのでどんな形になるか分かりません
ご理解していただけるとありがたいです

間章ゝ軽音部始動！ーゝ（前書き）

少しだけ間章が入ります

間章は見なくても分かるようにしたいなゝと思ってます

間章「軽音部始動！！」

第一次試召戦争騒ぎが終わり、部活があるということでは何とか西村先生との交渉も成功し、補習をなんとか免れることに成功した

そして4月もあと一週間

今、本日最後の授業が

キーンコーンカーンコーン

【終わったー】

ガラ

鉄「お前らー補習を始めるぞ！」

西村先生が入れ替わりで入ってきた・・・と

『それじゃあ、西村先生失礼します』

鉄「ああ。頑張れよ」

『ありがとうございます』

明「そういえば良太は何でいつも補習を免れてるの？」

『成績に問題が無いのと部活があるからだ。んじゃな』

そっつい教室を出る

うしろから【ええええええ！！】なんて聞こえたが無視無視

音楽室

ガラ

『おいーっす』

漣「やあ、良太」

紬「こんにちは、良太君」

中に入ると出迎えてくれる二人・・・ん？二人？

『律はどうした？』

漣「律ならもうすぐ」

ガラ

律「・・・・・・」

ちょうど律が入ってきた
何だが元気がない感じた
無言でいつもの席に座る

『どうした？』

律「4月もあと一週間」

紬「誰も来てくれませんね」

漣「バンドも組めずに廃部か」

律「それは絶対いやあ!？」

『まあ廃部になっても人数集めて作ればいい話だけだな』

翌日 昼休み

残り少ない期間でどうするかを話し合う為に音楽室に居るはずなんだが

律「ほら?これがさ?」

漣「なんだそれ?」

紬「うふふ」

・・・何時の間にお茶会になったんだろう?

ガチャ

山「こんにちわー」

山中先生が音楽室に来た

【こんにちわー】

山「入部希望者が居たわよ」

『うつし』

山「はい、よかったわね」

入部届けを受け取る

山「それと、素敵なティーセットだけど飲み終わったらちゃんとかたずけてね」

【はい】

山中先生は微笑むと音楽室をでていく

律「うつしやあ、廃部じゃなくなるう」

『名前は平沢 唯・・・』

律「なんか名前からすごそうだぞ」

漣「やっぱギターだよな？」

『だと嬉しいんだがな。まあボーカルでもかまわないけど』

紬「楽しみですねえ」

律「すつごおい。強力なメンバー加入う」

いや、強力とは限らないから

興味本位とかありえるから

そして放課後

いつも通りに音楽室に向かうと音楽室前に挙動不審な子がいた
不思議に思い肩を掴むと

パシ

?1「ひひひひひひ」

なぜかびくう!!となり涙目というか泣き出す

?1「あううううう」

あ、この前の器用に泣きつきながら歩いてた子だ

『何やってるんだ?』

?1「あ、びつくりした」

いやそれはこっちの台詞だよ

『・・・もしかして、君が平沢 唯?』

？「あ、はい」

『入部希望の？』

唯「は、はい」

どうやら間違ってないようだ

それにしても何かやってたようには見えないな
律の勘違いって……

『まあ立ち話もなんだ「あれー？良太何してるの？」よう律』

律「その子だね？」

『ああ、入部希望の「君が！ギターがスツごく上手いんだってね！」
！」

そんなこと誰も、一言も言っていないぞ

律「歓迎するよ」

・・・おい平沢の顔にあらぬ尾ひれがついてるって出てるぞ

律「皆ー、入部希望者が来たよー」

平沢の手を引き音楽室に入っていく律

漣「本当か？」

紬「わぁ」

・・・お前らも律のが最初に言い出したって忘れてるだろう？

『おいーっす』

漣「ようこそ、軽音部へ」

紬「歓迎いたしますわ」

・・・スルーか

律「ようし、むぎ。お茶の準備だ」

紬「はいっ」

『先にはじめてるぞ』

律「ナイス、良太」

まあ困惑している平沢の気持ちを落ち着かせる為に紅茶を出そうと
しただけなんだけどな

準備を手早く済ましお茶とケーキを出す

『まあ、上手くはないかもしれないが良かったらどうぞ』

唯「は、はい。いただきます」

そっつい、紅茶を一口

唯「おいしい」

そしてケーキも一口

唯「おいひーい」

口に物を含みながらしゃべるのは感心できないんだが
幸せそうにケーキを食べる平沢

・・・なんか和むな

律「平沢さんはどんな音楽やりたいの？」

唯「え？」

律「どんなバンドが好きか？」

唯「え」

律「好きなギタリストは？」

唯「ええっと」

・・・やっぱり新人ってかんじか
興味があって入ってみたいって感じがする

唯「じ、じ、じ「ジミー・ヘンドリックス？」

おいおい漫、そんな風にかぶせるなよ

唯「そうじゃなくて、じ、じ」

『実はギターを弾けないとか？』

唯「そ、そうなんです」

．．．．．

やっぱそうだったんだ

唯「ご、ごめんなさい。期待なんかさせちゃって．．．」

『いや気にすることは無いよ。勝手に期待したのはこっちだし』

唯「で、でも．．．」

『うーん。だったら、演奏だけでも聴いていってくれないか？』

唯「い、いいんですか？」

『ああ。なっ』

皆に確認を取ると皆うなずいてくれる

『じゃ、準備するか』

そうして準備を開始する

やる曲は 翼を下さい

律「ワン、ツー、スリー、フォー」

サビの部分のみを演奏し終わる

ガタ

唯「はあ」

パチパチパチ

唯「はああ」

パチパチパチ

立ち上がり拍手をしてくれる平沢

律「あははは。どうだった？」

拍手されたことが恥ずかしかったのか少し照れながら律が問う

唯「なんていうか、すごく言葉に言葉にしにくいんだけど」

律「うん」

唯「男の人以外あんまり上手くないですね」

ばっさり言ってくれるなあ

唯「でも、なんだかすごく楽しそうでした。私、この部に入部します！」

・・・

プニ ムギユ

漣と律は互いの頬をつまみ夢じゃないかを確認する

『よっしゃあ!』

律「ばんざーい」

うーん、こいつら瑞希たちに負けず劣らず可愛いな
こんな表情とか

律「ちよつと失礼」

『それ、漣のカメラか?』

律「それじゃあ、軽音部活動開始記念に」

漣「あ、私のカメラ」

やっぱりか

律「いっくよー」

カシャ

唯「あ、でも私楽器何にもできないし。あ、マネージャーとかどう
かな?」

『いやいや、運動部じゃないんだし』

紬「そうだ、この機会にギターを始めてみたらどうかしら？」

唯「で、でもすごく難しそう・・・」

『なれたらそうでもないぞ？それに俺達もできる限り教えるし』

唯「そうだね。さっきの演奏聴いてたら私にもできるか持っと思ってきた」

律「ソレハヨカッタ」

律、棒読みになってるぞ

そうして俺たちはようやく廃部を逃れ、ドラムの律、キーボードの紬、ベースの漑、ギターの唯（自己紹介の時に名前呼びでいいことになった）そして基本ボーカル、欠員が出たときはそっちにはいる何でも係の俺の5人で軽音楽部はスタートした

間章その2 唯のギター 意外な？再開

翌日 放課後

習慣になって来ている音楽室での部活（習慣じゃ無かったらおかしいが）

唯「こんにちわー」

『おいーっす』

唯が音楽室にきてメンバーがそろそろして席に座るなり

唯「ねえねえ。なんで漣ちゃんは、ギターじゃなくてベースをやるうと思ったの？」

と言い出した

漣「・・・だってギターは・・・は、恥ずかしい／＼／」

微妙に頬を赤くしている

・・・これでモテないのか？

唯「は、恥ずかしい？」

漣「だって、バンドの中心って感じで先頭に立って演奏しないといけないし、観客の目も集まるだろう？自分がその立場になるって考えるだけで・・・」

バフン

想像したら耐えられなくなったのか頭から湯気を噴出す漣

『お、おい。大丈夫か?』

唯「漣ちゃん!?!」

紬「大丈夫?」

そのままよろけたので支えてやる

漣「す、すまない／＼／」

なぜか顔が赤いが・・・

唯「むぎちゃんは、キーボード旨いよね?キーボード暦ながいの?」

紬「わたし、四歳のころからピアノを習ってたの。コンクールで賞を貰ったこともあるのよ」

唯「へ、へえすごいね!」

『すごいもんだな』

紬「い、いえ／＼／」

なんで軽音部に入ってたんだろう?

紬「さあ。いただきましたよ」

『俺のは手作りだから旨いかどうか保障できんがな』

唯・漑・律「」「嘘お!!!!!!!!!!??.?」「」

『・・・気持ちは分かるがひどくないか?』

唯「そういえばずっと疑問に思ってたんだけど・・・」

何か聞きたいことがあるご様子の唯

唯「この部室ってやけに物がそろってるよね?最近の高校ってこんな感じなのかな?」

まあ活動を再開し始めたにしては物がそろってるよなあ

『ああ、それは俺と紬が持ってきたんだ』

持って来ておいて言うのもなんだけど

唯「自前!?!」

紬「はい」

・・・俺は時折バイトと急に必要なときは投影で宝石作ったりして稼いでけど、紬の場合は家からあまつてるものを持ってきてるって言うから金銭感覚の違いが良く分かるよ

唯「律ちゃんは、ドラムって感じだよな」

律「なっ！？・・・あたしにもすごく立派な聞けば誰でも感動する理由があるんだぞ」

唯「へえ、どんなどんな？」

『俺も聞きたいな』

律「それはあ」

『それは？』

律「そのお、あれだ・・・カッコイイから」

唯「そこ？」

『まあ律らしいっちゃあらしいな』

律「だ、だってさあ。ギターとかベースとかキーボードとか指でチマチマ想像しただけで、だーいやってなるんだよあ」

・・・楽器選びにも性格でるよなあ

唯「良太君は、何で全部できるの？」

・・・俺にも振ってくるか

『まあ、最初はどれやるか悩んで全部やったのがきつかけだな。どれをやるか決まらずに歌だけ、なんてのもやったし。最終的には全部の練習を続けた結果が今の状態だな』

唯・漣・律「「「すごー!」「」」」

紬「そういえば、去年の文化祭で欠員が出たバンドの助っ人でギター、ベース、ドラム、ボーカルを順番に務めた一年が居たという噂を聞いたんですが、もしかして・・・」

『ああ、そりゃ俺だ』

紬「え、でも助っ人の方は黒髪、黒眼の人だと聞いたんですが・・・」

「

『それはカツラとカラコンだ』

どうしてもっていうからわざわざ髪型までトリップ前にしたからなかならばれない自信があったからあれで気づかれてたら少しへこむあ、そういや

『あの時軽音部の助っ人もしたからその時の曲がどっかにしまっているかもしれないから時間があつたら探してみるか』

漣「そうだな」

そうしてしばらくお茶会をする

紬「おかわりはいかが?」

唯「あ、ありがとう」

『そういえば、紬は合唱部に入りたかったんだよね?』

紬「ええ、でもめったに出会えないとっても楽しくて愉快的な人たちの仲間になりたかったの」

そういつて紬は「それに・・・」と続ける

紬「これから先もう出会えないような素敵な人に出会えましたから／＼／」

と頬を赤くしながら言う

気のせいか他の三人もそれに反応した

漣「そ、そういえば平沢さん、ギターはもう買ったの？」

唯「唯でいいよ」

漣「え？」

唯「私すでに漣ちゃんのこと漣ちゃんって呼んでるし」

漣「ああ。うう。ゆ、唯？」

・・・その表情反則じゃね？

『で、唯。ギターはどうした？』

漣の表情に少し顔を赤くしていた唯を現実に戻す

唯「んあ、ギター？・・・ああ！そっかあ、忘れてたあ。私ギターやるんだっけ？」

漣「『おいおい、軽音部は喫茶店じゃないぞ』」

唯「えへへへ。ギターってどれくらいするの？値段」

『安いものだと一万円くらいからあるけど、あまり安すぎるのも良くないからな』

漣「5万円くらいがいいんじゃないか？高いものだと10万からあるし」

唯「ええ！5万・・・私のおこずかい10ヶ月分・・・」

そっつい律に視線を向ける唯

唯「部費で落ちませんか？」

律「落ちません」

『活動を再開したばかりの部にそんなに部費なんぞ入ってこないぞ。それに軽音部は基本自分で楽器を用意するからな』

唯「うう・・・」

事実には落ち込む唯

紬「これ、おいしいですよ？」

慰める為にお菓子をさしだす紬

・・・なんとなく餌付けに見えてしまっから不思議である

唯「はむう。んむんむんむんうゝ」

『・・・とにかく、楽器がないと始まらないからな。今週末にでも見に行くぞ』

律「おー！」

週末 駅前

確かに待ち合わせには便利だが

F1「（あの野郎、姫路さんや霧島さんと付き合ってるだけでも許さんのにさらに女の子に囲まれてるなんて！！！！）」

F3「（奴を必ず査問委員会にかける！！！！）」

さつきから知り合いに見られるたびに嫉妬と殺気を送るのは勘弁願いたいなゝ

漣「ん？どうした？良太」

『んにゃ、なんでもない』

漣「ちょ、良太！？／＼／」

不思議そうに上目遣いでたずねられ少し照れるので照れ隠しに頭を少し強引になでる

うーんサラサラでいつまでも撫でたくなるなあ

律「唯〜こっちこっち〜」

唯「あ、皆〜」

と、唯を見つけた律が手を振り唯が手を振り返し、こっちにくる
・・・はずなのだが

『・・・なんであと数メートルなのにたどりつけないんだ?』

律「さあ?」

数分後

唯「ごめん、ごめん」

『いくぞ〜』

数分後ようやく唯が合流し、商店街に入る

『そつえば金は大丈夫か?』

唯「えへへ。無理いっておこずかい5万円前借させてもらった。これからは計画的に使わなきゃいけないんだけど・・・」

言葉の途中で唯が服に釘付けに

唯「今なら買える」

『うおい』

唯「ちよつと見るだけ」

普段天然なのにこういうときは我を通すな

『じゃあ、先に楽器屋に行ってるから落ち着いたら連絡くれ』

漣「え、でも・・・」

『いいから』

そういつて強引に漣と紬を律と唯の元に送る

1時間後 楽器屋

漣「おい」

『ん？もういいのか？もう少し遊んでてもいいぞ？』

律「いやいや、今日は楽器を見に来たんだから」

『それもそうだな。まあ唯が気に入るそうなのを見つけたんだが、重量と値段が・・・』

そういつて取り出すのは一本のギター（ギブソン・レスポール・ス

タンダード)

唯「あ、可愛い!!」

気に入ってくれたようだが値段のほうは・・・

漣「25万・・・」

唯「あ、本当だ。・・・これは流石に手が出ないや」

といいながらも目を離さない唯

『・・・どうしてもこれがいいか?』

唯「うん」

即答

律「そういえば、私も中古のドラムセットを値切って値切って・・・」

漣「店員さん泣いてたぞ」

おいおいやりすぎだ

まあそこまで気に入ったんだろうけどな

紬「あの、値切るって?」

律「欲しいものを努力と根性でまけさせるものだよ!」

紬「すごいですね！あこがれます！！」

何処にあこがれる要素が！？

漫才みたいな感じで話す律と紬

そしてまだギターを見ている唯を見る

・・・はあ

『なあ、皆でバイトするってのはどうだ？皆ができそうなバイトの心辺りもあるし、幸いもうすぐゴールデンウィークだ』

律「いいね、それ。でもどんなバイト？」

唯「え！？でもわ、わるいよ」

『まあ交通量調査のバイト。俺の方はつてを頼って個人的に稼ぎのいいバイトをするけど・・・』

唯が何をいつてるが知らん

こいつの場合は多少強引じゃないと聴きそくに無いからな

紬「いいですね私やってみたいです。でも良太君は何のバイトをするんですか？」

『喫茶店で・・・な』

そついいながら携帯を取り出しある人へ電話をする

ガチャ

？１「はい。喫茶翠屋です」

『お久しぶりです。桃子さん』

かけた先は時空を越えて喫茶翠屋へ

この携帯、時空間でも電話が出来るように作ってあるのだ

桃「あ、良太君？久しぶりね。どうしたの？」

『実は明日からゴールデンウィーク終了まで翠屋で雇っていただき
たいんですけど・・・』

桃「いいわよ。久しぶりに裏メニューの復活ね。今でもたまに頼ま
れるんだから」

『ありがとうございます。それじゃあ、仕込みから手伝ったほうが
いいですか？』

桃「ええ、そうしてくれると助かるわ」

『分かりました。それじゃあ、8時に行きます』

桃「まってるわ」

・・・リンディさんに毒された？
まあいいや

ピッ

プルルル

『あ、そちらの交通量調査の応募を見て電話をしたのですが、担当の方はいらっしゃいますか？あ、はい。四人ほど。はい、はい。わかりました。ありがとうございます』

再び電話をかける

こっちは唯達用だ

そうして唯たちに話を向ける

『おーい。お前らの分も確保できたぞ』

唯「ありがとう。良太君！」

律「ありがと良太！」

漣「すまない、良太」

紬「ありがとうございます、良太君」

『平日は16時から18時休日、祝日は14時から18時までをコールデンウィークまで続くからな』

律「りょーかい」

『あ、ちよつとまってる』

そっつい店員へと話しかける

『すみません』

店「はい、何でしょうか？」

『あのギターが欲しいんですけど、お金が無くて。どうにかしてゴールデンウィークが終わるまで売のを待ってもらえないでしょうか？』

店「それは私の一存では決められませんので、少々お待ちください。店長と相談してきますので」

『はい』

数分後

店「おまたせいたしました。ゴールデンウィークまででしたら大丈夫のことです」

『ありがとうございます！』

うーんご都合主義って便利だな
(それを言っな！！By作者)

そうして唯たちの元に戻る

『バイトの期間が終わるまでギターを売らないでもらえるように頼んできた』

律「ナイス、良太！」

『それじゃあ、明日から頑張れよ場所は。。。だからな』

唯「わかった！」

『んじゃあな』

そういいこの日は解散となる

次の日

置き書きを残しトレーニングルームでセットアップをし、海鳴市へ
時空間転移をする

海鳴市 海鳴臨海公園

いつもは朝早くからここでランニングなどをする人が多い公園だが
この日に限り、人がいなかった
そして、その公園に空色の魔法陣が浮かぶ
そしてその中から出てきたのは

『管理局に気づかれたかな？』

インフィ「おそらく気づかれました。ミッドチルダからこの世界に
転移してくるようです」

『ここに直接？アースラとかでくるんじゃなくて？』

インフィ「直接です」

『……悪いタイミングで来たかも。まあ翠屋でバイトす

る時点でリンディさんにも俺が来ることは伝わってるだろうからば
れるのは覚悟してたけどな』

ドラマCDってこの時期だっけ？

・・・まあいいや
考えても仕方ない

『さて、行くか』

さて、場所が変わり喫茶翠屋の前

カランコロン

？1「あーごめんなさい。まだ開店してないん・・・

『あ、久しぶりです。美由紀さん』

美「噓、良太君！？何時帰ってきたの！？」

『あれ？桃子さんから聞いてないんですか？俺、今日からゴールデ
ンウィークの終わりまでここでバイトすることになってるんですけ
ど・・・』

美「あ、今日からゴールデンウィークが終わるまで期間限定で入っ
てくる強力な助っ人って良太君のことかあ」

『・・・俺、そんな説明されてるんだ・・・』

？2「やあ、久しぶりだね良太君」

『お久しぶりです。士郎さん』

士「話は桃子から聞いてるよ。ゴールデンウィークまで宜しく頼むよ」

『ははは。あまり期待しないで下さい、ブランクあるんですから。あ、厨房借りてもいいですか？裏メニューの仕込みしたいんですけど・・・』

士「ああ、いいよ」

そうして仕込みも終わり、開店時間の10時になる
気のせいかな10年前の昼時がさらに忙しくなっているような・・・

『って！？誰だよ裏メニュー15人分しかもテイクアウトで頼んだ奴は！！！』

しかし、ぐちぐち言っても仕方がないので急いで厨房に入り、裏メニューを作る

裏メニューは自分で持つて行く

これは10年前から変わらないものだ

『うつし、終了！』

ようやく15人分作り終わる

さて、誰だ？15人分なんて無茶な注文をしゃがった奴は・・・

厨房から店内に移り、テーブルに持つて行く

そこには3人座っていた

3人ともかなりの美少女で

青いショートに活発そうな子

オレンジのツインテールで少しきつそうな子
そして栗色のサイドポニーの女性・・・って!!!!!!!!!!?

『・・・・・・・・な』

?1「やつぱり、帰ってきてたんだね。この町にEXランクの時空間転移の反応があったときからもしかしてっと思ってたんだ」

そういつてこっちに振り返るサイドポニーの美少女・・・高町なのは
は言った

?2「あ、良太だ!」

?3「嘘、良太!?!あんたこんなところで何してるのよ!?!」

『まあ・・・バイトだ』

青いショートの子・・・スバル・ナカジマと

オレンジのツインテールの子・・・ティアナ・ランスターとも再開した

というかやつぱりドラマCDのタイミングだったんね・・・

どうしよ?ドラマCDは存在しか知らないから内容知らないんだけど・・・

『ま、なんとかなるか。俺とインフィニットデステイニーなら』

インフィ「その通りです、マスター」

な「あ、久しぶりインフィニット」

インフィ「お久しぶりです。なのはさん」

俺の呟きに答える相棒

そしてそれに気づいて挨拶をするのは

・・・なんかいいいや

な「そういえば聞いたよ。スバルのお母さんとティアナのお兄さんを救ったんだってね」

そう

クイントさんとティードさんを救って未来を変えてしまったのだ
どうやら二人が管理局に入隊した理由はあまり変わってないようだが
まあ詳しくは過去編で！

・・・電波が来たな

『偶然だよ、偶然』

な「当時じゃ明らかに、オーバーテクノロジーのデバイスを渡す。
これの何処が偶然なのかな？」

『・・・そ、それはともかく！こんなに頼むってことは』

な「フェイトちゃんにはやてちゃん、すずかちゃんにアリサちゃん
それとエリオとキャラ、アルフさんにエイミィさんそれにザフィー
ラ以外の守護騎士にリィン皆そろってるよ」

ふむそれだけそろってるならそろそろあれを話しても大丈夫か

『あ、桃子さん』

桃「何かしら？」

『抜けても大丈夫ですか？あいつらにはなさなきゃならないことがあるです』

桃「しょうがないわねえ。いいわよ」

『ありがとうございます』

そっつい、なのは達と共に拠点となっているらしいアリサの別荘へ行く

『そっついえば今回は任務か？俺が転移してきたときの反応だけここにくるわけじゃないだろ？』

な「今回はこの町にロストロギアが落ちたらしいの。だからその回収。滞在期間はゴールデンウィーク終了まで延びるだろうけど」

・・・ほんとこの町はロストロギアに縁があるな

そんなことを話しているうちに拠点に到着したようだし
しかも時間は夕飯時

まさかここまで時間がかかるとは予想外だった

な「ただいま」

『おいーっす』

？「あーお帰りなのはちゃん、りょうたく、ん・・・」

？2「お疲れなのは、りょう、た・・・」

『おおく久しぶりだな。はやて、フェイト』

うーん久しぶりで固まるって少しだけ予想してたけど・・・
って！？何で涙目になりますかお前らは！？
ああ！泣くな泣くな！！

『ほら泣くなってぐふ！！』

なんか再開のパターン化して来てないか？

『何時の間にヴィータまで来てんだよ・・・』

ヴ「いままで何処行ってた」

『親友のところにな』

10年前と変わらない姿のヴィータが鳩尾に頭を入れながら抱きついてきた

は「何時まで抱きついてんのヴィータ」

フ「そうだよ」

・・・何でお前らとなのはから黒いオーラが見えるんだ？

？1「あんた相変わらずねえ」

？2「まあまあ。アリサちゃん」

『よお、久しぶり。アリサ、すずか』

コテージのほうから歩いてきたのは金髪ショート・・・アリサ・バニングスと紫のロング・・・月村すずかの二人だ

『あ、そうだ。裏メニューお待ちどうさん』

ア「そういえばなんであんたがここに居るのよ？」

『翠屋でバイト中のところで裏メニュー15人分という暴挙に届けついでに文句言ってるうと思ってテーブルに行ったら会った』

な「にはははは」

笑ってごまかしてもだめだぞなのは

『まあいい。見た限りこれから飯みたいだから準備の前に少し話しておきたいことがある』

な「なに？」

『10年前のはやての家族についてだ』

は「10年前ってあの子のこと!？」

『ああ。実はこっそり回収しといて数年前にやっとなの部分の除去と修理ができた』

名前を変えちゃったけどな

そういいながら取り出すは胸元のインフィニット

『インフィニット、夜炎の書、リンク』

インフィ「了解、夜炎の書リンク」

そして、とあるところに隠してある夜炎の書に魔力がつかざるのを
確認

『夜炎の書、転移。 転移先は我の元に』

インフィ「夜炎の書、転移」

そしてここに転移してきたのは魔道書

『おいで、アイン』

アイ「はい」

俺の呼びかけに応じ夜炎の書から出てくるのは

は「う・・そ」

アイ「お久しぶりです。主はやて」

10年前の闇の書事件で失われたはずのはやての家族
当時の夜天の書の管制人格、リインフォース・アイン

は「リイン」

泣きながら、アインに抱きつくはやて
しばらくは見守るとしよう

そうして、はやてが泣き終わるまでの間に食事の準備をし、今は食
事中

『あ、ヴィータそれは俺の肉!!』

ヴ「へへーん。油断するほうが悪いんだよ」

シ「ほう。では私もいたくとしよう」

ヴ「あ!?!何すんだよシグナム!!」

シ「油断するほうが悪いのだろう?」

ヴ「うっ」

『はは、負けたなヴィータ』

そうして食事は済む

『そついや見たところコテージに泊まるみたいだけど、風呂はどう
するんだ?あそこ風呂着いてないだろ?』

ア「何であんたが家のコテージの中を知ってるのよ!」

『あれと同タイプのものを見たことがあるからな』

ア「あんたが言つと本当に感じるから不思議だわ」

な「にはは」

なのは、ここにきてからそれしか言つてないか?

は「まあ、そういうわけでこれからスーパー銭湯にいきまーす」

ん?

『スーパー銭湯なんて何時の間にかできたんだ?』

な「数年前にできたんだよ」

そりゃあ知らないわけだ

フ「それじゃあ、お風呂に行く準備をしてここに集合ね」

スバルたちは「?」って顔をしていたが準備をしに行つたようだ

数分後・・・

全員が準備を終えたようなので銭湯に行く

エ「良太さん、銭湯ってどんなところなんですか？」

『そうだな。たくさんの人と一緒に入る風呂って所だな』

エ「へ」

なんか楽しそうにしているエリオ
何でだろ？

『なあ、フエイト』

フ「何？」

『もしかして、エリオとキャロって銭湯とか行ったこと無い？』

フ「うん。そうだよ」

なるほど

まだ子供だし、初めてのものに興味津々って所かな？

とまあこんな話をしている間に銭湯に到着

『へーなかなかかいな』

は「せやろ？」

『ん？10歳以下の子供はどちらでも入れます・・・なあエリオ』

エ「何ですか？」

『おまえは男湯と女湯どっちに入るんだ？まだ10じゃないよな？』

エ「お、男湯のほうに決まってるじゃ無いですか／＼」

キ「え？エリオ君は一緒に入らないの？・・・」

エ「う、うん・・・」

フ「エリオもこっちにきたらいいのに」

エ「りよ、良太さんと仲を深めようと思って・・・」

『まあ、俺はそれならそれでいいけどな』

エ「い、行きましょう！！」

そついい俺の手を引いて男湯に入っていくエリオ
なんかこれだけで終わらない気がするんだが・・・

カポーン

『ふう。いい湯だな』エリオ』

エ「そうですね」

完全にふにゃつとしてお湯につかっている俺とエリオ
そしてそこに刺客が・・・

ガラッ

？「あ、エリオくん」

エ「え？キャロ！？」

そう、キャロがやってきたのだ

まあキャロも10になってないからこれるわな
タオルもしっかり巻いているようだし

『二人とも、露天風呂に行かないか？そこでゆっくりと話すとしてよ
う』

エ・キ「はい」

そうして露天風呂に移動

『そういえば二人はフェイトに引き取られたんだよね？』

エ・キ「はい」

『ま、甘えられるうちに甘えておけ。甘えることは子供の特権だからな』

心の中であと女性のと付け加える

エ「え、」

キ「で、でも・・・」

『迷惑だっと思ってるならそれは違うぞ？あいつはお前らに甘えて

欲しいって思ってると思うがな』

なんか母性本能みたいなのあったのがわかるし

『まあこれで今後フェイトに「キャラ、やっぱりそっちにいたんだね」ん?』

?1「フェ、フェイトちゃん、そっちは・・・」

後ろで扉が開き、声がしたのでそっちを向く

今思えばそのとき振り向かずに男湯に戻るべきだったのだろう

『な!?!』

フ「あ。う、ごめん!」

な「あ、フェイトちゃん」

そういつて扉を閉めるフェイト
だが

『何でこっちに入って扉を閉めるんだよ//』

な「もう、フェイトちゃんったら」

フ「ご、ごめん・・・」

バスタオルを体に巻いていただけてもよしとするか

エ「ば、僕達あっちの露天風呂に行ってますね!行こうキャラ」

キ「う、うん。失礼します」

『あ、二人とも・・・』

変に気を使いやがって

・・・あ、そういや

『・・・なあ二人とも』

フ・な「何？」

いくらバスタオルを巻いているといっても、その魅力的なボディラインは分かるので後ろを向き聞く

『怒ってるか？勝手に行った事を』

な「当たり前だよ。いきなり、書置きだけを残して行っちゃって」

フ「私たち、ずっと泣いてたんだからね」

『う。ご、ごめんな？』

な「いいよ。だって今、ここに居てくれるんだから」

フ「そうだね」

そういいながら二人は俺の背中に背中を合わせて湯につかる

『……なあ。なんでお前らはこんなに長い間待っていてくれたんだ

？
』

な「にゃ！？そ、それは・・・／／／／」

フ「／／／／」

言葉に詰まるのは

フェイトにいたっては言葉も発さない

・・・なんか前に見たことある光景のような

な「・・・あとで、必ず言うからまっててくれないかな？」

『それは別にかまわんが・・・』

臨視感を感じるが同じ展開は無いだろう

・・・と信じたい

『さてと。何時までもここに居るわけにはいかないし、俺はもう出るな』

な「あ、うん」

フ「わかった」

そついい風呂から出て行きそのまま着替え外で皆を待つ

『・・・・・・・・分かってはいたが長いな』

本当に女性の風呂は長いとはよく言ったものである

そうして、数十分後

ようやく全員がそろつ

『んじゃ、戻る「ロストログリア反応!」む』

は「全員出動や!」

『俺も行こう。ブランクは多少あるが、なゑにまだお前らに遅れはとらんさ』

な「ならお願い!」

『よし、インフィニット、魔力サーチ』

インフィ「了解。魔力サーチ。・・・場所特定。の川原です」

『周りに人は?』

インフィ「生体反応なし」

それなら派手にやっても大丈夫そうだな

『よし。はやて、ここから目的地まで転移して大丈夫か?』

は「ほんとはだめなんやけど。今は緊急事態やから許可します」

『よし、皆、転移するからデバイスを起動して俺の周りに。行くぞ
インフィニット』

インフィ「イエス、マスター」

『我時空を越えし者なり

無限の運命の名を持つ我が友よ

具現せよ無限の力

構築せよ無限の装甲

把握せよ無限の魔法

光臨せよ無限の運命

その力は仇名す者を切り伏せる為に

――インフィニットデステイニー セットアップ!』

インフィ「セットアップ」

『アイン』

アイ「はい」

そして夜炎の書も取り出し、アインを呼び出す

『いくぞ』

「『ユニゾン・イン!』」

修理中に俺もアインとユニゾンできることが判明した
その試運転も兼ねる

ユニゾンしたことにより髪に銀色が混ざる

な「え？」

は「良太君ってアインとユニゾンできたんか!？」

『まあな。それじゃあ行くぞ？ 転移』

川原

『・・・これは面倒な』

目的地に着くとそこで暴走していたロストロギア
その能力はダミーを徐々に増やすというものだった
ひとつひとつの戦闘能力は低く、大して害は無いのだが
スライムの如く大群でかかられると非常にまずい
ついでに言うと言った目は黒いスライム

『（はやて、ここは俺が一気にしとめたいんだがいいか？）』

は「（そやね。良太君の実力をフォワード陣に見せるのもいいし）」

よし、了承がもらえたところで

『っしやあ！行くぜ！！！』

まずはためしで

『インフィニット!』

インフィ「スカイ・シューター」

『（頼むぞ、アイン）』

アイ「（はい）」

『シュート!!』

そついい作り出すは10発の魔力弾
魔力弾の操作はアインに任せる
一体に一発いれる

ダミーは弾けとんだがすぐに再生される
・・・これはきりが無いな
だが、本体は微妙に行動が違うはず

『インフィニット、クロスレンジ モード刀!』

インフィ「了解、モード刀」

カートリッジをロードせず変形
正宗へと姿を変える

「『はあ!! 魔人剣!!』」

魔力を加えた衝撃破を放つ
しかし、再生するのはかわらない

『まだまだ!! インフィニット、アイン、魔力変換 雷!』

「「了解^{はい}！」」

そうして俺は詠唱を開始する

「『雷光満所我はあり、黄泉の門開くところ汝あり、貫け神の雷！
インディグネーション！』」

雷が落ち、かなり広範囲を攻撃できたがその中に本体は居ないようだ

『面倒だな・・・ウイング！』

インフィ「イエスマスター、ウイング」

そして、俺のある特殊能力を発動させる為に詠唱をする

『体は運命で出来ている

血潮は魔力で心は気

幾重の戦場を超えて不敗

ただ一度も敗走はなく

その力は守ると決めた者の為に振るう

故に使い手は運命の波の中でそのときを待つ

そう その体は

無限の運命で出来ていた！

固有結界 無限の運命！！』

固有結界、俺にはこれがあった

しかもこれ、知っている能力をすべて使えることができるという優
れもの

・・・チートじゃね？

と思ったりすることもあった

しかし、いままで助かったのには変わらない

そしてこの固有結界の中は見た目が外とかわりがない

な「何がおこったの？」

『なのは！あれをやるぞ！！』

な「え、でも周りの被害は・・・」

『それなら心配いらない！！』

な「え？・・・わかった」

よし

そして俺も準備をする

『インフィニット オーバードライブ！モードレイジングハート！
！』

インフィ「オーバードライブ モードレイジングハート」

俺の腰についているダブルソードがレイジングハートになる

さすがにBJまでは真似ない

・・・やってみようかな？

今の状態（髪が腰まで届くロング）なら大丈夫か？

やってみよう！！

そしてBJもなのはの物に変える

フ「え！？」

『いくぜなのは!』

な「う、うん」

俺となのはの前に魔力が集まってゆく

「『スターライトブレイカー!』!」

空色と桃色の光の柱がロストロギアを全て吹き飛ばす

結界内は衝撃がすごいが外部には一切魔力、衝撃を出していない
ん?なのはのリミッター?

そんな物この中じゃ意味無し♪

『あれか、インフィニット!』

インフィ「了解、封印」

本体を見つけ出し、封印

封印も無事終了し、固有結界を解除する(もちろんBJも元に戻る)

『ふいゝ終わったー』

ス「すごいよ良太!」

『まあ。一応EXランクを持つてゐるからな』

「「「「EXランク!?」」」」

テ「やっぱ才能がある人はいいわね」

『なぐに言ってるんだよ。ティアナにだって才能はあるぞ』

テ「そ、そう?」

『そうそう。だからあんま自分を下劣すんなって』

は「良太君」

『ん?』

と、はやてが話しかけてくる

な「さっきのはどういうことかな?」

『さっきの?』

フ「インフィニットがレイジングハートになったこと」

・・・あれ?

『話してなかったっけ?』

全員が一斉にうなずく
あるえ?」

『そうだっけ? すまんすまん。なら説明するな』

フルドライブはコピーモードを使用可能にっていて、これにより自分の知っているデバイスに姿を変えることができるというものだ

ついでにそのマスターのBJもコピーできる

『とまあそんなことだ』

な「へえ」

ス「それにしても良太ってなのはさんのBJを着ても違和感なかったね」

『何でだろうな』

ほんとに何でだろ？

テ「自分で言うな！」

は「ほなロストログアも封印できたし」

フ「帰ろうか？」

『あー送っていくぞ』

な「え、でも」

『一応まだ緊急事態ってことになるからな今転移しても問題は無いはずだ』

な「うーんじゃあお願いしようかな？」

『あいよ。転移』

そうしてロストログアの確保はようやく終了した
そういえばなんでこんなことになったんだろう
バイトをしに来ただけなのに

拠点

転移も終わり、俺はデバイスとユニゾンをとく

『ありがとなアイン』

アイ「いえ」

戻ってきた奴らはコテージに戻るようだ
・・・あ

『なのは、フェイトちょいまち』

な・フ「なに？」

『銭湯でのこと聞いてないぞ』

な「あ、ちょっとまって。はやてちゃん」

は「なんや？なのはちゃん」

フ「さっきの話なんだけど」

は「あ、あれか！？／／／」

ん？はやてにも関係あるんだ

三人共通してるなんてすごい偶然だな
流石親友同士

な「そ、それでね。私たちがずっと待ってた理由なんだけど・・・」
／／
」

フ「それはね・・・／／／」

なんか臨視感がするんだが・・・・・・まさかな？

は「わ、私たちがずっと、良太君のことを好きだったからや！！／
／／／」

まさかの告白でしたー

本当に何時フラグ立てたんだろ？

というか俺、彼女居るんですけど

でも、だからってこの告白を断ったらこいつらを傷つけることになる

・・・どうしたものか

本音をぶちまけるか

『あのな、実は俺はもう付き合ってる人が二人居る。でもお前らが嫌いつてわけじゃないむしろ好きだ。仲間とかじゃなく一人ひとりの女性として。それに、今まで俺は人を殺してきた。それこそ一人だけじゃない何人もだ。そんな俺で・・・いいのか？』

な「うん！」

フ「もちろんだよ！！」

は「むしろ良太君以外考えられへん！！！！」

な「人を殺めたのだってなにか大切な事情があっただけでしょ？」

フ「それに、人を殺したからって良太が良太であることには変わらないでしょ？」

まさか同じ台詞を言われるとはな

それにしてもこいつら・・・ほんとに甘いな
でも、その甘さが俺は好きだ

な「それどころか私たち」

フ「嫉妬してひどいことしちゃうかもしれないけど」

は「そんな私たちでええの？」

お前らの嫉妬がどんなもんかはこっちに来る前に他のSSとかでよく知ってるっての

つかあんな程度なら防ぎきる自信あるぜ？（一応トリプルブレイカーも込みで）

最終手段も学ばせてもらったからな

『んなこと分かってるっての。それでその、返事のほうは・・・』

「・・・よろしくお願いします／＼」「・・・」

？1「それじゃあ私たちも加えてもらおうかしら？」

？2「ちょっと。アリサちゃん／＼／」

『へ？』

後ろから意外な声が聞こえてきた
後ろを振り向くと何時からいたのかアリサとすずかがいた

『二人とも、何時からそこに？』

ア「そうねえ。なのはたちが告白したあたりかしら」

『ほぼ最初からかよ・・・・・・・・ん？私たちも加えて？あのー
もしかしてそれって』

ア・す「私たちも良太（良太君）のことが好きなの！！／＼／＼」
「

本当に、いつフラグ立てたんでしょう？（知るか！！）

『話を聞いていたなら分かると思うけど俺は「わかってるよ」すず
か？』

す「それをわかってる上で私たちは告白したんだよ」

ア「そうよ」

んなこと言われたら俺も本音を言うしかないじゃねえかよ

『そうか。俺も、お前らのこと、好きだよ。もちろん女性として』

アイ「それでは私にもそれに加えてもらいたいのですか？」

『・・・もしやアインも?』

アイ「・・・はい／＼」

『そうか、よろしくな』

な「それじゃあ改めて」

【宜しく願います】

・・・ここまで言ってしまったて言うのも何なんだが
幸せにできるのか?

いやしてみせるさ

でもとりあえずはあの二人の説得が先か

そうして夜は過ぎていく

翌日

朝日が目に入り起床する

もともと休日は泊り込みの予定だったのでそのままコテージで休ませてもらったのだが

・・・なぜか途中から記憶が無いんだ

何処からかはやてが酒を持ってきてその日に恋人になった人たちと飲んでいた(あんな未成年でしょ!!)ところまでは覚えていたんだ

『・・・まさかこんなベタなことになるなんて。翔子たちにご説明しよう』

向こうが襲ってくれるなら別段かまわないんだがな

・・・うん

瑞希はともかく翔子はやりそうだ

とまあ現実逃避(?)はここまでにしておいて現状を説明しよう

まず裸の俺

同じく裸で俺に抱きつき眠っているのはたち

乱れたシーツ

そして決定的な証拠の赤黒い染み

・・・うんやつちまつたみたいだね
記憶もよみがえってきたし／／／
でも

『こんなに長い間俺のことを思ってくれたなんて・・・』

もう、人を殺している俺なのに・・・

いや今このときだけはそれを忘れよう

そのことを受け入れてくれた人たちに失礼つてもんだ

だが、殺したときの気持ちは忘れない

忘れて、慣れてしまったらそれは、殺人鬼になるのと同じことだ

な「う、うううん」

そんなことを考えてると皆起き始めた

『おはよう』

な「うーん。おはよう良太君・・・にや!?／／／」

フ「どうしたのなの？・・・きゃっ！？／＼／」

は「どうしたん、皆？・・・っ！？／＼／」

とまあこんな反応を全員してくれたよ

そして時間を見る

7時25分

ここから翠屋まで30分ほど

『・・・まずい』

一気に着替える

その間約10秒

『じゃあ俺は翠屋でバイトがあるから行くけど、あいつらにゆっくりと海鳴市の案内をしてやるといいよ』

んじゃ

といい神速を使って翠屋に急ぐ

カランコロン

『おはようございますー！』

さて時間は

7時59分

『はあはあせ、セーフ・・・』

桃「あらあら。遅刻寸前なんて珍しいわね。昨夜はお楽しみだったのかしら？」

『な、何言ってるんですか桃子さん！！／／／／』

まったくもう

というかこれではれたな

そうして、この日もバイトが始まった

そうしてピークも過ぎ休憩

控え室でじっとはきついので店のほうに出てゆっくりする

『あれ？』

いつもの指定席に行くとそこには先客がいた

普通の客なら他の席に移動するところだがそこにいたのは

ス「あ、良太だ！」

『よう、来てたんだな』

な「うん。スバルたちの案内を今、済ましたところだよ／／／」

『おつかれ。あ、皆。空のカートリッジあるか？』

フ「あるけどなんで？」

そっついながらカートリッジを渡してくれる皆

『ちよいとな』

俺はその場で空のカートリッジすべてに魔力をこめる
もちろん結界も張っている

数分後

『うし、終了』

150を超える数を数分で終わらした
管理局の技術部が聞いたら卒倒するだろうなー

『これは限界まで魔力を詰め込んでおいた。これはスバルたちの最終手段として使え。これはフルドライブ並みの負担がかかるから気をつけるよ？んでこっちは俺特製のカートリッジ。俺の今持ちえる技術を総動員して詰め込める魔力を限界まで上げた物だ。こっちはなのは達が最終手段として使え。だがこっちはオーバードライブ並みの負担がかかる。使いどころは間違えるなよ？』

まあロードと共にケアルガがかかるようにしてあるけどな
他にも特典あるけど
それを言ったらこいつら最終手段以外でも使いそうだし

エ「ありがとうございます！！」

テ「あ、ありがとう」

は「でも危ないんじゃない？」

『普通の奴が使ったら危険だな。だけどお前らなら使えるって信じ

てるからこれを託すんだ』

そう、自分の許容以上の魔力はコントロールを誤ると暴走する
だが、それをコントロールできればこれ以上に頼りになる物はない
それをこいつらなら・・・できるそう信じている

な「あのね良太君。ここまでしてもらってこれを頼みたくない
だけど・・・」

そういうなのは足元を見ると何時から置いてあったのか大量の力
ートリッジが

・・・一体いくつあるんだよ

『いつのまに・・・』

な「にやはは。シャーリーにこのことを話したら今機動六課にある
空のカートリッジも頼みたいって」

『はあ・・・まあいいけど』

時間はあるし、暇つぶしにもなる

『割合はどうする？』

な「割合？」

『最終手段用と普通のカートリッジ』

な「それじゃあ・・・3：7でお願い」

『あ、ティードさんとクイントさん用にも作つとかないと』

地上本部襲撃

これの防衛にあの二人も参加するだろう

ヴァイスは・・・普通のカートリッジで限界だろうな

まあ一発だけ特製作つてやるけど

あーでもそのあとのゆりかご戦用に大量に作っておくのもありか
時間もまだたつぷりとあるし

『なのは』

な「なに？」

『管理局技術部に繋いでくれないか？マリエルさんに話しておきたいことがある』

な「いいよ」

おいおい

言い出した俺が言つのもなんだがいいのかよ

マ「はい。時空管理局技術部です」

『お久しぶりですマリエルさん』

マ「あ、良太君？久しぶりね」

『はい。早速で悪いんですけど空のカートリッジ順番に全部こつちに送ってくれませんか？』

マ「あら、カートリッジを作ってくれるのかしら？」

『はい。ついでにエースの最終手段用もいくつか』

マ「じゃあお願いするわ」

そういつて送られてくるはカートリッジの山・山・山

『よーしちゃっちゃと終わらすか』

そういつて速度を上げてカートリッジを作っていく

1時間後

『これでラストつと』

最後の一個を作り終えた

マ「助かるわー。ありがとう良太君」

『いえいえ。最終手段と普通の奴の割合は3：7で作っておきましたんで、最終手段用はオーバードライブ並みの負担がかかることを覚えておいてください』

マ「ええ。分かったわ」

それじゃあといい連絡を切る

それからその日は6時にバイトが終わり自宅に戻る

ガチャ

『ただいま』

「おかえり良太（良太君）」

家に帰ると迎えてくれたのは般若の如く威圧感を出していないながら笑顔の二人だった

『ど、どうした？二人とも』

姫「それじゃあ聞くけど」

翔「・・・良太の体から女の人のにおいがするしかも複数」

ギクウ！！！！

思わず視線をそらして冷や汗が出てくる

『あーその、だな・・・』

えーいここで言い訳してどうする、こいつらにどんなことをされても受け入れるんだろ俺！！

『すいませんでした！！！！』

まずは土下座（そこ！へたれと言っな！！）

『実はですね・・・』

説明中

『とまあこんなことになりました、つきましては』

姫「なんですか？」

うん、怒りをひしひしと感ずるよ

『俺は今、二人にどんなことをされてもかまわない所存であります
！！』

・・・しばしの静寂

翔「・・・本当？」

『はい！！』

姫「顔を上げて」

二人が少し話し合ったと思ったら顔を上げるといわれる
ときどきしながら顔を上げると顔を真っ赤にした二人が視界に入る

翔「・・・それじゃあ／＼／＼／」

姫「私たちを・・・／＼／」

「抱いて！！／／／」

『……いいのか？お前ら、初めてだろ？』

本当に俺なんかで……

姫「それでも！！」

翔「……私たちは良太だから抱いてほしい」

その言葉で俺の頭の理性がプツンと切れる

以後R - 18の為書きません

この小説は健全です！！！（こんなことを言ってる時点で健全ではないことに気づけ）

翌日

今日は平日

ゴールデンウィークまで後2日ほど

そして時刻は朝の6時

「『ふわあ』」

この日の新炎家の住人は同時に起床のご様子
そしてこの部屋の主 良太のベッドは

裸の部屋の主

同じく裸で主に寄り添い眠るその恋人達

乱れたシート

そしてシートについた赤黒い染み

二日連続で同じ状態になった良太である

唯一違うとすれば同時にヤツた数ぐらいである

・・・さておきようか

の前に

『さてと、二人とも寝起きで悪いがきいてくれ』

姫「なに〜？」

欠伸混じりに聞いてくる瑞希

翔子は完全に目が覚めたようだ

『昨日も言ったが俺はさらに6人も恋人を作ってしまった。二人は、こんな俺で・・・本当にいいのか？』

姫「ふふ、本当に」

翔「・・・心配すぎ」

ん？

姫「私たちはそうなることをわかってて良太君の恋人になったんだよ？」

翔「・・・いまさら」

・・・本当に

『本当にお前らは俺にはもったいないくらい最高の恋人だよ』

姫「んう／＼」

翔「ん／＼」

あまりのうれしさに二人にキスをしてしまう
ずっとこうしていたい今日は平日、ずっとそうしているわけには
いかない

『さて、名残惜しいけど起きようか？』

「「うん」」

そうして、朝飯も食べ終わり家を出る

「「『行つてきます』」」

この家に帰ってくるための挨拶
その繋がりが大事だと俺は思う

通学路

姫「そういえば良太君」

『ん？なんだ？』

瑞希が話しかけてくる
少し歩き方がぎこちない

姫「バイトに言ってくるって書置きに書いてあったけどそこで翠屋って言うお店？」

『ああ、そつだよ』

ちなみに昨日の説明ではバイト先の店でなのはに再会したと説明した

翔「・・・良太は今日もバイトに行くの？」

『ああ、そつだけど』

そつして二人は視線を合わせ互いにならずく

「「私たちも今日翠屋にいつていい？」」

わざわざ声を合わせる必要ってあるのか？
まあ気にしないけど

『ああ、いいぞじゃあ、放課後に旧校舎の空き教室で瑞希のほうは西村先生にうまく説明するか』

そして放課後

西村先生にはうまく説明して、二人で抜け出してきた、翔子と合流した

『んじゃ、いくぞ？』

「「うん」

インフィ「セットアップ」

『転移』

喫茶翠屋

『ここが喫茶翠屋。俺が働いてる店だよ』

姫「いいお店」

翔「・・・雰囲気がいい」

桃「ありがとうね」

「「えっ!？」」

二人と話しているといつの間にか後ろに桃子さんがいた

『あ、こんにちわ桃子さん』

桃「こんにちわ、今日もよろしくね良太君」

『はい』

な「あ、良太くん」

ん？

いつもの指定席から声がする

『あれ？なのは、また来てたのか？』

な「うん。ゴールデンウィークが終わるまでは暇だし。それに・・・

」

ああ、そっぴやそっぴやだったな

な「良太君に会えるから／＼／＼」

ブチッ！！

・・・いやな音が

「「良太（君）この人は・・・？」」

恐！！

『ああ、昨日話した新しい恋人の一人』

な「良太君もしかしてこの人たちって・・・」

『ああ、お前の想像とおりの人物だ』

な「あなたたちが姫路瑞希ちゃんに霧島翔子ちゃんだね」

「はい」

な「ちょっと向こうでお話ししない？」

姫「はい・・・」

翔「・・・わかりました」

そっつい、二人を少しはなれたところに連れて行くのは
あ、フェイトたちも合流した
まあ問題ないだろ・・・多分
仲良く話ししてるみたいだし

ブン

『のわあ!?!』

?1「ちっ」

いきなり後ろから奇襲を受けたが間一髪よける
まあこんなことをする人物に心当たりは一人だけいる

『何するんですか、恭也さん!!』

恭「昨日、なのはの歩き方に少し違和感があった・・・」

ギク！！！！！

『・・・何のことでしょう？』

恭「白を切るか。いくら良太でもなのはに手を出すなら話しは別だ」
といいながら戦闘体制に入る恭也さん

『時間がないんで、即効で終わらせてもらいます！』

そっついながら、一瞬で恭也さんの懐にもぐりこむ

恭「な！？」

恭也さんも驚きを隠せないようだが、一瞬で気を引き締め直す、だがその一瞬が命取りだ！！

『奥義 皇破！！』

拳を恭也さんの鳩尾にあて、衝撃波を送る

恭「がは！！」

一瞬で意識を刈り取られた恭也さんを支える

桃「あ、良太君。今日はこれを着てね」

恭也さんを裏に運ぶついでに着替えようとしたところで桃子さんに声をかけられる

『・・・ということは今日はフロアですか？』

桃「ええ♪」

・・・まあいいか

そして俺は裏で桃子さんに渡された服を着てある細工をし、フロアに出る

カラン

『いらっしやいませ♪』

客「あら、あなた飛鳥ちゃん？久しぶりね」

『はい。一時的ですけど復活しました♪それではお席へご案内いたします』

まあ簡単に言うと女装だ

セットアップまでして髪を伸ばしてある

しかし、俺はわからないけど、髪を伸ばして女装をするだけではじめてこの姿を見る人はたいていわからないと言う

・・・そんな感じでゴールデンウィークも最終日

桃「はい、これお給料ね」

『ありがとございますー!!』

うん、これだけあればあのギターも買える

『それじゃあ失礼します』

桃「またよろしくね」

『時間があつたらそうします』

そついいながら、駅前に移る

なのは達には事前に別れを告げてある

・・・最終決戦には絶対に連絡するように言っていたけどな

駅前

この前の楽器屋で待ち合わせとのことなので急いでゆく

楽器屋

律「あ、良太」

『すまん、お待たせ』

もう楽器屋に来ていた4人

『んじゃ、買うか』

といいながら、この前の店員のところに行く

『こんにちわ、あのギターお願いします』

店「あのギターだね。ちょっとまってて」

俺の顔を覚えていたようで、すぐにギターを取りに行ってくれた

店「おまたせ、25万円ね」

『はい』

給料の四分の三を払い、唯も5万を出す

店「はい、ちょうど確かに。ありがとございました」

こうしてようやく、結のギターが買えたのだった

第二章 一話〱文化祭準備〱（前書き）

はい、今回からバカテストを入れさせてもらいました
まあ特にオリジナルは無いです

第二章 一話ゝ文化祭準備ゝ

翔「……良太、如月ハイランドって知ってる？」

『ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープンらしいな』

翔「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

『廃病院を改造したって言うあれか？面白そうだな』

姫「日本一の観覧車とか」

『相当でかいみたいだな。聞いた話だけでもすごそうだ』

翔「……世界で三番目に早いジェットコースターも」

『早い上にいろいろな方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってやつか。どんなものか分かんが、考えるだけでわくわくしてくるな』

姫「他にも、面白いものが沢山あるよ」

『それはすごいな。楽しそうだ』

「それで今度そこが、オープンしたら私と」

『ああ、お前らの言いたいことは良く分かった。でも、オープン直後は込み合っているから遠慮したいんだが・・・』

翔「・・・それなら、プレオープンチケットがあつたら行ってくれる?」

『それは別にかまわないが・・・あれは相当入手困難らしいぞ?』

姫「行ってくれる?」

『ああ』

清涼祭アンケート

第一問

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください

「あなたが今欲しいものは何ですか?」

新炎良太の答え

「最高に楽しい事」

教師のコメント

君はたしか去年の文化祭でバンドの助っ人をやっていたね
あのときの演奏はすばしかったです
今年も演奏、期待してます

姫路瑞希の答え

「恋人とクラスメイトとの思い出」

教師のコメント

なるほど

お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもし
れませんね

写真館とかも候補になりえると覚えておきます

それにしても姫路さんに恋人が出来ていたことに驚きです

霧島翔子の答え

「如月ハイランドのプレオープンチケット」

教師のコメント

一応学園祭のアンケートなんですが・・・

確か召喚大会の副商品にプレオープンチケットがあったと思いま
すが

霧島さんは召喚大会に出るんですか？

土屋康太の答え

「Hな・・・成人向けの写真集」

教師のコメント

言い直しの意味があるのでしょっうか

吉井明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節

俺たちの通う文月学園では、新学期最初の行事である清涼祭の準備が始まりつつあった

お化け屋敷のために教室の改造を始めるクラス

焼きそばのために調理道具を手配するクラス

この学校ならではの試験召喚システムについて展示を行うクラス
学園祭準備のためのLHRの時間はどの教室を見ても活気があふれている

そして俺たちFクラスはというと・・・

須「吉井、こい！」

明「勝負だ、須川君！」

須「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

『・・・・・・なーにやってんだか』

代表たちが準備もせずに、校庭で野球をして遊んでいた

『あ、唯たちに文化祭のこと話さないと・・・・』

そう呟き、携帯を取り出しメールする

「文化祭のことなんだが、今のところのレベルを考えると今回は俺と俺の知り合いで演奏して、10月にある文化祭で軽音部全員でバンドをやろうと思ってるんだが、どうだ？」

『送信つと』

それから数分後

メールが戻ってくるまで暇なので、明久たちを観察していたところ、西村先生が出てきて逃走劇が開始された

『あ、捕まった』

西村先生が明久たち三人を捕まえて教室に連行しようとしている姿が見える

と、メールを知らせる着信音が鳴る

『お、返ってきたか』

どうやら全員同じ場所にいたらしく、律がメールを返してきた

「いいね、それ！でも大丈夫なの？」

まあ確かに心配だろうな

だが、俺には魔法という最強の反則技と次元世界を渡ってきたコネがあるのだよ！！

「モーマnty。レベルは充分だから心配すんな。お前らは当日楽しむのと10月に向けて練習することを考えておけ」

再び送信する

もちろん仲間には既に連絡済だ
そして気づくといつの間にか雄二が戻ってきており、どうやら議事進行件実行委員を決めているようだ

姫「良太君、坂本くーけホケホ」

『大丈夫か？瑞希』

話し合いの邪魔にならないように小声で瑞希が話しかけてきたが、
口に手を当て咳をし始めた
顔も少し赤いし、風邪か？

『つらいようだったら早退するか？』

姫「だ、大丈夫・・・」

少し苦しかったようで若干なみだ目になっている

腐った畳からさらにリンクを落とされた今、この教室内には痛んだござとみかん箱しかない

机と椅子に比べて格段に疲れるし、不衛生だ
体の弱い瑞希にはつらいだろう

衛生的な環境

体に負担をかけない設備

この二つを用意しないとそのうち瑞希が倒れる気がする

・・・学園長との交渉を確実に成功させた上で利益も確実に出さないとな

まあ最終手段は俺が金を出すことだけだな

雄「んじゃ、学園祭実行委員は良太ということでもいいか？」

不意に飛び込んできた声に今の状況を思い出す
というか

『俺はかまわないがずっとやるつてのは無理だぞ？俺は学園祭でバンドやるし・・・』

雄「だつたら副実行委員を決めればいい」

『んじゃあ・・・美波、明久頼む』

ここは原作どおりの展開を期待する

明「まって、良太。副実行委員なら僕や美波より姫路さんの方がいいんじゃない？」

ん、たしかにそうだが・・・

『瑞希だと少数意見を切り捨てられずタイムアップになりそうだからな』

それに・・・と続ける

『瑞希は美波と組んで召喚大会に出るんだ』

明「え、そうなの姫路さん？」

『どうやら親にFクラスをバカにされたらしい』

姫「そうなんです」

と、話は原作どおりに進んでいく

『さて、じゃあ明久は書記、美波は俺の補佐を頼む』

明「了解」

美「わかったわ」

そして、話し合いは始まる

『さて、まず意見があるやつはいるか?』

と聞くといくつか手が挙がる

とりあえずやる気があるやつはいるみたいだな

『んじゃあまずは・・・康太』

名前を呼ばれると康太は立ち上がり

康「・・・写真館」

・・・康太が言う写真館って盗撮写真じゃないよな?

美「・・・土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

まあ確かにな

『明久一応意見だから書いてくれ』

明「あ、うん・・・」

そうして明久が黒板に板書する

候補一

写真館「秘密の覗き部屋」

『次は・・・横溝』

横「メイド喫茶ーといたいのが、流石に使い古されてると思うからウェディング喫茶を提案する」

『ウェイトレスがウェディングドレスを着て接客するのか？』

横「そうだ」

F1「だが、男は嫌がらないか？人生の墓場、とか言うくらいだしな」

『まあ一番の問題は女子が少ないところだな』

この意見に教室が少しざわつく

『ほれ、明久書け』

明「あ、うん」

再び明久が黒板に意見を書く

候補2

ウェディング喫茶「人生の墓場」

・・・・・・・・印象にのこった単語だけを並べてるのが良く分かるな

『えつと最後は・・・須川』

須「俺は、中華喫茶を希望する」

『まさか、チャイナドレスを着せるっただけじゃないよな？』

須「まさか。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってわけじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉からも分かるように、こと食えるという文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは――」

ふむ

須川の豆知識は大変参考になった

知識に関しては一般人に近い俺でも何とか理解できる内容だ

『明久、須川の意見も書いてくれ』

明「あ、うん」

と返事はするが手は動かない

美「どうしたの？早く書いてよ」

明「りよ、了解」

美波にせかされ、明久の手が動く

候補3

中華喫茶「ヨーロッパ」

・・・やはり頭に残ってる単語だけが並んでるな

と、明久が書き終えたところで扉が開き西村先生が現れた

鉄「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

『今のところ、候補は黒板の三つです』

俺が言つと西村先生は黒板に書いてある候補へ目を向ける

さて、ここで候補を確認してみよう

候補1

写真館「秘密の覗き部屋」

候補2

ウェディング喫茶「人生の墓場」

候補3

中華喫茶「ヨーロッパ」

鉄「…………補修の時間を倍にしたほうがいいかも知れんな」

まあこういわれても仕方ないよな主に最初の二つのせいで

時間が倍と言われてみんなが必死に抗弁する

鉄「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！！」

西村先生の一括で背筋が伸びるFクラス一同

鉄「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だとい
ってるんだ！！」

まあ、否定は出来んな
選んだの俺だけど

鉄「まったくお前らは……。少しはまじめにやったらどうだ。
稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ち
すらないのか？」

西村先生の言葉で一気にやる気を出し、意見が飛び交うFクラス
しかし、意見がばらけて来た

・・・・・・・・ブチッ！！

【ブチッ？】

騒がしい教室の中に何かが切れる音が響き渡る

ドゴン！

『お前ら静かにしろ！！！！！！』

俺が黒板をたたきながら一括すると静かになった

『このままだといつまでも決まらないから最初の三つから決めるぞ。異論は？』

最後の部分の声を低くして、聞く

『よし。それじゃあ写真館の人。次ウエディング喫茶。最後中華喫茶』

静かな教室の中で、あげられた手を数える

「それじゃあ中華喫茶に決まったから……」

ここで一旦言葉を切り、腹に息をため、一気に言葉とともに吐き出す

『設備をあげたかったら死ぬ気で準備と営業をしろよ teme 工ら!!!!!!!!!!』

【oooooooooooo！！！！！！！！！！】

試召戦争並の士氣に一氣に上がる

須「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

須川が立ち上がり、そう言い出す

「わかった。康太、お前も須川といっしょに頼めるか？」

康「……………」
（コク）

康太もうなづいてくれる

明「あれ？ムツツリー二つて料理できたの？」

康「……紳士の嗜み」

まあ真相はチャイナドレス目当てに中華料理店に通って覚えたっ

てところだけどな

『それじゃあ厨房班とフロア班に分かれてもらうぞ。厨房は康太と須川の所、フロアは俺のところに来い』

姫「それじゃあ私は厨房に・・・」

『瑞希、お前はフロアを頼む。お前の美貌なら店は大繁盛だ』

姫「う、うん／＼。良太君がそういうならフロアでもがんばるね」

料理の腕が上がってきてるとはいえ、まだ殺人兵器の域を出てないからフロアのみにして欲しいんだが・・・

美「リヨウ、ウチは厨房にしようかな？」

『いや、美波は両方頼む。あと秀吉も』

美「う、うん。わかった」

秀「なんでわしもなんじゃ？」

『本当なら優子がいいんだが、あいつはAクラスだからな。まあ客は見た目でしか判断しないし』

秀「気持ちが複雑じゃ・・・」

そんな感じで俺たちFクラスの人並みの学校生活がかかった学園祭が始まるうとしていた

第二章 二話〜最低コンビ結成〜

バカテスト 地理

「バルト三国と呼ばれる国名をすべて挙げなさい」

新炎良太 姫路瑞希の答え

「リトアニア エストニア ラトビア」

教師のコメント

そのとおりです

土屋康太の答え

「アジア ヨーロッパ 浦安」

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え

「香川 徳島 愛媛 高知」

教師のコメント

正解不正解の前に、数があつてないことに違和感を覚えましょう

『よお雄二』

明「やあ雄二偶然だね」

雄「翔子が追いかけてきたのはお前の差し金が良太」

今俺たちは女子更衣室にいる

なぜこんなところにいるかというと

俺が翔子にある賭けをし、雄二を追いかけさせたからだ

翔子は女子禁制のところなどまったく気にせず入ってくるから

逆に男子禁制のところに逃げ込むと言う俺の読みは見事に当たっ

たわけだ

何故か明久までいるが

『何のことやら』

雄「白を切るな！それ以前にどうしてここがわか」

ガチャ

音を立てドアが開いた

その向こうには体操服を来た優子がいた

優「えーつと・・・あれ？良太にFクラスの問題児コンビ？こっ、女子更衣室だよね？」

『よお優子奇遇だな』

と挨拶しながらも思考は脱出に切り替わっている

優「先生！覗きです！変態です！あ、良太は違うよ／＼／」

『逃げるぞ二人とも！！』

制服に隠していた変装セットを身につけ更衣室の窓からそとに出る

鉄「吉井と坂本だと！？またあいつらか！！！」

『まずいな、西村先生だ』

雄「とにかく走れ！」

上履きだがかまわず外を走る

相手は西村先生だ

今の状態ならともかく、捕まったら確実にばれる

鉄「見つけたぞ！二人とも逃がすか！ん？そこの不審者もとまれ

「!!」

不審者はおれだろうな」

「二人とも!」

二人に声をかけながら俺の視線は前方の新校舎の二階の開いている窓

雄「あいよ!」

明「オーケー」

明久が走りながら上着を脱ぐ

そして俺が先行し、次に雄二が続く

鉄「そっちは行き止まりだ! 観念して指導を受けろ!!」

「お先!!」

そう言いながら、俺は窓に跳躍する

「つと」

うまく校舎に逃げ込んだ俺に続き、明久、雄二が入ってきた

鉄「吉井に坂本に不審者! 明日は逃がさんぞ!!」

流石の西村先生も独力で二階までは、これないようで悔しそうな
声が聞こえる

明「はあ、また知らない悪評が増えていく・・・」

雄「俺こそ言い迷惑だ。お前が来なければこんなことにはならなかったのに」

『でも、俺たちがいなかったら雄二だけが覗き犯扱いだったんじゃないか？』

雄「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを想像したのか無言になる雄二

明「そういえば何で雄二は霧島さんに追いかけてたの？」

『ああ、それは俺が翔子と賭けをしたからだ』

明「賭け？」

『雄二が学校から出るまでに捕まえたら、何でも言うことを一つ聞くってな』

雄「なるほど、翔子がやけに早いと思ったらそういつことが」

そこまでか

明「さて、雄二。そんな君に朗報です！！」

雄「そうか、嫌な報せだったら殺すぞ？」

明「・・・・・・・・」

かなり本気の雄二の言葉に明久は一瞬言葉を失う

明「こ、こちらの携帯電話をどうぞ」

携帯電話を取り出し、どこかへ電話をかけて雄二に渡す明久

雄「まったく、何のまねだ？」

雄二はいぶかしみながら受け取る

雄「島田か。いったい何のまねだ？」

どうやら美波にかけたようだ

しかし、会話が聞き取れないので少し近づく

雄「替わる？誰とーおい。もしもし？」

どうやら、向こうで誰かと替わったようだ

翔？「・・・雄二。今どこ」

雄「人違いです」

ブツ

俺もびつくりの判断力だ

とっさに人違いですなんて切り返せる人はなかなかいない
だが、さっきの声に違和感を感じた俺は翔子に電話をかける

雄「クロス」

後ろでは雄二が明久を制裁しようとしている

翔「・・・どうしたの？良太」

『いきなりで悪いんだけど今どこにいる？』

翔「・・・1階の男子トイレ」

・・・

『美波や瑞希は近くにいますか？』

翔「・・・いない。どうかしたの？」

『いや、なんでもない。ありがとうな翔子』

翔「・・・賭け。忘れないでね」

そういい残し翔子は電話を切る
となると・・・

明「それじゃあ。教えてあげよう。実は電話の向こうにいたのは、霧島さんの声まねをした秀吉で」「目をつぶって歯を食いしばれ！」

「

思わず雄二と一緒に脅してしまった

雄「そうか、姫路の転校か・・・」

場所は変わりFクラス

あの後美波と秀吉と合流しFクラスにいる

それにしても、瑞希の転校か・・・

俺がいるからってそう簡単にはなくならないか
もしかしたら俺も一緒に転校させられたりして・・・
ありえる、瑞希の両親なら
でも・・・

『そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな』

雄二が教室を見回している間に俺が告げる

明「不十分？どうして？」

『瑞希の父親が転校を進めた要因は恐らく三つ』

そついい、俺は明久たちに指を三本立てる

『まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではないという面だ。これは喫茶店の利益で何とかなる』

そう言いながら指を一本引つ込める

『二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害があるという面だ』

明「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

『そうだ。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい。教室自体の改善となると学校側の協力が不可欠だ。俺達の独断じゃまずい』

机や椅子ならお金をだして買っただけなので俺達でも出来るが、教室自体の改善となると業者の出入りや手続きが必要になる

俺が言いたいのはそういうことだ

『そして最後の三つ目。レベルが低いクラスメイト。つまりは瑞希の成長を促すことの出来ない学習環境という面だ』

ここは俺でもいいかも知れないが、瑞希の両親は俺の知力を知らない

それに知ってたとしてもレベルが近い相手が条件となるので俺は除外される

明「参ったね。ずいぶん問題だらけだ」

『そうだな。試召戦争なら一気に問題が片付くが、今は敗者三ヶ月期間（命名俺）が残ってるからな』

だが・・・

と俺は続ける

『三つ目は既に瑞希と美波で対策を練っているようだから心配はない』

俺は美波に視線を送る

瑞希は家でFクラスをバカにされたことに怒っていた
確かに召喚大会でFクラスのメンバーと組んで優勝すれば問題ないだろう

俺に相談しなかったのは俺が文化祭で演奏すると言っていたのを
思い出し、俺に負担をかけたくなかったのだろう

自分で言うつもりで自意識過剰に感じるな・・・

美「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。どうしても転校したくないから協力してくださって。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

いつもと違う優しい表情の美波に一瞬目を奪われた

まるで面倒見のいいお姉さんだ

妹が弟がいるのだろうか？

・・・ああ、そういえばいたな

確か葉月だったかな？

元気かな？

(短編はそのうち出したいと思います)

雄「翔子が参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路

と島田の優勝は十分にありえるだろう」

明「そうだね。二人ならきつと何とかなるよ」

確かに翔子は召喚大会自体には無関心だろうな
もしも出てくるようならパートナーは俺かAクラスの人になるだろう

それだと瑞希達は厳しい勝負になる

『本当なら瑞希抜きで優勝するのが理想的なんだけどな』

明「それは言いつこなしだよ」

他のメンバーだと明久と雄二のコンビか俺と組む以外は一回戦すら突破出来るかどうかだろう

・・・だってバカだから

秀「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるじゃろうし、一石二鳥じゃな」

秀吉がうんうんとうなづく

俺達の教室は古くて汚い旧校舎にあるから、この宣伝の効果は小さくはない

美「で、坂本とリヨウ。それはそうと、二つ目の問題はどつするの？」

雄「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

雄二がさも当然と言わんばかりの態度で言う

明「それだけ？ 僕らが学園長に言っただけで何とかしてくれるかな？」

雄「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とはいえ、生徒の健康に害を及ぼす状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

確かにそれで何とかなるなら、三つの問題はすべて解決する見込があるということだ

あの学園長が簡単にそれを許してくれるか？

明「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

明久がそう言う

雄「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見かけたら俺達は帰ったといっておいてくれ」

立ち上がり指示を出す雄二

こういうことが自然に出来るのはやはり才能があるからだろう

秀「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子も見かけたらそう伝えておこう」

と、秀吉が微笑む

翔子の名前を出されてほつとした様子の雄二

美「リヨウ、吉井。しっかりやってきなさいよ」

『おう、任せとけ』

明「オッケー。任せといてよ」

美波の声援を受け、俺達は学園長室を目指し、教室を後にする

？1「・・・商品の・・・として隠し・・・」

？2「・・・こそ・・・勝手に・・・如月ハイランドに・・・」

新校舎の一角にある学園長室の前までくると、扉の向こうから誰かが言い争ってる声が聞こえてくる

商品？如月ハイランド？

何だっけか？頭の隅に引っかかってはいるんだが

雄「どうした、明久、良太」

『いや、中で何か話しているようなんだが』

雄「そうか。つまり中には学園長がいるというわけなんだな。無駄足にならなくて何よりだ。さつさと中に入るぞ」

取り込み中かどうかは向こうが判断するってわけか

もつともだが、そんなことだから後々ひどいことを言われるんだよ

明「失礼しまーす！」

『お話中のところすみません。失礼します』

学園長室の立派なドアを明久がノックし、明久と雄二はずんずん
と入っていく

？1「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

その室内で俺達を迎えたのは、長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園
長だ

試験召喚システム開発の中心人物でもある

研究をしていた人間だからか、ずいぶん規格外なところが多い人だ
第一声でガキども、と言ってるし

？2「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。
これでは話を続けることも出来ません。・・・まさか、貴方の差し
金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園町を睨み付けてるのは教頭の竹原先生だ

鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒には人気が高い
俺個人としては、好きになれない先生だ

カ「バカを言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコ
い手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもない
のに」

竹「それはどうか。学園長は隠し事が得意のようですから」

いまいち話がつかめない

この二人が話すことといったら学園関係の話だろう

それなら俺達の前では話すことは出来ないだろう

普通なら出直すところだろう

カ「さつきから言ってるように隠し事なんて無いね。アンタの見
当違いだよ」

竹「・・・そうですか。そこまで否定されるならこの場はそつい
うことにしておきましょう」

そう告げると、竹原先生は部屋の隅に一瞬視線を送り

竹「それでは、この場は失礼させていただきます」

踵を返し、学園長室を出て行った

さつき何かを確認していたようだが、何かを隠しているのか？

カ「んで、ガキども。あんたらは何の用だい？」

と竹原先生との会話を中断されたことを気にする様子も無く

俺達に話を振る学園長

雄「今日は学園長にお話があつてきました」

学園長の前に立ち、雄二が話を切り出す

そつえばこいつの敬語聞くのは初めてだな

力「私は今そころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原にいいな。それとまずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてもんだ。覚えておきな」

もつともである

雄「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。それでこつちが――」

雄二が明久を指す

雄「――二年を代表するバカです」

間違つてないけど結構ひどいよな・・・

雄「そしてこつちが――」

次に雄二は俺を指す

雄「――先日の試召戦争で大暴れした男です」

・・・否定が出来ねえー

カ「ほう……。そうかい。あんた達がFクラスの坂本と吉井と新炎かい」

明「ちよつとまつて学園長！僕はまだ名前を言つてませんよね！？」

カ「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

明久のツツコミをシカトし、悪役のように口の端を吊り上げる学園長

雄「ありがとうございます」

カ「礼なんかいう暇があったらさっさとはなしな、ウスノロ」

雄「わかりました」

それにしても驚きだ

こんなにも口汚く罵倒されているのに、雄二の態度や言動は落ち着いたままだ

コイツが意外に大人だったことにも驚いた

雄「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

カ「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

雄「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのような穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるようなひどい状態です」

あ、言動が綻び始めた

雄「学園長のように戦国時代から生きている老いばれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思います」

一見丁寧に見える言葉の中に危険な言葉がちりばめられている
これは相当来てるなあ

雄「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というわけです」

結局、いつもの雄二に戻っている
そんな無礼な雄二の説明を受け、学園長は思案顔になる

明「あの、学園長・・・？」

普通なら腹を立てるだろうが、それならば思案顔になったりはしないだろう

カ「・・・ふむ、ちょうどいいタイミングだね・・・」

小声で学園長がそう呟く

カ「よしよし。お前達の言いたいことはよく分かった」

明「え？それじゃあ直してもらえますね！」

ありえない

いくら教育機関の義務といえど、あの学園長が簡単に許可するわけが無い

カ「却下だね」

ほらやっぱり

明「雄二、このババアをコンクリにつめて捨ててこよう」

雄「明久、もう少し態度には気を使え」

『お前もだよ雄二』

雄「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

明「そうですね。教えてください、ババア」

カ「『・・・お前達、本当に聞かせてもらいたいと思っているのか（いるのか）？』」

思わず学園長とはもってしまっ
顔は呆れ顔だ

カ「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。がたがた抜かすんじゃないよなまっちょろいガキども」

明「それは困ります！そうになると、僕らはともかく体の弱い子が倒れて」

カ「と、いつもなら言ってるんだけどね」

明久の言葉をさえぎり、学園長があごに手を当てて続きを話し始める

カ「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら相談に乗ってやろうじゃないか」

交換条件・・・

ただで話を聞いてくれるほどこの人は甘くないか
まあ何を考えてるかは頼みの内容で想像がつくだろう

『その条件は何ですか？』

思考をし始めた、雄二の変わりに聞く

カ「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

『はい』

カ「じゃあその優勝商品をしってるかい？」

『優勝商品？・・・』

えーっとたしか・・・

副で白金の腕輪と何かあったはずだけど

カ「学校から送られる正賞には、賞状とトロフィーと白金の腕輪、副賞には如月ハイランド プレオーブンプレミアムペアチケットが用意してあるのさ」

ペアチケットと聞いて、思わずぴくりと反応してしまう

『もしかして白金の腕輪が副賞に何か問題でもあるんですか？』

カ「ほう、なかなか鋭いじゃないか。実は副賞のペアチケットによからぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

『なるほど、既に向こうとの契約は完了してるから賞品にしないってことは不可能ってことですか』

カ「そのとおりさ。これは教頭が進めた話とはいえ、文月学園として、如月グループで行った正式な契約だ。いまさら覆すわけには行かないんだよ」

なるほど

前に噂であつた

学園長は召喚システムの開発に手一杯、経営に関しては教頭に一任している

というのは本当のようだ

『いくら開発に手一杯でも、契約することには目を通してくださいよ……』

カ「うるさいねえ。悪い噂を聞いたのはつい最近なんだよ」

学園長は眉をしかめる

口調とは裏腹に、若干責任を感じているようだ

『それで、悪い噂ってなんですか？』

つまらない内容なんだけどね

と前置きして学園長が口を開いた

カ「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkスを作ろうとしているのさ。ここを訪れたカップルは幸せになれるって言うジnkスをね」

・・・もしかして

『そのジnkスを作るために、プレミアムチケットを使ってやってきたカップルを多少強引な手を使ってでも、結婚させようってことですか？』

カ「そついうことさ」

なるほど、だけど俺の場合はどうするつもりなんだろう？
多少のコネはあるから、いざというときは何とかなるだろう

『そのカップル候補が、文月学園ってことか・・・』

確かに・・・

『ウチの学校は何故か美人ぞろいだし、試験召喚システムという話題性もたつぷりある学生から、結婚まで行けばジnkスとしては申し分ない、如月グループが目をつけるのも当然か』

カ「ふむ、流石は試召戦争で暴れただけのことはあるね。頭の回転はなかなかじゃないか」

『ども』

流石に暴れすぎたのか、学園長も俺のことを知ってるようだ

カ「ま、そんなわけで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

・・・この人が本当に生徒を可愛いと思っているのかは疑問だ

『賞品と交換つてのが条件ですか。譲ってもらうか、強奪も無しですよね？』

もし、それがあリだったらまず俺達に依頼をしないはずだ

カ「その通りさ。私はお前達に召喚大会で優勝しろって言うてるんだからね」

ただし・・・
と学園長は続ける

カ「新災の参加は認めないよ」

まあだろうな

明「なんですか！？」

明久が騒いでいるが・・・

『・・・俺達が優勝したら、教室の改修と文化祭での利益を使った設備の向上を約束してくれますか？』

カ「まあ設備に関しては清涼祭で得た利益を使つなら、特別に目を瞑つてやろうじゃないか」

雄「『分かりました。この話引き受けます』」

カ「そうかい。それなら交渉成立だね」

学園長は計画通りと言つた笑みを浮かべる

『ただしこちらからも提案があります』

カ「何だい？言つてみな」

『大会は、二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦は数学、二回戦は科学といった具合で進めていくと聞いています』

一回戦の科目が数学と決まれば一回戦に参加する全員が数学で戦う
二回戦で別の科目になるのは、一回戦で消耗した点数で戦うと試合での派手さがかかるためだろう
学校の宣伝行事だし

カ「それがどうかしたのかい？」

『対戦表が決まったら、科目の指定を雄二にやらせてもらえないでしょうか？』

そう告げる俺と雄二は学園長の反応を試すかのような目つきをしているだろう

カ「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴し

ていたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

『・・・ありがとうございます』

これで、確定だな

カ「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」

学園長が念を押してくる

やはりあの問題はそこまで重要なんだろう

『無論です。この二人を何だと思ってるんです？』

雄二に視線を送ると試召戦争の時と同じ不適な笑みを浮かべている

明「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

明久もやる気は全快のようだ

カ「それじゃあ坊主ども。まかせたよ」

「「おうよー!!」「」

こうして、文月学園最低コンビが結成された

明「それじゃあ失礼します！」

『あ、先に行つてくれ。俺は少し、学園長と話がある』

カ「ちょうどよかった私もあるんだよ」

その言葉に二人は不思議な顔をしながら学園長室を出て行く念を入れこつそりと防音結界を張る

『まず一つ確認したいことがあります』

カ「なんさね？」

『今回の頼み・・・本当に回収したいのは白金の腕輪ですね？』

カ「いったい何の根拠があるんだい？」

学園長は即答しながらも怪しむ視線を送ってくる

『まず、白金の腕輪はまだ未完成で、一定の点数を超えると暴走するようにできていますね？』

カ「ほう・・・。その情報はいつたいてどこで知つたんだい？」

『企業秘密です』

そついいながら俺は話を続ける

『それで、その未完成の状態を完成にもっていくことを俺は出来ません』

そして・・・

と俺は続ける

『このリストバンドの下には自作の白金の腕輪があります。もちろん暴走は一切しません』

その言葉に目を見開く学園長

力「なるほど、妙に召喚獣の扱いがうまいと思ったら・・・」

小声でそう呟く学園長

力「・・・何が条件さね」

よく分かってらっしゃる

『話が早くて助かります。まず一つ目は俺を召喚大会に出すこと。

まあ俺は一人でかまいません

二つ目は自分は文化祭でバンドをやるつもりなのですが、そのときのメンバーを学校の外から

連れて来る事を許可してほしいんです

これ、バンドの許可願いです

三つ目俺が優勝しても、明久達と同じ条件をお願いします

四つ目、俺を明久達とは決勝で当てるようにしてください

そして五つ目、試召戦争での力については一切詮索しないでください』

学園長はしばらく思案顔になる

力「完成に持っていくのに時間はいるのかい？」

『いえ、おそらく学園長が手間取ってるのはこの部分だと思います』

俺は独自に作った設計図とプログラミング表を出しながら聞く

カ「確かにそこだが・・・」

『ここだけならその場で、完成に持っていくことができます。なので、デモンストレーション

を開始するのに時間はとりません』

カ「ふむ・・・。それならいいさねその条件飲もうじゃないか」

『ありがとうございます』

こうして、俺の召喚大会への参加も決まった

第二章 三話〜清涼祭開催！召喚大会一回戦！〜

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい

「喫茶店を経営する場合、制服はどんなものがいいですか？」

新炎良太の答え

「多少コストを抱えるなら制服を自作する
コストを抱えたくないなら個人個人で制服又はエプロンを持って
くるといいと思います」

教師のコメント

いい答えだと思います
コストを気にする場合と気にしない場合の方法があるのはいいこ
とです

姫路瑞希の答え

「家庭用の可愛いエプロン」

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね
コストもかからないですし、いい考えです

土屋康太の答え

「スカート丈は膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干強調しながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいの物を用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを――」

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

「ブラジャー」

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています

「おはよう 起きているかな？

今日の十時ぐらいに迎えに行くから準備しとけよ？

集合場所は・・・・・・・・だからな

もしも遅刻したら・・・・・・・・フフ」

あ、一応友達を連れてきてもいいぞ

良太」

清涼祭初日の朝

俺達の教室はいつもの小汚い様子を一新し、中華風の喫茶店に姿を変えていた

『まあ、これならテーブルクロスを捲くんじゃない限りは大丈夫かな？』

教室に設置されているテーブル

実は俺たちが最近使っているみかん箱をうまく重ねて、綺麗なクロスをかけている

見た目は綺麗なテーブルの完成だ

このクロスは俺と秀吉が持ってきたもので、秀吉は演劇部の物を持ってきたかもしれないが、俺は自分で作ったものだ

それにしても

『営業妨害が目的で来たやつがいたらすぐにやられそうだな』

文化祭程度でそんなことをするやつはいないだろうが、可能性が無いと言い切れるわけではない

明「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね、良太？」

後ろから声が聞こえたので振り向くと明久達が集まっていた

『ああ、学園祭のレベルとしては充分すぎるほどの完成度だ。営業妨害でもない限りは心配ないだろう』

康「・・・飲茶も完璧」

明「おわっ」

いきなり康太が明久達の後ろに現れ、声をかける

しかし、常日頃から気配を消さなくてもいいんじゃないか？

『そっちはどうだ？』

康「・・・味見用」

そうやって康太が差し出したのは木のお盆

上には陶器のティーセットと胡麻団子が乗っている

姫「わぁ……。美味しそう……」

美「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

康「……（コクリ）」

秀「では、遠慮なくいただこうかの」

瑞希、美波、秀吉の三人が手を伸ばし、作り立てで温かい胡麻団子を頼張る

姫「お、美味しいです！」

美「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし！」

秀「甘すぎないところもいいのう」

と絶賛

秀吉と瑞希は知ってたが美波も甘いものが好きなようだ

姫「お茶も美味しいです。幸せ……」

美「本当ね……」

瑞希と美波の目がトロロンと垂れる
別世界へのトリップ状態だ
もしかして俺が作ったやつか？

明「それじゃ、僕ももらおうかな」

『あ、俺も』

康「・・・（コクコク）」

康太が残った二つを俺達に差し出す

楊枝が無かったから手でつまみ明久は一口かじり、俺は一気に口に放り込んだ

「『ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎずの味わいがとっても————んゴパっ』」

俺達の口からありえない音が出た

この不思議な味わいは・・・瑞希作か

俺は普段から食べなれている（料理の試食）から何とか意識を保っているが

明久は走馬灯を見ているだろう

というか普段から食いなれてもこれはきつい・・・

秀「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな」

康「・・・！！（グイグイ!）」

明「む、ムツツリーニ！どうしてそんな脅えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」

康太は団子の残り半分を明久の口に押し付ける

あの胡麻団子は一般人なら走馬灯を見る暇も無く終わるだろう・・・

雄「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに雄二（生贄）が帰ってきた

明「あ、雄二。お帰り」

雄「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

そして俺が誘導する必要も無く、明久の食べかけバイオ兵器（決して誤字じゃない）を口に運ぶ

秀「・・・たいした男じゃ」

明「雄二。君は今、最高に輝いているよ」

『俺が誘導しなくても自爆してくれるとは・・・』

雄「？お前らが何を言ってるのか分からんが・・・。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎずの味わいがとってもーーーーーーんゴパっ」

あ、デジャブ

明「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

明久が床にひれ伏した雄二に目で何か合図を送っている
雄二は床に突っ伏してるから伝わってるか分からんが

雄「ふっ。何の問題も無い」

床に突っ伏したままで雄二は言った

雄「あの川を渡ればいいんだろう？」

それは三途の川！？

『雄二！そこは渡るな！渡ったら戻れなくなるぞ！』

まさか半分で致命傷になるなんて

やはり瑞希の料理のキレ味は抜群だ

姫「え？あれ？坂本君はどうかしたんですか？」

夢心地になっていた瑞希がこつちの様子に気がつく
見られてたらまずかったろう

美「あ、ほんとだ。坂本、大丈夫？」

美波も今までトリップしていたようだ
やっぱり俺が作ったやつを食べたのか？
だとしたら今日の調子もよさそうだ

明「大丈夫だよ、ちょっと足がつっただけみたいだから」

『おい、ゆーじ。おきろー』

明久が誤魔化してるうちにおどけた口調で雄二を起こす
ただし、手は必死に心臓マッサージをしている
こうなると五分五分か・・・！

ザオリクを使わないとやばいかも・・・

雄「六万だと？バカ言え。普通渡し賃は六文と相場が決まってるはっ！？」

蘇生成功

こうして、人知れず一つの命が救われた

明「雄二、足が攣ったんだよね？」

明久がすかさず畳み掛ける

雄「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の『もう一つ食いたいか？』足が攣ったんだ運動不足だからな」

雄二が物分りのいいやつでよかった

流石の俺でも親友を殺すのは忍びない

雄「良太、明久・・・お前等をいつかクロス」

『上等・・・カウンターで沈めてやるよ』

明「上等だ・・・殺られる前に殺ってやる」

笑顔を貼り付けて小声のやりとり

こんな俺らは親友さ♪

美「ふーん。坂本って足を攣りやすいのね」

何故か美波が怪しむ

明「ほら、雄二つて余計な脂肪がついてないでしょう？そういうからだって、筋が攣りやすいんだよ。島田さんも胸がよく攣るからわかるとぐべあっ！」

雄「・・・俺が手を下すまでも無かったな」

美波の拳を受けた明久に雄二が哀れみの視線を送っている

秀「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

秀吉が話題をそらした

雄「ああ、ちょっと話し合いにな」

雄二にしては珍しい歯切れの悪い返事

実は学園長室に行つて例の試験科目の指定をしてきたところだ

でもフェアなことじゃないから、正直に話さず、雄二は適当に誤魔化した

ついでに言うつと雄二達には参加するとだけ伝えていて、条件云々は話していない

姫「そうですか。それはお疲れ様でした」

まったく疑わない瑞希はその言葉を信じ、笑みを送る

雄「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

秀「バッチリじゃ」

康「・・・お茶と飲茶大丈夫」

瑞希特製飲茶以外は大丈夫といえるだろう

雄「よし。少しの間喫茶店は秀吉とムツツリー二に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

雄二はそう言い秀吉と康太の肩をたたく

『俺も行つて来る』

美「あれ？あんた達も召喚大会に出るの？」

確認するように明久を見る美波

『え？あ、ああ。いろいろあつてな』

俺は適当に言葉を濁す

チケットの裏事情については誰にも話すな
と言われてるから、下手なことはいえないんだつたな

美「もしかして、賞品が目的とか・・・？」

美波の探るような視線が突き刺さる

『一応そついうことになるな』

まあ賞品の完成と引き換えに教室の改修だけどな

賞品の白金の腕輪は2タイプに別れている

召喚獣を二体呼び出すダブルタイプと
先生の変わりに立会人になれる代理召喚タイプの二つある
俺のつけてるやつは両方できるタイプだ

美「・・・誰と行くつもり？」

「はい？」

美波の目がスツと細められた
こ、これは・・・攻撃色！！？

姫「良太君。私と・・・だよね？」

何故か瑞希までも戦闘モードに！？

「誰と行くって・・・」

そんなもの決まってるじゃないか

「お前と翔子とに決まってるだろ？」

そっついながら、瑞希の頭をなでる

姫「／／／／／」

美「・・・」

瑞希は顔を真っ赤にして、美波は目をさらに細めた
なんでさ？

『つと、時間か。それじゃ行くな』

そっぴいなから教室を後にする

木「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ

そこで召喚大会は行われる

木「三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回立会いを勤めてくれるのは数学の木下先生
当然勝負する教科も数学だ

A1「あの、先生」

対戦相手はAクラスの男子コンビ
その片割れが手を上げ先生に質問する

木「なんですか？」

A1「この大会はタッグマッチのはずなのになんで新炎は一人な

んですか？」

木「・・・特例です」

俺がこの大会に出るときの条件で一人でもいいといったのはパートナーを探す時間があまり

無かったのはつきり言ってバランスがぶち壊れるからだ

まあ俺が出てる時点でぶっ壊れてるかもしれないけど

『どうした？もしかして、負けたときの言い訳に相手が一人で油断した。とでも言うつもりか？』

A1「まさか。新炎の強さは噂で聞いている。油断なんてしたくても出来ないさ」

そこまで噂が広がってるんか？

木「では、召喚してください」

「サモン！！」

相手が召喚する

足元におなじみの魔方陣が現れ、召喚者の姿をデフォルメした形態を持つ召喚獣が現れた

Aクラス	大沢 誠	&	Aクラス	沼澤 武
数学	249点	&		228点

向こうは似たような召喚獣だ

昔の侍を思わせる服装で、腰には刀を差している

それにしても流石Aクラス、点数が高い
もしも他のFクラスが出ていて当たっていたら即やられていた
らう

『さて、俺もいきますか。
サモン！！』

その声に答え現れる俺の召喚獣
俺の召喚獣は振り分け試験のときに無得点だったのが効いている
ようで

服装は明久と同じ改造制服で、基本は拳なのだ
そして、バランスブレイカーともいえる技、コンタミネーション
で太股にある鉄の爪を取り出し、両手にはめ、構える

『Fクラス 新炎良太 お相手を願おう。行くぞ、点数の貯蔵は充
分か？』

その言葉とともに召喚獣を走らせる

Fクラス 新炎良太
数学 250点

誠「武、油断するなよ！あいつの強さは並じゃない！！」

武「ああ、わかってる！」

左右挟み込むようにして俺に迫る二体の召喚獣
そして、大沢は上から、沼澤は下から同時に上下に挟むように切
り付けてくる

『くっ』

それを、両手の爪の部分で防ぎ、弾く
そして、そのまま追撃しようとする

誠「まだまだ！」

しかし、大沢は弾かれた刀を再び振り下ろしてくる
沼澤はまだ、体制を立て直しきつてない
それを確認した俺は、片方の爪で刀を受け止め

『ひと「させるか！」っ！？』

もう片方の爪で切り裂こうとしたが沼澤が刀を投げこれを防ぐ
このままだと危ないのはこっちと判断し、一旦バックステップで
下がる

誠「すまない、武」

武「それより、気を抜くな。いつ来るかわからないぞ」

誠「ああ」

礼を言いながら武器を渡し、それに答えた後再び構える二人
今度は反撃でやられることを警戒し、動かない

・
・
・
・
・

俺達の間しばらく緊張が走る

カタ

「「『!!!!』」」

何かが動く音を合図に俺達は再び走り出す

二人は直線上に並び俺にまっすぐと迫る

俺はあえてそのまま二人にまっすぐと走る

武「はあ!!」

『ふっ!』

前にいた沼澤が横から刀を一閃

それを近い右の爪で防ぐ

そして、大沢は

誠「甘いな、新炎!!」

『な！？パートナーを踏み台にしただと！？』

そう、大沢は某機動戦士のように沼澤を踏み台にして俺の後ろに回ったのだ

そこから

誠「終わりだ！」

ガキン

『終わるかよ・・・』

右肩めがけて切りつけられる

しかし、それを左の爪を使い防ぐ

が、流石に無茶な体制できつい

気のせいかなフィードバックが強くなってないか？

『おお・・・らあ！！』

両方の爪で防いでいる刀を滑らし、一回転する

武「な！？」

誠「くっ、すまない武！」

大沢の刀を滑らし、その力で沼澤の召喚獣を切る

しかも、当たり所が悪かったのかそのまま戦死扱いに変わる

『さて、あとはお前だけだ大沢』

誠「まだまだ！まだ終わらんよ！！」

お前はどこの大尉だ！！

そう思いながら、拳を構える

誠「なら！！」

と、大沢は飛び上がり

誠「どりゃあっ！！」

刀を投げた

『なっ！？』

まさかこの状況で武器を投げてくるとは思わず回避が一瞬遅れ、体制が崩れた

誠「もらった！！」

そのままの勢いで俺に向かい、蹴りを放つ

『甘い！！』

俺はそのまま横に転がりそれを回避する

そして、そのまま力ポエラの要領で逆立ちの体制になりながら

『三連脚！！！！』

顎、鳩尾、股間

人体の急所の内の三つに正確に蹴りを入れる

誠「くそ!!」

木「勝者、新炎良太!」

そこで、召喚大会の一回戦は俺の勝ちで終わった

『ふう』

予想外に苦戦した

まさか同学年であんな戦い方をするとは思わなかった
相手の二人に挨拶をしたかったが、喫茶店が心配だ

俺は急いで、喫茶店へと戻る

教室の近くまで戻ってくると、廊下にまで響く大声が聞こえた
そして、教室の前に明久達もいた

『どうした？』

秀「実は営業妨害での」

『この学校の生徒か？』

明「うん。三年生みたい」

・・・そっぴやそんなのもいたな
名前は・・・なんだっけ？

？「マジできつたねえ机だな！これで食い物扱っていいのかよ！」

いつの間にか雄二が扉を開けていて、罵声が耳に飛び込んでくる
どうやらクロスで覆い隠したみかん箱がおきに召さなかったよう
で、クロスをはがして

文句を言っている

うわお、絵に描いたようなチンピラだな

「うわ・・・確かにひどいな・・・」

「クロスで誤魔化してたみたいね」

「学園祭と入っても、一応食べ物のお店なのに・・・」

その様子をみたお客さんが口々に呟く
まずいな、喫茶店でこの悪評はかなり痛い

『秀吉』

秀「？なんじゃ？」

あーやば、あのチンピラに対する怒り抑えきれるかな

『至急用意して欲しいものがある』

俺はそういい、秀吉に耳打ちする

秀「一応用意は出来るが……。あっても二つ程度じゃぞ？」

『それで充分だ。あとは雄二達が他から調達してくる』

俺はそう言いながら雄二にアイコンタクトを送る
雄二も何をするか分かったようで、うなずいて

雄「明久、行くぞ」

明「え、どこに？」

雄「いいから行くぞ」

そんなやり取りをして、あるものの調達に向かった

秀「了解じゃ。すぐに戻る」

秀吉も、教室内のクラスメイト数名に声をかけて足早に去っていった

さてと

『須川』

須「なんだ？新炎」

『あのチンピラコンビの特徴を覚えておいてくれ』

須「？良く分からないが、了解した」

須川に特徴を覚えさせ、俺はクレイマーに近づく

営業妨害しているやつは二人
いずれも男だ

片方は中肉中背の一般的な体格と、小さなモヒカンと非一般的な
髪型だ

・・・一応受験生じゃないのか？
もう一方も175センチくらいの普通の体格で、こちらは丸坊主だ
覚えやすい髪型の二人である

坊主「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表ゴバ！」

『只今代表は席をはずしておりまして、代理の新炎です。何かご不満な点でもございましたか？』

ウェイターのように頭を下げる

つい、耐え切れなくなり話しかける前に相手を殴り飛ばしてしま
った

これさえなければ模範的な責任者だったろう

モヒ「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが・・・」

殴られていないモヒカンの男が驚いている
当たり前か

俺でもいきなり連れが殴り飛ばされたら驚く
だが

『それは私のグーから始まる交渉術に対する冒瀆ですか？』

モヒ「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・！なにが交渉術うぎゃあ
！」

うざったく感じて、つい、けってしまった

『そして蹴りでつなぐ交渉術です。最後にはプロレス技で閉める交渉術が待っていますので』

モヒ「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしていないから交渉は必要だぞ！」

坊主「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言っのか
！？」

あわてているのは坊主頭の夏川と呼ばれた先輩
ああ、思い出した常夏コンビ（命名雄二）だ

『それで、常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるか？』

面倒になってきたから、仮面をはずす

常「い、いや、もう充分だ。退散させてもらっ」

『そうか、それなら――』

大きく頷き、夏川先輩の腰を抱え込む

夏「おいっ！俺もう何もしてないよな！？どうしてそんな大技を
ゲブラっ！」

『ー言ったる？プロレス技で閉める交渉術が待ってるって』

バックドロップを決めて立ち上がる
これ、門外不出は確定だな

常「お、覚えてろよ！」

倒れた相棒を抱えて、走り去る常村先輩
よし、これで問題は一つ終了

「流石にこれじゃ、食っていく気はしないな」

「せっかく美味しそうだったんだけどね」

「食ったら腹壊しそうだからなあ」

二つ目の問題が出た
クロスの中を目の当たりにして、ガタリと音を立て、一人目が席
をたつ

あれは、竹原先生か
無言で立ち上がったことタイミングから考えて少し怪しいな
・・・考えすぎか

「店、変えるか」

「そうしようか」

須「あ、お客さん！」

一人目が席を立つと次々とお客が席を立つ
集団心理だ

こうなると悪評は風に乗るように学校に広まってしまっ

ちらり

と廊下を見ると頼んでいたものが来ていた

『大変失礼いたしました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたため、暫定的にこのよう物を使ってしまうまい。ですが、たつた今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください』

そついい頭を深く下げる

後ろでは頼んでいたテーブルを運び込んでいる

こうすればお客さんの目の前できちんと衛生面で改善した姿を見せられる

これは風評対策だ

それにしても雄二達はどこから調達したのだろうか？

『それでは、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりおくつろぎください』

そう締めて廊下に出る

そして携帯を取り出し時間を見る

今は9時58分

「……やば、俺が遅刻したらしゃれにならねえ

雄二、しばらく任せていいか？」

雄「別にいいが、どうした？」

『ちよいと今日の活動でな……』

それで、雄二は分かってくれたのか

雄「ああ、分かった」

頷いてくれた

そして、物置として使われている教室に急いで入る

『インフィニット 転移』

インフィ「転移先は？」

空色の魔方陣が足元から出現し、俺は行き先を呟く

『……初音島へ』

そして俺は転移する

第二章 三話〜清涼祭開催！召喚大会一回戦！〜（後書き）

はい

まあ分かる人にはわかると思いますが

次からあの作品が入ってきます

文化祭だけの参加か今後も混ざってくるかはまだわかりません

第二章 第四話〜バンドメンバー合流そして召喚大会二回戦！〜（前書き）

新たに複数のキャラが入ってくるのですがここで注意が・・・

キャラの口調が違っている可能性が高いです！

ご注意ください

第二章 第四話　バンドメンバー合流そして召喚大会二回戦！

ここは初音島

瀬戸内海のどこかにあり

今の季節になったら散っているはずの桜が一年中咲いている島
そこに一つの大きな学校がある

風見学園

開校から60年たっている学校だ

その校門前にこの学園の生徒らしき人物が集まっていた
彼等はこの日、友達に頼まれ、あることをするために集まっているのである

？1「それにしても、他の学校の文化祭なのにこんな時間に、ここで集まって大丈夫なのか？」

？2「良太なら心配いらないんじゃないかね？」

？3「私としては、皆が良太と知り合いだったってことにびっくりだよ」

と、そこへ魔方陣が出現する

？4「！？皆さがって！！」

集まっていた人の中から金髪のツインテールで小さい子がかばうように前に出る

その場の緊張が走る

そして、魔法陣の中から、出てきたのは

『時間ぴったし♪』

良太視点

『時間ぴったし♪』

転移が終わると目の前には

? 4 「あ、良太君だ。久しぶり〜」

『お久しぶりですさくらさん』

見た目は金髪の小さい子だが、実際は60を超えているらしい本人に確認しようとするレディに年齢を聞くのは失礼だよ、と怒られたこともある

とまあそれはおいといて、この人の名は芳乃さくらさん
俺の親友の家族だ

? 3 「あ、良太君だ。やつほー」

? 5 「あ、ほんとだー。良太ー」

? 2 「相変わらずだな、良太」

? 1 「時間に正確な所もな」

上から順番に

白河 ななか

月島 小恋

板橋 渉

桜内 義之
である

『久しぶりだな。皆』

? 6 「あ、良太君。久しぶり」

? 7 「良太さんお久しぶりです」

『お久しぶりです 音姫さん、由夢』

今挨拶したのが

朝倉 音姫さん

朝倉 由夢

気づいてるかもしれないが二人は姉妹だ

さてと・・・

『義之、後は行くだけか？』

義「ああ」

『んじゃ、行くか。・・・っと言いたいところだけど、その木の上にいる奴は知り合いか？』

義「え？」

？「ふっふっふ。よく俺に気づいたな」

そう言いながら校門の近くの木の上にいた謎の人物が降りてきた

義「杉並！？」

杉「おはよう、MY同士桜内。それで、こんなメンバーで一体どこに行こうというのだ？」

義「ええつと・・・」

義之がどうすればいい？と目で聞いてきた

話しても特に問題はないと判断した俺はお前に任せると目で返した

義「実はな・・・」

説明中・・・・・・・・

義「と、言うわけなんだ」

杉「なるほど。では俺もついていこう」

『まあ別にかまわないけど・・・問題は起こすなよ?』

俺の勘が告げている

コイツは釘を刺さずに野放しにしたら何かする、と

杉「さあ、それはわからんな」

・・・訂正

野放しにしたらアウトだ

下手したら見張ってても逃走を図るかもしれない

音「もう、杉並君！問題起こしたらだめだよ！」

音姫さんが杉並に注意をしているが杉並は聞いているかわからん

・・・とりあえず行くか

調整の時間欲しいし

『とりあえず、皆集まってください。移動しますんで』

声をかけるとそれぞれが集まってくる

『動かないでくださいよ？インフィニット』

インフィ「転移先は？」

『文月学園の近くに・・・』

ここは文月学園の近くにある路地
うまい具合に周りを建物で囲まれていて、何人か連れて転移する
には都合のいい場所だ

そして、転移後

『それじゃ、案内します』

そついいながら歩き出す
道中さくらさんが転移について聞いてきたが、これは誤魔化した

『到着』

時刻は10時20分

俺達は文月学園の正門に着いた

『とりあえず義之達バンドメンバーは俺についてきてくれ。他の人たちは・・・これが学園内の地図と文化祭のパンフだから、自由に回ってくるといいよ。ただし、杉並は音姫さんが、さくらさんと一緒に行動すること』

そついいながら、一人一人に渡し、俺達バンドメンバーは楽器をとり音楽室に向かった

『さてと・・・』

音楽室に着き、楽器の調整を済ませたところで俺は切り出す

渉「どうした、良太？」

『急ぎで、悪かったんだが今回やる曲は大丈夫か？』

な「バッチリ♪」

小「月島も大丈夫だよー」

渉「俺も大丈夫だぜ」

義「俺も大丈夫」

急に頼んでしまつて悪いと思いながら聞くと全員大丈夫のようだ

『さて、リハーサル行くか』

音楽室からは校庭の特設ステージがよく見える
時間ぎりぎりまでリハーサルできるといふわけだ

数十分後……

今の時間は10時45分
俺の試合はもうすぐだ

『悪い、試合があるから俺はいくよ。バンドは午後からだから食事は各自で取ってもらつていいか?』

義「ああ、別にいいぞ」

『一応ここから試合が見れるから、暇だったら見るのもいいぞ』

んじゃ

といいながら俺は会場に走って向かう

遠「それでは、召喚大会二回戦をはじめます」

そういうのは多少のことは目を瞑ってくれる英語担当の遠藤先生だ

二回戦は英語

相手は三年のAクラスとBクラスの女子コンビだ

二年より一年慣れている分厄介だ

「『サモン！』」

三人一斉に召喚する

向こうの召喚獣は西洋の鎧に大剣

もう一人は同じ西洋の鎧だが、その手にはスピアを持っている

Aクラス 中沢 命 & Bクラス 柊 真美

英語W 279点 & 207点

そして俺は両掌にある双槍・・・朱雀を取り出し、構える

『Fクラス新炎良太 お相手願います。さあ、行くぞ点数の貯蔵は充分か？』

Fクラス 新炎良太

英語W 269点

その言葉と共に相手は俺に向かい走り出す

俺はそれを確認しながら、腰を捻り力を溜める

『秘技 大・・・噴火!!』

無防備に突っ込んできた相手に対し捻った力を解放し、一回転する

中「甘いわよ!」

そう言いながら大剣の先輩（中沢先輩）はその剣で受け流し、スピアの先輩（柊先輩）は身を低くし、かわして槍を構えた
まずい俺は攻撃直後で体は宙に浮き体制が崩れてる

中「真美!」

柊「もらった!」

柊先輩は心臓の位置めがけ、槍を突いてきた

『こなくそつ!』

右手の槍をステージに突き刺し、それを蹴り回避
そして着地と同時に一気に距離を詰める

『ふっ!』

中「え!？」

そのままの勢いでもう一本の槍を突き出す
中沢先輩は最小限の動きでかわすが、突き出した槍を横に薙ぎ吹き飛ばす

そしてそのまま回転し、先ほど回避に使った槍を回転させ、取る

柊「命！？よくも命を！」

柊先輩は激怒し、槍を連続で突き出す

正確性はかけるがとにかく早い

召喚獣だと避けるのに必死だ

「いつまでも・・・させるか！！」

槍を弾き、反対の槍で心臓の位置を貫く

中「よくも真美を！！」

しかし中沢先輩は怒りながらも冷静な様子で、こちらの動きを見ている

だが、10点差と武器の違いは大きい

力の多少の違いと、大剣を槍で防ぐのははっきり言って無謀だ

大剣の重さを槍が支えきれなくて槍ごと切られる

そのため流すか、かわすしかない

このまま防御に回ると確実にやられる・・・なら！！

「先手必勝！！」

再び距離を詰める

大剣は破壊力は抜群だが、一回攻撃を避ければ隙が出来る
そうなればあとは何とかなる！

中「・・・・・・・・」

中沢先輩は反撃をするわけじゃなく、防御する構えを取った
カウンターを警戒したか

『だが・・・烈火!!』

射程に入ると同時に両手の槍を最大のスピードでなおかつ
こめられる限りの力で突き出す!!

中「・・・っ!!」

中沢先輩はかすり傷を気にせず人体の急所だけを防いでいる
これでは決定打は与えられないか・・・
なら!!

『はああああっ!!!!!!!!!!』

突く地点を分散させずに一箇所に集中させる

ビギ ビキビキビキン

しばらくすると、耐えられなくなった大剣が砕け散り、無数の突
きが中沢先輩の召喚獣を貫いた

遠「勝者、新炎良太君!!」

『しゃああ!!!!』

これで2回戦突破だ
それにしても今回は苦戦が続くな

明「あ、良太。今終わったの？」

ステージから降りると明久達がやってきた

『ああ、お前達はこれからか？』

明「うん」

『相手は？』

雄「ああ、BクラスとCクラスの代表カップルだ」

根本と小山か・・・
とすると

『もしかして、例の物を使うのか？』

雄「もちろんだ（ニヤ）」

『そうか（ニヤ）』

こいつ等が使うもの、それは・・・

『それにしてもあいつはどんどん痛い奴になってるようなきがするな。女装写真を写真集にされるなんて』

俺がやられたあれは遠い過去に閉まっておきたい・・・

あーでもあの人ならこっそりと保管してそう

・・・やめようこれは今考えても仕方ない

『ま、それがあるなら結果は見えてるな。ちやっちやと行って来い』

明「うん」

そう言いながら明久達はステージへ
そして俺は喫茶店へと向かった

バカテスト 現代社会

「PKOとは何か、説明しなさい」

新炎良太 姫路瑞希の答え

「Peace Keeping Operation（平和維持活動）の略
国連の勧告の元に、加盟各国によって行われる平和維持活動の略
と」

教師のコメント

そうですね

豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします
余裕があれば覚えておくとよいでしょう

土屋康太の答え

「Pants Koshit-suki Oppaiの略
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと」

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか

吉井明久の答え

「パウエル・金本・岡田の略」

教師のコメント

それは世界を守る人たちです

『あんまり客はいないか・・・』

テーブルを綺麗なものに変えたのに客はほとんどいない
どこかで常夏コンビが妨害活動をしているのだろうか？

秀「戻ってきたようじゃの」

ウェイトレスを担当している秀吉も暇なようだ

『ああ、用事も大体終わらして、召喚大会も勝って来たぜ』

秀「それは何よりじゃ」

『それより秀吉。あれから常夏コンビは来てるか？』

秀「常夏コンビ？」

『さっきのクレイマーの呼び名だ。一人一人で覚えるより楽だから
な』

秀「・・・ワシはずっとここにいるが、常夏コンビや妙な客はあれ以降来ておらんぞ？」

秀吉が首をかしげながら話す

とすると、教室の外で何かが起きているというのが当たりか

明「ただいまー」

と、考えていると明久が帰ってきて、今と同じような会話を繰り返す

そして、三人で考えていると

？「お兄さん、すみませんです」

雄「いや。気にするなチビッコ」

？「チビッコじゃなくて葉月ですっ」

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた

『雄二が帰ってきたようだな』

明「あ、うんそうみたいだね」

それにしても聞いたことのある声だな

雄「んで、探してるのはどんなヤツだ？」

音をたて、教室の扉が開く

そこには雄二がいたが、話し相手は小柄なのか雄二の影になっていて姿が見えない

F1「お、坂本。妹か？」

F2「可愛い子だね。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？」

F3「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

二人はあつという間にクラスの男子に囲まれる暇なんだろう

葉「あ、あの、葉月はお兄ちゃん達を探しているんですっ」

どうやら女の子は人を探していて雄二に声をかけたみたいだ
雄二はなんだかんだ行つて面倒見がいいからな

雄「お兄ちゃん達？名前はなんていうんだ？」

葉「あう……。わからないです……」

雄「？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？」

名前が分からない相手でも探してあげようという雄二の気遣いが
感じられる

案外子供好きなんだな

葉「えっと……。一人目のお兄ちゃんは大力なお兄ちゃんでした
！」

なるほど、それならこのクラスだって分かるわな

雄「そうか……」

雄二が首をめぐらして、該当する人物を探している

雄「・・・・・・・・・・沢山いるんだが？」

否定できねえなあ

葉「あ、あの、そうじゃなくて、その・・・」

雄「うん？ほかに何か特徴があるのか？」

葉「その・・・すつごくバカなお兄ちゃんだったんです！」

【吉井だな】

思わず俺も口に出してしまった

明「まったく失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違いー！」

葉「あっ！バカなおにいちゃんだっ！」

葉月と名乗っていた小さな子がかけてきて、明久に抱きついた

雄「『絶対に人違い、がどうした？』」

明「・・・人違いだと、いいなあ・・・」

そついいながら少し遠い目をする明久

『何処かであったことがあるんじゃないのか？』

葉「あ、カッコいいお兄ちゃんだ！」

そっぴいながら俺にも抱きついて来る葉月

明「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

ハツとしながら明久が問う

葉「え？お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……。」

女の子の表情がゆがんだ

葉「バカなお兄ちゃんのバカアっ！バカなおにいちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命バカなお兄ちゃんを知りませんか？って聞きながらきたのに！」

『明久じゃなかった、バカなおにいちゃんがバカでごめん？』

秀「そっぴじゃまバカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

俺も言っただけのもなんだけどここまでバカと言われる奴も珍しいよな

葉「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに――」

美「瑞希！」

姫「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

『ぐぶわあ！？』

後ろから瑞希達の声が聞こえたと思うと首筋に激痛が走った
何で！？葉月は明久に言ったのに！！

雄「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

雄二が落ち着いて言う

美「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲
げるから」

姫「こ、こうですか？」

まずい

このままでは誤解で殺られそうだ

「『ちよつとまって（待て）！結婚の約束なんて僕（俺）は全然――
――』」

タイミングが良いのか悪いのか明久とハモツた

葉「ふえええんっ！酷いです！ファーストキスもあげたのに――
――！」

念のために言っておくがこれは明久に言っているのだ

美「坂本は包丁を持ってきた。五本もあれば足りると思う」

姫「良太君、そんな悪いことをするのはこの口？」

『まへ！ほふあいだ！はなひをひへ！！』

（訳：待て！誤解だ！話を聞け！！）

ここで、何で二人が明久じゃなく、俺に攻撃を仕掛けているのかを考えた

女の子が結婚の約束と言った直後に俺に攻撃を仕掛けた、それは何故か？

二人は戻ってきてすぐに女の子の言葉だけを聞いたのなら、納得はいく

女の子は俺に抱きついてのだから
というかこれしかかんがえられん

美「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちよっと待ってなさい」

『あのな、美波。包丁って刺しどころが悪かったら一本で致命傷なんだぞ？』

とりあえず落ち着かせよう

葉「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と、葉月が美波をみて涙を引っ込める

明「ああっ！あのときのぬいぐるみの子か！」

明久も思い出したようだ

まあ俺が葉月と会ったのも明久と同じタイミングだったな・・・

第二章 第四話、バンドメンバー合流そして召喚大会二回戦！〜（後書き）

はい、というわけでD・CIEIが新たに入ってきたのですが
今後も出てくるか分かりません

もしも絡むとしたら間章に出てくると思います

そして、次は葉月との出会いを3・5巻を元に作成していきます

第二章 第五話 葉月との出会い

葉月と出会ったのは去年の召喚実習の日だったな・・・

遠「それでは、持ち物検査を始めます」

朝のHRが始まると、担任の遠藤先生が持ち物検査を始めた

鉄「全員動くな！鞆を机の上において、中身が見えるように開け
！！」

教室が静かなときに廊下から、そんな西村先生の声が聞こえた
どうやら明久達のクラスは警戒度がほかと比べ物にならないくらい
高いようだ

そんなことを考えながら少し、持ち物検査の様子を見る
トランプや雑誌などの小物が没収物の中心のようだ

遠「新炎君、鞆を開いてください」

おっと忘れてた
いそいそと鞆を取り出し、開く

遠「・・・はい、結構です」

危ない危ない
今日は召喚実習だけだからいつもと違う鞆で助かった
いつもの鞆だったらやばいことになってたな

ここで少し解説しておこう
いつもの鞆は少し細工と魔法をかけており
中は四次元
中の時間は進まず
出来る限りの防犯、加工をしており
さらに丈夫という優れものだ

遠「持ち物検査に時間をとられてしまったのでHRは省略します。
一時限目は召喚実習です。全員速やかに体育館に移動してください」

遠藤先生はそう締め教室から出て行った

「ーーーーサモンっ！」

体育館に召喚の声が響き渡る

その声を聞きながら俺はどうやって明久達にはれない様にするか
考えていた

『・・・・・・・・・・・・・・・・よし』

俺は制服のポケットからなんとなくという理由で持ってきていたワックスを取り出し、髪をオールバックに変えた

『急ごしらえだが、まあ良いだろう』

そう呟くと同時に

「次、新炎良太君。前に出てください」

『うい』

呼ばれたので前に出る

『よろしゅう』

「ああ、よろしく」

お互いに挨拶しあう

「『サモン！！』」

同時に召喚した

Dクラス	新炎良太	V S	Dクラス	渡辺直樹
総合科目	1562点			1570点

俺達の頭上に参考用の点数が表示される

これはこの前受けた中間試験の結果だったかな？

俺の召喚獣は白と青を基調とした鎧、つまりはBJと同じ色合い
そして武器は太刀だ

・・・そうモンハンの鬼神斬破刀のような刀だ
それ対し相手は色以外は俺と同じ鎧だ
それに対し相手はランスと大盾
これまたモンハンのような装備だ

『はっ！！』

直「くっ」

一気に接近して、斜めから斬り付ける
だが大盾で防がれ、弾かれる

直「そこ！」

渡辺はその隙を逃さず突きを放った

『ちいつ』

そのまま横に転がる

その姿はさながらハンターだ

唯一の違いは対人って点ぐらいか

『ふっ！』

「あ！」

立ち上がりながら接近して、大盾を持っていた手を突く
大盾が落ちきる前に蹴り飛ばしステージの端まで飛ばす

「くっ！」

だが、渡辺は盾をとりにいこうとしないでランスを槍のように構えた

・・・隙を見せるより反撃を選んだか

「なら！」

そのままあれを繰り出すために構える

「八刀・・・一閃！！！」

ガードをする暇もなく、相手の召喚獣が八回斬りつけられる

「ふう」

終わった終わった

そうして、俺の召喚実習は終わった

放課後

俺は今日の晩飯の買い物のために商店街に来ていた

『さてと。買い物も終わったし、帰るか・・・ん？』

なんとなく周りを見渡すと公園で女の子が一人、悲しそうにしていた

見てみぬ振りをするわけもいかず、俺はその女の子に声をかけた

『悲しそうにしてるけど、どうしたの？』

俺がいきなり声をかけてびっくりしたのか、女の子は

「お、お兄さん誰ですか？」

俺が誰かと問う

『ただの一般高校生だよ。それよりどうかしたの？』

「実は・・・」

まずこの子の名前は葉月というらしい

最近姉の元気がなく、元気を出してもらおうと姉の好きなぬいぐるみを買いに来た

それは良いが、お金が足りなく困っているようだ

先ほど店員と交渉していたときに俺と同じ制服を着たバカなお兄ちゃんが来て何とかして暮れ

明日まで待つてと言ってたがバカなところを見てしまうと本当に大丈夫か？と不安だったらしい

『ふむ・・・確認するけどそのぬいぐるみはバカなお兄ちゃんが何とかしてくれるって言ったんだね?』

葉「はいです・・・」

『それでも不安だと・・・』

葉「はい・・・」

『なら俺が保険を用意してあげるよ』

葉「え? 本当ですか!?!」

『ああ。本物とそっくり同じって訳には行かないけど』

葉「お願いします!」

『じゃあ、明日またここで会おうね』

葉「はいです!」

そうして、葉月と分かれた後
ファンシーショップによって目標^{ノイちゃん}を確認してきた

『これをそっくりか・・・買い物追加だな』

翌日

『はい・・・すみません・・・失礼します』

前日からずっと作っているが、まだ終わらない
仕方がないので学校に休みの電話を入れることにした

『さて、ちゃっちゃと終わらせますか』

気合を入れなおし作業にかかる

『終わった』

放課後と同じ時間帯

ようやくぬいぐるみが完成した
というか材料が余ったからもう一個作ってしまった

これは葉月にあげれば良いだろう
まあ俺と同じ制服を着たバ力なお兄ちゃん・・・おそらく明久なら約束は
守るだろうから

それを一人で持っていけるように袋を持っていくか

公園

俺が公園に着くと葉月がベンチに座っていた
その手にはノイちゃんのぬいぐるみとそれにそっくりのぬいぐる

みを抱えていた

葉「あ、カッコいいお兄ちゃんっ！」

葉月が俺に気づくと走りよってきた

『お待たせ。そのぬいぐるみは？』

そっくりなほうのぬいぐるみをさし聞く

葉「あ、これは――」

葉月の話を纏めるところだ

今日、綺麗なお姉さんが葉月のところに来た

そして葉月に手作りのぬいぐるみをあげた

そのぬいぐるみは、バカなお兄ちゃん（明久）がうまく目的を達成できなかったときには葉月の姉へのプレゼントにするように言われた

うまくいったときには葉月へのプレゼントに、といわれた

ついでにそのお姉さんの特徴を聞くと

胸がおっきくて髪が長くて髪の色はピンク
という情報が得られた

……瑞希ちゃん

まああいつのことだから偶然明久と葉月の会話を聞いてて放っておけなくなっただろうな

それにしても念のために大きい袋を持って来ておいて正解だったな

『はい。大きい袋だからその二つも入るよ』

葉「カッコいいお兄ちゃん、ありがとうございます！」

葉月は袋とぬいぐるみを受け取り持っていたぬいぐるみも袋に入れた

『お姉ちゃんが元気になると良いね』

葉「はい！」

『それじゃあね〜』

そう言いながら俺は家へと帰っていった

追記すると俺が休んだ日に職員室で盗難が発生したらしい

犯人は西村先生の私物も盗み、しかも犯人は身分証明書を提示して堂々と売り払ったそうだ

・・・西村先生って所を考えると明久達じゃないかと俺は考えている

第二章 第五話 葉月との出会い（後書き）

やつちまった・・・

これを書き終えることのほうが優先順位が高いはずなのに先に瑞希・翔子のフラグイベントを書き上げちゃった・・・

俺にも（ry

まあアホなことはおいておきまして

少し更新が遅れてすいません

最初に書いたように我慢できなくなり先にフラグイベントを書き上げてしまいました

一応過去編の前後くらいに乗せようかな？と考えています

こんなため作者ですが、それでも読んでいただけたらうれしいです

第二章 第六話 坊主、変態と化する（前書き）

えゝお久しぶりです。

夏休みに入ってもバイトやら何やらで忙しく、遅くなってしまう申し訳ありません

そして、気づかぬうちに8万ヒットを超えていて、びっくりです
皆様ありがとうございます（土下座）

第二章 第六話 坊主、変態と化する

とまあこんな感じで会ったんだよね

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

気づくと話は進んでいて、雄二が教室内を見渡しながら問いかけていた

「そついえば葉月、ここに来る途中で色々な話を来たよ？」

「ん？どんな話だ？」

雄二が屈みこみ、葉月に視線を合わせる

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」

葉月の言葉に俺の中の予想が確信に替わった

『あの常夏コンビの妨害が何処かで続いているんだな。・・・今度は全力でぶっ飛ばすか』

なんとなくだが、俺のこめかみには青筋が浮かんでるだろう

しかし、雄二の時より威力が高いのを入れたはずなのにまだ妨害を続けるなんて・・・

流石に殺しはしないが、召喚大会に出れないぐらいにしたろうか？

「まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

『どうだかな。とりあえず様子を見に行く必要がある』

「そうだな。噂がどこで流されていて、どこまで広がっているのかを確認しないとな」

葉月が知ってるぐらい噂が広がってるのか、それとも人気が大きな店で噂を流しているのかしらんが場所は絞れるか

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

葉月が明久の手を握りながら言う

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

明久はそう言いながら葉月の頭をなでる

「むう。せつかく会いに来たのに」

葉月の頬が不満げに膨れた

だがこの喫茶店は瑞希（俺もそうなる可能性が高いが）の転校にかかわる大事なことだ

明久が後悔の無いように全力を尽くしたいという気持ちは良く分かる

「それなら、そのチビッコも連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

そこで、雄二がフオローをする

確かに雄二が言ってることももっともだ
敵情視察は初歩だと俺は考えている

「ん、そつか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く?」

「うんっ」

葉月の膨れ顔が一転して満面の笑みに変わる

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波の口調が違う

妹に対しては優しい姉で居たいのだろうか?

「ふむ。ならば姫路と雄二と良太も一緒に行くといいいじゃろ。召喚
大会もあるじゃろっし、早めに昼を済ませてくるといい」

「そつか。悪いな秀吉」

「いいんですか?ありがとうございます。木下君」

『悪い、秀吉』

人数は合計6人

混雑する学園祭の中を歩き回するには結構な人数だ

『それで葉月。さっきの話はどこら辺で聞いたか教えてくれるか?』

「えつとですね・・・短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店ー」

「なんだって！？雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないな！」

二人はそれを聞いた瞬間に全力ダッシュ
下心が見え見えだ

「吉井、最低」

「吉井君、最低です」

「お兄ちゃんのバカ！」

『下心が見え見えなのはどうなんだ？』

この声が聞こえないほど明久達の心は躍っているようだ

「さあ行こう雄二！」

俺たちが追いつくと明久達はこれから目的の店に入ろうとしていた
そこはAクラス

メイド喫茶 ご主人様とお呼び！
と言っ名で営業していた

『・・・そっいや翔子がメイド喫茶をやるっていったな』

思わずそう呟き

なんとなく周りを見渡す

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（パシャパシャパシャパシャ）」

廊下には一人、不審者が居た

そいつは指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている

『・・・康太、何をしてるんだ？』

「・・・人違い」

厨房責任者のクラスメイトはカメラ片手に否定のポーズをとっている

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「・・・敵情視察」

『お前にとっての敵情視察とはローアングルから女の子を撮影することさすのか？』

「ムツツリーニ、だめじゃないか。盗撮とか、そんなことしたらとられている女の子が可哀想だと」

「……一枚百円」

「2ダース貰おうー可哀想だと思わないのかい？」

「吉井（明久）普通に注文してるわよ（してるぞ）」

「……そろそろ当番だから戻る」

康太はそういうと明久に写真を渡し、教室のほうへ去っていった
それにしてもプリントアウトまで済ましてるなんていつのまに・

「まったくムツツリーニにも困ったもんだね」

そう呟きながら、明久はさりげなくポケットに写真をしまいこむ

『明久？盗撮写真をどうするつもりかな？かな？』

まあそれを黙って見過ごすわけにもいかない

盗撮された子が可哀想だし

「やだな。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それより
そろそろお店に入ろう？もうすぐくおなが減っちゃったよ」

明久は腹を押さえてそう言う

嘘くさいがまあ俺も腹が減ってるし後で追及するか

『そうだな。入るか』

「うんうん。早く敵情視察も済ませないとー移ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」

『やっぱり見てるじゃねえか！！』

スパンといい音鳴らし明久の頭をハリセンが直撃する

「痛いよ良太！それにハリセンなんてどこからだしたの！？」

俺の方に向いた明久は肩に担いでいるハリセンを見てそういう

『ん？これはかなめのハリセンって言ってクリティカル率をアップさせてくれるハリセンだ』

「そういう意味じゃないよ！どこから取り出したの？ってこと！」

ああ、そういうことが

『ああ、これは投影したんだ』

【投影？】

その場に居た全員が首をかしげる
・・・あれ？

『投影の説明してなかったか？』

【コクリ】

『悪い。そんじゃあ説明すると』

俺の投影は簡単に言うとは投影できるものに制限が無く、投影したものは半永久的に存在するという物だ

もちろん宝具級の物も投影できるが、数十単位の量を同時に投影すると流石に体力が持たなくなる

まあ投影したものは武器以外を鞆に入れておくけどな

『とまあこんなところだ。それじゃあ行くぞ』

俺は声をかけ入り口を開き一番手でドアをくぐる

「・・・お帰りなさいませ、今夜は寝かせません、ダーリン」

出迎えてくれた上に過激な台詞を言ったのは翔子だった

「わぁ・・・綺麗」

後ろで瑞希が感激の声を漏らす

長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映え、黒のストッキングが翔子の足を更に際立たせている

同姓が羨んでも仕方な無い麗しさ・・・ってのが明久の心境だったな

まあその通りなんだが

そのあとに続いていた雄二が憎い！の部分は俺に替わってないことを祈る

「それじゃ、僕等も」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ〜！」

「お邪魔しまーす」

その後につき明久、瑞希、葉月、美波、雄二の順で入ってきた

「・・・おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

翔子はそう言い出迎える

「お席にご案内いたします」

翔子が歩き出したので、俺達もその後ろについていく

「ね、お兄ちゃん。すごいお客さんの数だね〜」

葉月が明久に話しかけている

確かに、葉月の言う通り、Aクラスの広い教室は客で一杯になっている

メイド喫茶だからほとんどが男だと思っていたが・・・意外に女の子も多いな

「・・・では、メニューをどうぞ」

翔子が立派なメニューを渡してくる

すごいな

学園祭レベルの物じゃないぞ

「ウチはふわふわシフォンケーキで」

「あ、私もそれが良いです」

「葉月もー!」

女の子三人は仲良くシフォンケーキ

「僕は水で。付け合せに塩があるとうれしい」

『んじゃ、俺は』

「・・・ご注文を繰り返します」

何故か翔子に遮られる

「・・・ふわふわシフォンケーキを一つ、水を一つ、メイドとの婚姻届が一つ。以上でよろしいですか?」

『待った翔子』

これには重大な欠点がある

「・・・では食器をご用意致します」

それをスルーし、女の子三人のところにフォークが、明久の前には塩が、俺の前には実印と朱肉が置かれた

『ここは、一夫多妻制じゃないから無理だぞ?』

翔子の耳元にささやくと翔子は無言で実印と朱肉を下げた

「・・・では、少々お待ちください」

翔子は優雅にお辞儀し、キッチンと思しき場所へと歩いていった

「つておい！俺の注文は聞かないのか！？」

あ、雄二が当たり前のようにスルーされてて気づかなかった

『それはそうと葉月、君が言ってたのはここか？』

「うんつ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話してたの」

葉月が元気よく頷く

嫌な感じでFクラスの悪口を言いそうな奴等といえぱり・・・

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？」

と、新規で入ってきた客の聞き覚えのある声がした

「あ、あの人たちだよ。さっき大きな声で中華喫茶は汚いって言うてたの」

それを聞き、入り口のほうを見るとやはり常夏コンビだった
さっきということは何度もここへ出入りして噂を流しているのだ

ろう

「それにしても、この喫茶店は綺麗で良いな！」

「そうだな。さっき言った二・Fの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルが腐った箱だったし、虫もわいてたもんな！」

人が多い喫茶店の中央で、大声で叫びあっている

『「待て、明久」』

それを聞いた明久が、常夏コンビへと向かおうとするのを俺と雄二が止める

そのとき、雄二と目が合い、頷きあう
どうやら考えは一緒のようだ

「二人とも、どうしてとめるのさ！あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評はさらに広まるだけだ」

雄二と明久が会話している間に俺は

『翔子、ちょっといいか？』

「・・・なに？」

呼んだ瞬間に翔子が来た

・・・常に近くに居たわけじゃないよな？

『あいつ等がここに来たのは初めてか?』

親指で常夏コンビをさす

すると、翔子は小さく首を横に振る

「・・・さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じようなことを言ってる」

翔子は顔を少し歪めた

翔子にとっても愉快な客ではないようだ

『やっぱりそうか・・・よし。とりあえずメイド服を貸してくれ』

「・・・わかった」

翔子は迷いも無く即答する

『つてちよつと待てい!!!!!!!!!!』

「しよ、翔子ちゃん!?!?こんなところで脱ぎはじめちゃだめですっ
「!」

「そうよ!ここにはケダモノが沢山居るのよ!?!」

「わあゝ。お姉さん、胸おっきいです」

その場で着ているメイド服を脱ごうとした翔子を、瑞希と美波が慌てて止める

あぶねえあぶねえ

「・・・良太が欲しいって言ったから」

止められた翔子は不思議そうな顔をしている・・・って

『俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいといった！？・・・そりゃあそのメイド服を着て迫られたら・・・じゃなくて予備の奴があれば貸してくれて意味だ！出来れば2着』

顔が真っ赤になりながらそっぽを向き俺は言う

「・・・今持ってくる」

翔子が服を着なおして去っていく

ふと気がつけば俺達のテーブルは注目の的になっていた

「あの店、出してる食い物もやばいんじゃないか？」

「言えてるな。食中毒でも起こさなければ良いけどな！」

「ニ・Fには気をつけろってことだよな！」

わざとらしい会話だが、ちょっと俺も我慢きつくなってきた

「二人とも！何でも良いから早く連中を！」

『いいからもう少し待ってる。瑞希、身だしなみ用のものを貸してくれるか？』

確か、瑞希はいつもそういうものを小さなポーチに入れて持って

るはずだ

「いいよ」

瑞希は上着のポケットをあさって小さなポーチを取り出した

『サンキュ。後で必ず返す』

ポーチを受け取るとちょうど翔子が戻ってきた

「・・・良太、これ」

『サンキュ』

「・・・貸し一つ」

『・・・今晚、返してやるよ』

翔子の耳元にそつとささやく

翔子は顔を赤くし、その場を離れていった

「で、これをどうするの?」

手元にあるのはポーチとメイド服が二着

『着るに決まってるだろ?』

何を言ってるんだ?という視線を明久に送る

「だってさ、姫路さん」

「え？わ、私が着るんですか？」

瑞希が目を丸くしている

『確かに似合うが。瑞希が着ても攻撃なんてできるか』

「それじゃ、島田さん？でも胸があまっちゃうとひべらあっ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

おお、すさまじい殺気だ

「島田でもない。それなら面が割れてしまっただろうが」

雄二が続ける

「・・・まさか」

瑞希でも、美波でもない。葉月は丈が余りすぎるため外れる
そうなる

「『着るのはお前だ』」

「いやああああっ！」

この中で俺の次に女装が似合う男だからなコイツは

『まあまあ。俺も着るから』

「それなら雄二が着れば良いじゃないか！無理をしたら着れるはずだよ！」

「やれやれ。わがままを言うヤツだな。それなら、あっち向いてホイで決めないか？」

俺をスルーし、雄二が提案する

「よし、その提案受けるよ」

明久はそれを受ける

「それなら行くぞ、ジャンケン」

「ポンッ」

明久がパーで雄二はチョキ

ここは明久の負けだ

だが、あっち向いてホイはこれからが本番！

「あっちー」

雄二が勢いよく人差し指を出す

これはー指を避けようとして顔を背けたら、その方向を指して勝負を決める裏技！

「その手に乗るかっ！」

明久は目をそらさずに雄二の指先を見つめる

「向いてー」

ブスッ

『あ』

「ぎいやあっ！目が、めがあっ！」

目を押さえてのけぞる明久

普通は目も前で指を止めるものだが、雄二は一切遠慮なしに指を突き刺した

「ホイ！・・・ふっ。俺の勝ちだな」

雄二が勝ち誇る

『おい、大丈夫か？』

ハンカチを明久に差し出す

「ありがとう。まったく、雄二に卑劣さには驚かされるよ」

『あはは・・・でも大丈夫だっ』

「そうだよね。あんな卑怯な勝負は無効ー」

『何言っただ？勝負は勝負。卑怯も何もなしで結果が正義だ。大丈夫だって、きっと似合うから』

「そういう問題じゃない！」

「こ、この上ない屈辱だ」

『おおつ、なかなか似合ってるな』

「明久、存外に似合っておるぞ」

雄二からの連絡を受けやってきた秀吉が、男子トイレで俺達の着付けとメイクを数分でやってくれた

「それにしても・・・」

明久がこっちを向く

「・・・本当に良太？」

『ああ、俺だぞ？もつともこのときは飛鳥って呼んで欲しいけどな』

鏡で見るとほんと、女だよなあ・・・体は男だけど

「では、ワシは喫茶店にもどるぞい。存分に悪党を伸してくるがよい」

『おおつ』

「ん、りょーかい」

秀吉と別れ再びAクラスの教室に入る俺達
なぜだか周りの視線が凄く気になる

「とにかく汚い教室だったよな」

「ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな」

常夏コンビはまだ同じような会話を続けている
あいつ等にとってはただの嫌がらせでも、俺にしてみれば転校が
かかっている（かもしれない）喫茶店だ
悪いが、痛い目にあってもらおう

『お客様』

翠屋で働いているときのようになにをかける

「なんだ？・・・へえこんな子達もいたんだな」

「結構可愛いな」

舐めるような視線が俺達にまとわりつく
気持ち悪かったらありやしない

「お客様、足元をお掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

「掃除？さっさと済ませてくれよ」

二人が席から立ち上がる

『ありがとうございます。それでは――』

「ん？何で俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて」

『くたばれやああ！！！！！！』

「ごばああっ！」

バックドロップ終了

これで夏川先輩は本日二度目の脳天痛打である

『アキちゃん、追撃！』

「ぐぶわっ！」

「あ、ごめんなさい」

事故を装い、明久が夏川先輩の急所を踏む
これでさらにダメージが入る

「き、貴様はFクラスの吉井・・・！まさか女装趣味が――」

しぶとく生きている夏川先輩
仕方ない、応援を呼ぶか

『この人、私の胸を触りました！』

胸を隠すようにうずくまりながら叫ぶ

「ちょっと待て！バックドロップするために当ててきたのはそーー
ーぐぶわぁ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

痴漢退治という大義名分で雄二登場

「何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこっちだろ！」

夏川先輩の替わりに常村先輩が雄二に食って掛かる

「黙れ！たった今、コイツはこのウェイトレスの胸をもみしだいて
ただろうが！俺の目は節穴では無いぞ！」

すまん

正直節穴だと思う

「ウェイトレス達。そっちで倒れている男は任せたぞ」

「え？あ、はい。分かりました」

明久が返事を返す

それにしてもどうするかと明久を見る
すると、明久は秀吉に渡されたブラを夏川先輩の頭にくっつけた

・・・瞬間接着剤で

「さて、痴漢行為の取調べのため、ちょっと来てもらおうか」

一方、雄二は指を鳴らしながら常村先輩に近づく
教室に連行して、じつくりと嫌がらせの目的を吐かせるつもりだ
ろう

「くっ、行くぞ夏川！」

状況を不利と見て、逃げ出す常村先輩

「こ、これ、外れねえじゃねえか！畜生！覚えてろ変態め！」

いつの間にか復活していた夏川先輩は頭にブラをつけたまま逃走
した

・・・端から見るとお前のほうが変態だぞ？
っとそれどころじゃない

『「逃がしません（すか）！追いますよ（追っぞ）アキちゃん！」」

慣れた口調で俺と雄二は明久を促す

「了解！でもその呼び方だけは勘弁して！」

二人追い、俺たち三人も廊下に出る

「ところで、ここの会計は？」

『後で、俺が出しておく！いいから早く行くぞ！』

『「明久！奴等は四階に逃げたぞ！」」

人のごった返す廊下で、俺達は叫ぶ

「ごめん！やっぱりアキちゃんをお願い！なんだか周囲の視線が刺さるんだ！」

その言葉を聴き雄二と目が合い・・・再び頷きあう

『「わかった！吉井明久ーもとい、メイドのアキちゃん！」』

「キサマら絶対ワザとだな！」

何を言う

あたり前だろ

それにしても四階ということは三年の教室か

俺達にしてみればアウェイだ

気をつけないとな

と、常夏コンビがある場所に入っていたそこは・・・

『三ーAに入っていたぞ！こっちだ！』

常夏コンビに続き、教室を暗幕で覆っている三ーA

迷路風お化け屋敷という看板を立てた教室へと突っ込む

「いらっしやいませ。三名様ですね？」

「いや、五名だ。金は後ろの連れが払う」

流石だ雄二

ためらい無く後ろの人に会計を押し付けた

「では、恐怖の世界をお楽しみください」

係員の先輩が疑うことなく扉を開けた

俺達は嘘がばれぬうちに急いで中に飛び込む

『二人とも気をつける。暗闇の上に奴等が先に入っている。待ち伏せや奇襲の可能性があるぞ』

「そうだな、連中がどんな罠を用意しているか分からん」

ダンボールやパーテンションで作られた道を歩く

明かりは足元の小さなライトだけ、捕まえるところか奇襲に気づきにくくなる

「気をつけるよ、女装趣味の偽メイド」

「う、うん。気をつけないと、気をつけないと、気をつけないと・・」

周囲を警戒しながら歩く俺達
それにしても明久、女装趣味にされてることはいいのか？

「気をつけないとー」

バツ！

俺達の目の前に突然何かが現れた

そいつは今まで見たことが無いようなお化けである

男子の制服を着ながら、坊主で、中肉中背で――頭にはブラをつけていた

「へ、変態だ！」

『「どつちもな」』

変態×2に突っ込む俺と雄二

「ここまで追ってくるなんて、しつこい連中だぜ！」

夏川先輩が奥へと走り出す

この先に常村先輩が待ち伏せしてる可能性もあるが、様子から見

て鉢合わせのようだ

「逃がすか！必殺アキちゃん爆弾を食らえ！」

「雄二、その技はやめよう！名前を聞く限り一番の被害者は僕のようないがする！」

『そうだが、第一ここは四階だ。間違えて窓から落ちてみる、捻挫程度じゃすまないぞ』

明久の後頭部を思いっきりつかむ雄二にツッコム

「今だ！壁を倒して閉じ込めろ！」

どこからか、常村先輩の声が聞こえる
まずい、身動きが取れなくなる！

『脱出だ二人とも！』

「それしかないね！」

追撃をあきらめて入り口に引き返す

「…………あれ？壁が倒れてこないね」

「はったりか！あのモヒカン野郎…………！」

もう既に夏川先輩の姿は見えない
捕獲は無理か……

携帯を取り出し、時間を見る

・・・げっ！

『すまん！俺、三回戦があるからもう行くわ！』

俺が入った関係で明久達の時間もずれているようで、俺の後に二人がたたかうことになっている

「何？もうそんな時間か？・・・仕方ない。悔しいがここは一旦戻るとしよう」

バタバタ過ぎて、召喚大会どころかバンドにも集中できない

『あいつらのせいで、危うく棄権になるところだったな』

少し早足になりながら入り口へと向かう

「・・・あ！さっきの無銭入場客！」

『げっ！』

「走るぞアキちゃん！」

「ああもう！今日はこんなのばかりだ！」

早歩きから走って俺は会場へ、明久達は教室へ戻っていった

第二章 第六話 坊主、変態と化する（後書き）

呼んでいただきありがとうございます

今回は、感想にあった

「台詞の前に名前があると台本みたい」

ということがあったので、ために台詞の前に名前を入れないでみました

一ヶ月ほど様子を見て、この方がいいという感想があったらこのままで行きたいと思います

感想のほうお待ちしております

第二章 第七話 召喚大会三回戦！そしてまたもや・・・

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください

「喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

1 可愛らしさ 2 統率力 3 行動力 4 その他（）

また、そのときのリーダー候補を挙げてください」

新炎良太の答え

「4 その他（一つに絞れなかったため、意見）

まず、重要なのはウェイトレスのリーダーということではなくリーダーを決めると考えるべきだと思います。

ウェイトレスのリーダーと言うと可愛らしさも必要、と考えがちですが実際は指示をしっかりと出すために行動力が必要です。

しかし、それだけでは周りについてこない場合もあり、ここで統率力も必要とされます。

リーダーを決める場合、この二つを優先し、これに可愛さがあれば文句の付け所がありません。

もし、俺が選ぶなら一人ではなく行動力、統率力それぞれに特化又は両方水準以上の人を選びます

候補

霧島翔子（あまり喋るほうではないが行動力が凄く高く（あることが絡むとそれが更にあがる）、統率力も高い）

島田美波（こちらにも行動力が高く、Fクラスを纏めることも可能

な統率力がある)」

教師のコメント

なるほど、勉強になります

二人とも統率力と行動力があり、可愛らしさもありますね
それにリーダーは一人、という前提を覆す考えもなるほど、
思います

土屋康太の答え

「1可愛らしさ 候補・・・姫路瑞希&島田美波」

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね

『はあ・・・はあ・・・はあ・・・』

「来ましたね」

急いで会場に行くと対戦相手は既に待っており、立会いの志藤^{しづ}先生が待っていた

三回戦から一般公開ということで一般の人の姿が観客席にちらほら見える

三回戦の種目は現代社会だ
さて、対戦相手は・・・と

「来ましたね・・・お姉さまに近づき、試召戦争でお姉さまとの勝負に水をさした愚か者が・・・」

・・・Dクラスの清水美春とその友達だ
そして清水からは黒いオーラが

『あー・・・清水は男嫌いだったか。しかもあっちの気ありで』

俺がボソツと呟いた言葉に清水のダークオーラが俺に突き刺さる

「は、始めてください！」

それを感じたのか志藤先生は焦りながら試合開始を促す

「『サモン！』『』」

三人同時に召喚する

会場の上にてくるのは御馴染の改造制服に素手の俺の召喚獣

軽鎧と西洋の剣の清水の召喚獣

美波のような軍服にこちらはクレイモアと呼ばれる両手剣の清水の友達の召喚獣だ

そして、俺達の頭上に点数が表示される

Dクラス	清水美春	&	Dクラス	野中知子
現代社会	268点	&		105点

・・・はい？

表示された点数を見て思わず

見間違いかと目を擦り、もう一度見るという動作をしている間に俺の頭上にも点数が表示される

Fクラス	新炎良太
現代社会	274点

・・・やはり見間違えじゃ無いみたいだ

『えーと・・・清水さんDクラスだよね？何でAクラス並の点数？』

「お姉さまへの愛とお姉さまに近づく愚か者を倒すためならこのくらい当然です」

驚きでいつもの台詞を言えずにした質問にダークオーラを更に増大させながら清水は答えた

速攻で終わらせて店の手伝いをしようと思つてテストに力を入れ
といてよかった、とこの時本気で思つた

そして俺の召喚獣は腰から玄武刀と白虎刀を出し
構え「やああー!!」

構える直前に清水の召喚獣が突っ込んで来た
別に卑怯なんて言わない

だつて試合開始の合図は出されてるのにのんびりしてたこっちが
悪いのだから

『ぐー!?』

それを剣をクロスさせて受け止める
互いに力は互角

清水は押し込めず、俺は押し返せない
このままだともう一人の「もらった!」

『あぶっ!』

考えてるうちにもう一人が後ろから切りつけてくるのを清水の剣
を滑らせて左に避ける

そのついでに一回戦の時みたく同士討ちしてくれれば

なんて思っていたが二人は互いの武器をぶつけ合い、それで同士
討ちを免れた

その隙を逃さずにもう一人の方の召喚獣の後ろに回りこむ

『せい!』

「きゃ!？」

「くっ!」

その背中を蹴り、清水の召喚獣にぶつけて体制を崩す

『はあ!!』

少し開いた距離を踏み込み

散沙雨で二人同時に戦死を狙う

「甘いです!」

が、清水は友達を蹴り、その衝撃を利用してかわす

『なら!』

俺は清水との一対一に持ち込むために体制を崩したままのもう一方に追撃をかける

『魔人剣!』

間合いを詰めながら魔人剣を放ち、それと同時に瞬歩で相手の背に回りこむ

「え!？」

相手は俺が消えたのに驚き、その間に魔人剣が相手に襲い掛かる
相手は防ぐ暇もなく魔人剣が当たり、それとほぼ同時に俺の剣も
相手の頭部を貫いた

『まず、一人』

そう呟き清水の方に意識を向ける
しかし、先ほど飛んだ先に清水は居ない

『何処だ？』

会場は身を隠せる場所なんか無い
そう考えつつ見渡そうとすると

「油断・・・大敵です！」

『くっ！』

いつの間にか清水が俺の懷に飛び込んで頭部を突いてきた
それを首を曲げてかわす

『せいや！』

そして、そのまま踏み込んで、すれ違いざまに斬る

「やりますね」

『清水もな』

本当に試召戦争を殆ど体験してないのか？

でも今ので50点分くらいは削れて清水の残点は218点になっている

「いつまでも貴方みたいな愚か者と戦いたくありません。一気に決めさせてもらいます！」

『いいぜ、俺も少し急ぎたいからな』

それと同時に俺達は互いに突っ込む

『はっ！』

「やあ！」

正面からぶつかり再び鏖迫り合いになる
甘いな

『ふっ』

「きゃ」

瞬間的に力を抜いて相手の体制を崩し足払いをかける
尻餅をついた召喚獣の頭部を貫き、清水も戦死になる

「勝者、新炎良太！」

それを確認すると志藤先生は俺の勝利宣言し、観客からは拍手を受ける

俺はそれに手を振って答え、ステージを降りて、喫茶店へと戻った

後ろから聞こえてくる清水の罵声を聞き流しながら・・・

『たっ だいま』

「おお良太。三回戦はどうじゃった？」

喫茶店に戻ると秀吉が迎えてくれた

『ああ、勝つて来たよ』

「ならば、こっちの建て直しを手伝ってくれんか？」

秀吉が申し訳なさそうな表情で言う

『そうだな。となると一度失った客を取り戻すために何かインパクトのあることをする必要があるか・・・』

まあ、案自体はあるけどそれはあいつ等が戻ってこないと無理だから・・・先にあれ作っとくか

『おい、康太』

「・・・何？」

俺が呼ぶと厨房から康太がでてくる

『実は・・・が欲しいんだけど、あるか？』

「・・・（コク）」

頷くと同時に何処からか俺が頼んだもの・・・布が渡される
そして、鞆から裁縫道具を出し

『サンキュ、康太。後でこれを使った良いものを見せてやる』

さて、一気にやりますか

気合を入れると原作の康太並のスピードで裁縫を始める

『うし、終了』

目的の物が完成したそれとほぼ同時に

「ただいま」

明久達も戻ってきた

『おつかれ。思ったより早かったな』

「うん、実はね・・・」

どうやら三回戦は不戦勝だったらしい

その理由は食中毒との事だ

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさかうちの店でハズレを引いた不幸な客じゃないだろうな？」

「そうだな。一度失った客を取り戻すためにも、何かインパクトのある物をやる必要があるそうだな」

思考しているといつの間にか雄二が先ほどの俺と同じことを口にしていた

ここで今の教室を確認する

空席だらけ

悪評の元は成敗したが、一度流れた噂はどうしようもない

そして、客を取り戻すにはインパクトのある物をする必要がある

って所だ

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とこれでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大の

はずだ」

そう言って雄二が取り出したのは刺繍も見事な水色と朱色のチャイナドレス

・・・なんで持つてる、と言う突っ込みは野暮だろうか？

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトはあるじやろうな。コレを宣伝用に――」

確かに瑞希や美波が着たらインパクトは絶大だろう

王道だが、それだけ効果が期待できる作戦だ

・・・瑞希のチャイナドレス姿を他の野郎の目に晒すのは躊躇われるが

「ああ。コレを――明久と良太が着る」

おお、それは別の意味でインパクトがある

「ちょ・・・！お願い許して！メイド服の次にチャイナまで着たら、きつと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

明久は必死になって止め

『別にいいぜ。でも俺のサイズあるか？それにバンドもあるからあまり手伝えないけど』

俺は乗り気になっていた

しつこいようだが転校がかかっている（かもしれない）んだ
店を持つ直すのになりふりかまってるられるか

・・・最近女装が楽しくなってきたのは気のせいだ

と思いたい

「冗談だ。これは良太と秀吉と姫路と島田に着てもらっ

そう言いながら雄二は何故か俺のサイズのチャイナドレスを取り出して渡した

・・・まさかマジであるとはしかもパットつきで

「あ。なんだよかった」

「ワシが着るのは冗談ではないのかのう・・・」

秀吉はチャイナドレスを持って溜息をつく

あきらめる秀吉

雄二は知らんが明久は本気と書いてマジと読むほど本気だ

「たっだいまゝ！って、なんだ。リョウと吉井ってばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ・・・残念です。良太君のメイド服可愛かったのに・・・」

「お兄ちゃん。葉月もう一回みたいな」

と三人娘が戻ってきた

明久は顔を少ししかめている

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ？」

明久がにこやかに笑いかける

・・・目は笑ってない

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げのために協力してもらおうぞ」

俺と明久は二人を逃がさないように、チャイナドレスを持ち退路をたつ

少なくとも美波は逃げようとするだろうし

「な、なんだか三人とも、目が怖いですよ・・・？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・」

若干引き気味の二人

だが、残念だが逃げ場は無い

「やれ、二人とも！」

『あいよ』

「オーケー！」

雄二の言葉に俺は瑞希へ、明久は美波に向かう

『すまん瑞希。出来ればコレを着てくれないか？』

「うん、いいよ」

『やっぱ嫌だよな・・・へ？』

「いまいいよって聞こえ・・・たよな？」

『瑞希、今いいよって・・・』

「うん。良太君の頼みなら断れないよ」

・・・そんな笑顔で言われたら恥ずかしいじゃないか

俺は赤面した顔を見られるのが恥ずかしくて明久達のほうを見る

「へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あつ！マジすんませんでした！自分チョーシくれてましたっ！」

チャイナ片手に美波に迫った明久が腿↓腹↓顎のコンボを受け、土下座していた

『「弱いな、お前・・・」』

その姿に思わず呟いた言葉が雄二とかぶる
「やっぱ雄二とは気が合うな」

それにしても明久

お前、あんだけ雄二と一緒に。。。のに・・・

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりすることは無い、って言ってたと思うけど」

予想通り、美波が渋い顔をする

「店の宣伝のためと、良太と明久の趣味だ。二人はチャイナドレスが好きだよな？」

急に雄二に話を振られる

・・・ってええ!?

いや、確かにチャイナドレスどころかコスプレは大体好きだけど・

よし、ここは明久と同じようにうまく茶を濁そう!!

「『大好——愛してる』」

「・・・お前等は本当に嘘のつけない奴等だな」

・・・あれ?お茶を濁そうとしたら盛大に台詞の選択間違えた?

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「・・・言ってくればお家でも着てあげるのに・・・」

美波が明久が持っていたチャイナドレスを手取る
というか瑞希さん?ボソツと言った言葉はマジですか?

「お兄ちゃん、葉月の分は?」

「え?葉月ちゃんも手伝ってくれるの?」

「お手伝い・・・?あ、うん!手伝うから、あの服葉月にもちよう
だい!」

・・・?

「けど、ごめんね。気持ちはずれしいんだけど、葉月ちゃんの分は

数が――――」

『ここにあるぞ！』

「どうしたの？」

あ・・・つい

ここにいるぞ！！！！

のノリでやってしまった

『まあ、気にするな。ともかく、葉月の分のチャイナドレスはここにあるぞ？』

そういつて出したのはさっき作ったチャイナドレス

サイズは目算で、デザインと色は美波と御揃いの青にしてある
裾は長めだ

「わあっ、お兄ちゃんありがとうございます！」

葉月はそれを手に取り、礼を言うてくる

「サイズもぴったりです」の言葉に

『どういたしましふげらあっ！？』

そう言うと同時に何故か瑞希と美波からユニゾン攻撃が俺に放たれた

まさかの攻撃に避けることどころか防ぐことさえも出来ずに俺は
床に倒れる

「瑞希、首持つて、坂本は包丁持つてきて！5本もあれば足りると

思っから！」

「良太君、いつの間に葉月ちゃんの寸法を測ったのかな？かな？」

あれ？凄い臨視感を感じるよ？

というか瑞希の言葉に冷や汗が止まらないっ！

『待て待て！サイズに関しては目算だ！それに美波！数時間前も言っただけ包丁は刺さりどころが悪かったらそれだけで致命傷だ！！』

その言葉に瑞希と美波は疑った感じでも離してくれた
ふう・・・助かった

「それじゃあ、三回戦が終わったら着替えますね」

瑞希が時計を確認している

あ、そっいや二人は三回戦まだだったな

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

雄二の言葉に二人はハモる

「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」

一般公開で集まった人たちに宣伝するのが目的だろう

俺が試合したときより時間が経ってるからさっきより一般客の数も増えてるだろうし

かなり有効な手段といえる

「こ、これを来て出場しろって言うの・・・？」

「流石に恥ずかしいです・・・」

二人ともチャイナドレスを手に困った顔をしている

メディアも含めて大勢の人がいる中、その格好で動き回るのは恥ずかしいのだろう

でも、瑞希（と俺）の転校がかかってるんだ
なんとしてもやってもらわねば

「『二人とも、お願いだ』」

そう言つて頭を下げる

瑞希のためだけじゃない

これは俺の為に二人に頼んでるんだ
それなら頭を下げるのは当然だ

・・・明久は自分の我が侘だと思つて頭を下げてると思う

「二人とも・・・お前等は本当にーーーーチャイナが好きなんだ
な・・・」

あえてそれも否定しない
だつて事実だし

「もしかして吉井君、私の事情を知つて・・・」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、
瑞希？」

瑞希の言葉を遮り、美波が了承をくれる

「あ。は、はい！これくらいお安い御用です！」

瑞希も快諾してくれた

「それならすぐに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分達の所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

瑞希と美波がFクラスであることが人の口にあがれば、喫茶店の宣伝とFクラスのレベルのPRという

二つの目的が果たせる

一石二鳥だ

あ・・・

さっきの試合で俺も宣伝しとけばよかった・・・
次からは宣伝しよう

「オツケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

二人はチャイナドレスを抱えて教室を出て行く
あつちは任せておいて大丈夫だろう

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「ちょ、ちよつと秀吉！ここで着替えるの！？きちんと女子更衣室で着替えないとだめだよ！」

『秀吉。このクラスにはこいつ含めお前の着替えを見ただけで鼻血

を出す奴が最低二人居る。店を汚したくないし、男子更衣室で着替えてきてくれないか？」

教室で着替えようとした秀吉に俺と明久のストップが入る
それにしても明久

秀吉は男なのに女子更衣室で着替えるように言うのはどうしてだ？

「・・・最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじゃないが」

「『気のせいだ。秀吉は秀吉だろう』」

「うん。二人の言うとおりだよ。秀吉は性別が秀吉で良いと思う。男とか女とかじゃないさ」

「『・・・俺が言ったのはそう言うことじゃない』」

ああ、コレが第三の性別秀吉の誕生か・・・

「んしょ、んしょ・・・」

「・・・・・・・・・・！！（ボタボタボタ）」

「は、葉月ちゃん！君もこんなところで着替えちゃだめだよ！ムツツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

『つつか康太、お前いつの間に来た！？』

「・・・俺の嗅覚を舐めるな（ガクッ）」

大量に出血しているはずなのに、鼻を押さえている康太の顔は・
・心から幸せそうだった

第二章第八話〜ライフ〜（前書き）

こんにちわ

投稿時間は深夜ですけどそれでもこんにちわ

最近バイトで覚えることがいっぱいであせってる作者です

うう・・・言い訳なのは自分でも理解してるけど、フロアからキッチンに移動はまじできついです・・・（しかも一年くらい居た）

まあそれは置いといて

バイト上がりでオリジナルの部分を約四時間で仕上げた作品ですが
どぞ〜

第二章第八話　ライブ

「たっ だいまー」

「ただいま戻りました」

お、この声は瑞希達か助かった！

『おかえり。二人とも疲れてるところ悪いが、フロアに回ってくれるか？』

二人が試合に向かった後、俺達はチャイナドレスに着替えた俺と秀吉、葉月をつれて校舎内を歩き回った

最初は余り効果はないように思えたが、徐々に客は増えてきて、二人の試合が終わったと思うあたりから席が埋まり始めた
今のところは順調だ

「良かった。だんだん持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えてきてるんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろっね」

いつの間にかきていた明久が言う

そっぴや俺と明久はハズレを引いたから知らないが、みんなの反応を見る限り飲茶の出来は相当な物みたいだ
だんだんチャイナ目的以外の客も増えてきているようだし

『それじゃ、二人はウェイトレスを頼めるか?』

「うんっ」

「オツケー」

チャイナドレスの裾を翻し、二人は注文表とペンを取りに行った瑞希のチャイナドレス姿を人に見られるのにまだ抵抗があるが、これで客も増えるだろう

・・・野郎たちがいやらしい視線で瑞希を見ているのを見ると正直そいつ等をぶっ飛ばしたい所だがここは我慢我慢

「君。注文をしても良いかな?」

『・・・あ、はい。お伺いいたします』

ぶっ飛ばしたい衝動を抑えていると、近くの席から声がかかる
思考と声を仕事に切り替え、注文表を構える

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

『はい、本格ウーロン茶と胡麻団子ですね』

「ああ」

メモを取り、注文の確認の為にお客様に顔を向ける
・・・あれ?教頭の竹原先生だ

『かしこまりました。少々お待ちください』

「それとききたいことがあるんだが、いいかね？」

『はい、何でしょうか？』

厨房に向かおうとする足を止め、振り返る

「このクラスに吉井明久と神炎良太という生徒が居ると聞いたのだが、どの子かな？」

何故か俺の名前を出すところで、警戒したような表情をしていたもっとも僅かしか表情が変わらなかったので気のせいかもしれないが

『吉井明久はあちらのウェイターで、神炎良太は私ですが・・・』

俺は不思議に思いながらも先生の質問に答える
明久はともかくとして、俺に何のようだ？

「ああ、そうかい。彼が吉井君（笑）で君が神炎君か」

『あの、教頭先生。生徒というか人の名前に（笑）はおかしいと思います』

「ああ。それはすまない。だが、私はどうしても教え子である彼のことを（馬）
とは呼べなくてね」

『あの、明久は職員室でなんと呼ばれてるんですか・・・』

いや、聞かなくても分かるが

（馬）なんて一つの単語しか浮かばないし・・・

それにしてもさっきの俺を見る目
一見変わらなかったけど

俺が神炎良太と知った瞬間に警戒したように見えた
こんどは・・・見間違いなんかじゃない
もしかして、学園長との会話を聞かれたか？
いや、あの時は防音結界を張ってたからそれは無い
とすると・・・

「リョウ、厨房の土屋から伝言。茶葉が無くなったから持ってきて欲しい、だつて」

やり取りの合間に思考をしていると、用意を終えた美波が戻ってきていた

「ん、了解。すみません先生。失礼してもよろしいですか？」

「構わんよ。特に用があつたわけではないのでね」

「？そうですか・・・」

用があつたわけじゃない？

ならなんで俺と明久が誰かを聞いてきたんだ？

それに、用が無いのなら何で俺を警戒するような顔をした？

・・・まさか

「リョウ、土屋が急いで欲しいって言つてたわよ？」

「あいよ」。あ、美波。茶葉を持って来たらそのままバンドのほうに行くから皆に伝えといてくれ」

まあ、いいか

良く分からないけど、先に用事を済ませるとしよう

旧校舎を歩き、ストックがおいてある空き教室に入る

『あ、数聞き忘れた・・・』

まあ、コレ位持っていれば良いかな？

「マスター、この学校に転移反応です」

『は？』

茶葉を取ろうとしたら、インフィニットからの転移の報告
しかも場所がこの学校・・・

『数は』

「片方が16」

『片方？転移反応が二つもあったのか？』

「はい。それとは別の場所に無数の転移反応があります」

無数？

『結構な団体さんが来たようだな・・・二つが争ってる様子はあるか？』

「無数の反応の方で魔力が感じられないくらい低い一つの反応を」

般的な魔力を持つ残りの反応の殆どが追いかけてる状態です」

仲間割れか？

いや、それなら抵抗すればいい話だ

でもインフィニットの言い方だとただ逃げてるように聞こえる

『・・・まさかな』

俺の頭の中にあるビジョンが浮かんだがすぐに否定した

あいつがここに来てる訳が無いし

いや、魔力がとことん低いってのは当てはまるけど

第一どうやって来るんだよ

まあもう片方は人数的に心当たりがあるけどな

「おい」

『はい？』

思考をしていると後ろから声かけられる

後ろを振り向くと俺と同年代くらいの男三人組が居た

そして、こいつ等は勝手に空き教室に入ってきている

『あの、ここは部外者立ち入り禁止なんで出て行ってもらえますか？』

学校じゃ見たこと無い顔だから他校の生徒だろう

ただ単に俺が見たこと無いだけかもしれないけど、うちの学校の生徒なら私服じゃないはずだ

「そうはいかねえ。 神炎良太とやらの用があるんでな」

そう言いながら一人が後ろ手でドアを閉める

『は？お前等にあつても俺にはないんだけど？』

時間を考えるとちゃっちゃと教室に茶葉を届けたい
だからどいてくんないかな

「お前にうらみはねえけど、ちょっとおとなしくしてくれや！」

そついうやいなや、拳で殴りかかってきた

・・・はあ

『時間が無いからやめてくんない？つて言つても聞かないよな。』
・

体のリミッターを外し、ゆらりと三人の中央に入る

『鬼神の力を・・・』

その言葉と共に手に一枚のカードを出す

『鬼符「瞬獄殺」！』

カードが視界を埋め尽くすほど光り輝き
無数の打撃音が響く

光が収まるとそこには地に伏した三人組と背中に殺と描かれた布を
羽織っている俺が立っていた

『・・・ふう。スペルカード。作ってはいたけど使ったのは久しぶ

りだな』

知識の中に東方のもあったから作ってみたらかなり使い勝手がいいのな

ちなみに俺の能力は「精霊に気に入られる程度の能力」

桔梗に気に入れたのはコレのおかげだったようだ

・ ・ ・ もしも桔梗に会わなかったら八雲紫にスキマツアーご招待♪
又は幻想卿へご招待♪されてたかもしれないかったな

・ ・ ・ うわゝ、笑えねえ

トリップ前の身体能力であの弾幕を避けきれるとは思えねえ・ ・ ・
つか妖怪から逃げ切れる気がしねえ・ ・ ・

再び思考の海に潜っていたときにドアがガラツと音を立てて開いた

「おい良太。ムツツリーニが茶葉のほかに餡子も急いで持ってきてくれと」

『お、雄二良いところに』

「ん？なんだこいつらは？」

教室の中で倒れている三人を見て眉をひそめる雄二

『よくしらんが俺に用と言っていきなり殴りかかってきたんでボコボコに叩きのめした。他校なのに俺の名前を知っていたところを見ると営業妨害が目的か、召喚大会を棄権させようって所だろ』

「なるほど。それじゃあ、こいつ等は俺が預かるとしよう」

雄二の目が妖しく光る

ああ、そついやこいつーを嬉々としてーーたな

『・・・壊すなよ？ま、俺はさっさと戻るわ。時間やばいし。あ、持つてく量はこんなもんで良いのか？』

「ああ。それじゃいつてくる」

雄二はそう言うと、三人を引き連れてどこかに去っていった

『・・・さて、店に戻るか』

俺は三人に向け黙祷すると、店に向かっていった

数十分後

『おゝ。入ってる入ってる』

「うー。月島緊張するよ」

「やば。俺も緊張してきた」

「あはは。私も」

「俺も・・・」

さて、俺は今野外専用のステージの裏に居る

あのあと、店にお茶と餡子を届けて、着替えるのが面倒だからB J
を装着

ついでにそれを応用し、服をバンド仕様にして
義之達と合流した後にここに来た

因みにバンド仕様とは曲の途中で服と髪の色等を魔力とプログラムで
変更しながらやるというものだ

・・・知ってる人は知ってると思うがコレはマクロスFでシェリル
がライブ等でやっていたことだ

完全にパクリだが気にしない

ようはどんな風に盛り上がり、どんな風に楽しむかだ

それが出来なきゃ・・・音楽は続かない

まあ、俺の持論だけだな

そう思うと同時に俺たちの前の演奏が終わる

「俺たちーーーーの演奏を聴いてくれてありがとうございました！」

前の奴等が最後に挨拶をしている

それが終わると同時に入れ替わりで俺たちも出ることになる

『さあ、いよいよだ・・・』

再び全員の顔に更に緊張が走る

俺は息をスウと吸い

『行くぞ！失敗なんて気にするな！演奏は楽しんだ者勝ちだ！音楽
は上手い下手じゃない。』

たしかにそれも重要だけが、一番重要なのは歌に・・・演奏に・・・
感情を込めることだ！

確かに俺たちの前の奴等は相当上手かったが、俺たちには関係ない！
観客に聞いてもらうのは技術だけじゃない、演奏に込めた心だ！』

そう、皆に緊張が走ってたのは観客の多さだけじゃない

俺たちの前の奴等の上手さでもあった

こいつ等はそれ以上の力を持っていると俺は思っただがなあ・・・
まあ、慢心でこれ以上成長できなくなるよりは謙虚なくらいが一番いい

成長は出来るときに、出来る限りする

それが大事だ・・・多分

コレも俺の持論でしかないから一般の反応が分からん

・・・まあいいや

『信じる！自分達はいいつ等よりも上手いと！そして、あいつら以上に演奏に、歌に心を込められると！』

「はい。・・・の皆さんありがとうございました！続いては・・・」

それと同時にステージでは司会が進行を始めていた

「おおっと！こいつは意外な大玉が出てきた！先月に起こった試召戦争で鬼神のごとき強さでFクラスを勝利に導いてきたFクラスの守護神！」

『行くぞ！何が起こつても気にするな！たとえ予想外の事態が起こつても自分の演奏は』

続けられる！心も込められる！たとえ何が起きてもそれを自分達のパフォーマンスだと観客に

思わせるんだ！』

そこまで言ったところで皆の緊張も殆どほぐれて来ているようだ
と、いつの間になかなかが俺の手を握っていた

やっぱななかでも緊張するか

気にするな

お前は上手い

そして、感情を、心を込めて歌を歌えている

だから・・・めいいっぱい楽しんで、盛り上がって、楽しむんだ

俺は心でななかにそう告げる

ななかは驚いて俺のほうを見たが俺はそれを見ずに

『さあ、行くぞ!』

そう言つてステージに出た

「そして、気づいてる方もいると思いますが去年軽音部の助っ人でギター、ベース、ドラム、そしてヴォーカルもやるという器用さを見せ付けた人物! 神炎良太とその親友達によるバンド! Cherry Blossomsです!」

と同時にずっこけかけた

なんで!? 何でばれてるの!?

俺念入りに変装したよ!?

「えゝ、本人は気づいて無いと思っているようですが、その時軽音部の部長がポロツと正体を暴露してました」

あの人かあああああああああああ!!!!!!

!!
つか唯たちが知らなかったのはただ単に一年にはそこまで情報が行ってないだけか!?

「……じゃあ、下手したら女装もばれてる可能性があるってことか？」

「うわぁ……」

「さて、めったに出来ない神炎いじりもここまでにして、演奏していただきますよう！」

観客の笑い声が響く中俺は何か立ち直り、マイクを手につ

『えゝ皆様。本日は演奏を聴きに来ていただいて、誠にありがとうございます。時間も……』

あ？二時間？……ゴホン！えゝ二時間と時間も大量に頂いておりますので、ゆっくり話を

入れたい所ですが、話を聞きに来たんじゃないで、演奏を聴きに来た方もいらつしやると

思います。なので、先に一曲やってからバンドメンバーの紹介等をしてしたいと思います。

それでは一曲目！射手座 午後九時 Don't be late！

直前にななかの腕に触れ

行くぞ、ななか

そう心の中で語りかけると俺は前奏を奏でる

それと同時にステージからはライブのときのような爆発音と共に煙が吹き出る

……これはうちの学校じゃないな

営業妨害の連中がこっちのミスを誘うにしてもここじゃ意味が無いとなると……杉並か！

ナイス！

『「重力反比例 火山みたいに光る fin
君は知ってんの あたしの beating heart」』

歌詞を歌い始めると俺とななかを光が包み、身に纏っている服が空
色と赤を使つた軍服に変わる
いい忘れてたがななかも俺と同じ仕様にしてある

『「妄想のギャラクシー 滑り落ちたらポイズン sea
何億光年 大胆なキスで 飛び越えろ ハラペコなの
次のステージにいきましょう」』

そこまで来ると服が更に変わり、俺はBJに
ななかは風見の制服を改造したBJもどきになる

『「持つてけ！ 流星散らしてデイト
ココで希有なファイト エクスタシー焦がしてよ
飛んでけ 君の胸に sweet
おまかせしなさい
もつとよくしてあげる アゲル
射手座 午後九時 Don't be late」』

ここで俺とななかの服が再び軍服に戻る

『「赦されないのは 偽りの君の運命^{ほし}
美貌という名の 儚い奇跡 一瞬の romantic 溶けたらす
ぐに it regrets
無重力状態 地に足もつかない 想いでも この宇宙^{そら}いっぱい
鼓動鳴らして愛をあげたい」』

そして、サビの所で再び服を戻す

単調だが、この演出を見たことが無い人は驚きでいっぱいだろう

『「持つてけ もぎだて pretty chance

無理に飾らないで その barrier 破つてよ

飛んだけ 魅力的な part 無限に広がる heart 揺らし
てあげる アゲル

乙女座生まれ ファツシネイト」』

「・・・！」

そして曲もラスサビへ

「・・・えー！」

『「傷ついても…

The future of my love and life
is not gonna say good-bye！」』

「待てえー！！！！！」

「待てるかーーーーー！」

と、肝心な最後の盛り上がりという所へドドドドドドという走る音
と共に正面やや遠くに逆鬼ごっこが展開されていた
ついでにその展開とその声と追いかけてる人にはものっそー
ーーーーい見えがある

つか、いっぺん否定したはずのことが当たってるとか

・・・新しのフラグかよ

俺ははあ、と心の中で溜息をつき僅かな感想の部分の間にそこまで

走り、

立ちふさがる

ついでに皆とのアイコンタクトは万全だ

こんなこともあるつかと昔から練習しておいたんだ」

あ、ついでだから

『逆鬼ごっこなんてくだらないぜ！俺たちの歌をきけええええ！』

その言葉と同時に最後の部分へと突入する

『「持つてけ 流星散らしてデイト

ジカに希有なファイト エクスタシー 焦がしてよ

飛んでけ 想い届け speed

無限に広がる heart 揺らしてあげる アゲル」』

「え？・・・このむちゃくちゃな行動とその髪の色は・・・」

そこだけ聞くと俺の目の前に居た鬼のほうの奴等が

「いきなりなんだこいつは？貴様も土見稟の仲間か！」

そう言いながら殴りかかってくる

ふふっ、甘い甘い

俺は避けながら心の中でそう言いながら歌を歌い続ける

『「飛んでけ 時を越えてく

深さ自分次第

heart 揺らして 愛をあげる

射手座 午後九時 Don't be late」』

カチッ

歌い終わると同時に鬼の奴等の足元からまるで地雷を踏んだかのような音が聞こえた
そしてその直後に

ドッカーンッ！

とライブ用の煙が爆発した

・・・杉並

なぜこんなところにまで設置した

俺はそう思いながらシールドを瞬間的に張って、爆発から逃れた
無論・・・

『さて、いろいろ聞きたいところだけど理由は予測できるからいい。
とりあえず・・・久しぶり稟』

「ああ、久しぶり良太」

なんか変な再開をした稟も無事だ

『色々話したいことがあるかもしれないけど、それは後でな。俺あ
うちに戻らなきゃいけないし』

そっいつて俺はステージを指す
と同時にステージに戻る

「あ、良太！」

そして、俺はステージに上がると同時にマイクを口に持つていく

『さて、皆さんお待ちせいたしました！先ほどの爆発等は演出ですのでお気になさらなくて

結構です。さて、それではバンドのメンバー紹介をさせていただきます
ます』

さあ・・・

『それではまずドラム担当の・・・』

ライブはまだまだ始まったばかりだ！

第二章第八話〜ライブ〜（後書き）

はい。今回はマクロスFと7のネタでがんばってみました次は何の曲にしようかな〜？とか何のネタががんばって仕込もうかな〜？とか考えています

あ、感想とかにリクエストとかあったら書いてもらえるとアニメやゲームならがんばってネタに挑戦してみます！

・・・もし出来なかったらごめんなさい

・・・そして小説で使ってる気力をもっとバイトでの仕事を覚えることに回せと自分に言いたいです

ああ、でもバイトの先輩にもしコレを見られたら・・・・・・・・・・・・・・・・ガクガクブルブル・・・・はっ！？ごめんなさいちよつと飛んでましたあ、あとSHUFFLE！を入れて見ました基本が原作の本作品（？）ではクロスで絡めるのがオリジナルの部分だけという悲しいところ・・・

まあその分次回のオリジナルで再びクロス作品出てくるんですけどね！

まあ人数で察している方も居ると思いますがとりあえず

いらないヒントで間章・・・これほば答えやん

まあいいや

それでは！次はもつと早く更新できるようにがんばります！

そしてあわよくば書きだめをおおお！！

・・・うん、無理

では皆様また次回！

追記

あ、作者の能力を東方風にするとこうです「名作を駄文にする程度の能力」

第二章 第九話　ライブはまだまだ続く（前書き）

えゝまた一ヶ月も遅れてすいませんでした
修学旅行やらなにやらで忙しかったです
ではどうぞ

第二章 第九話　ライブはまだまだ続く

『さあ、バンドメンバーの紹介も終わったところで二曲目に行きたいと思います！』

俺がそういうと観客から歓声上がる

・・・盛り上がってくるの早いな

ま、盛り上がるのは良い事だ

転移してきた奴等も注目してくれるだろうし

そっぴや、さっき吹っ飛ばされた奴等・・・バーベナ学園親衛隊（多分）は後ろで伸びている

観客は誰も気にしていないが・・・

『曲名はinnocent starter』

俺が言い終わると共に前奏が始まる

それと共に俺とななかの服がBJに変わる

さあて、あいつ等は気づいてくれるかな！

『「膝を抱えて　部屋の片隅　いつも不安で　震えていた

「本当」を知ることが恐くてトビラを閉じた

優しい嘘に　居場所を見つけて　夢の中に逃げ込んだ

誰も知らない　孤独の海を　深い蒼に染めてく

寂しさ隠す　一途な想い　君のココロを傷つけている』

サビの直前にさっきと同じように服が変わる

俺はBJとウイングを展開し、ななかは昔のなのはのBJになる

『「瞳の奥の秘密　吸い込まれそうな　笑顔の裏の真実に

柔らかな愛 僕が届けに行くよ
触れたら壊れそうな 温もりが今 過去を離れ溢れ出す
ずっと側にいるから 悲しい影に惑わないで」

そして、再び服を変更

今度は俺の昔の私服とななかはなのはの学校の制服サイズはぴったりを着ている

「にゃ!？」

と、ここで観客の向こう側

結構遠いところから驚愕の声が聞こえた

俺はそちらに眼を向けるとそこには俺の予想通りのメンバーが居た
それを確認すると同時に曲が二番に入る

『「子供のように ただ憧れを 求めるだけじゃ 何も見つからな
いくて

大切な物 見失うだけ 「アタリマエ」とか「普通」の中に 飾ら
ずある幸せを

守れる力 手に入れたいと まっすぐ 現在・いま・を生きてく
迷うことない視線の先に 浮ぶ答えは そう「1つ」だけ」

服を変更

今度は俺が昔フェイトのＢＪを男仕様にしたのとななかは先ほどと
同じＢＪを着ている

「え・・・？」

『「夜明けの朱い空に 虹を描いて 闇もすべて包みこむ
小さな勇気 言葉を超えて行く

未来が囚われても 遠く消えても この祈りは果てしなく

ありのままの気持ちを 君のもとへ 伝えたい」

最後の盛り上がり

ギターの部分完全に義之に任せ、俺はマイクを持つ

そしてななかのほうへ向き、ななかもこっちへ向いている

俺達は見詰め合ったままラストを歌う

『「始まり」くれた君に そつと囁く

二人だけの約束を

変わることはない永遠の魔法

未来が囚われても 遠く消えても

澄んだ風 - こえ - が覚えてる

僕の名前を呼んで

あの日のように笑いかけて」

俺たちがみつめあったまま曲は終わる

それと同時に観客からの拍手が届いてきた

『ありがとうございます！それではここで、雑談を少々・・・』

と、ここで少し雑談という名のあいっ等との会話が始まる

『実は・・・（よう、どうしてここが分かった？・・・なのは）』

「（ここに来たのはただの偶然だよ。この世界でSSSランク級の魔法の使用が観測されて、その調査の為に私達が派遣されたの）」

俺の問いかけに答えるのは

その周りには機動六課の戦闘可能なメンバーが集まっていた

『……（いくらSSSだったっていくらなんでも機動六課戦闘可能メンバー全員はやりすぎだろ。試験運用が始まったのが去年の10月頃だったか？）』

「（うんそうだよ）」

そう、原作と時間が俺の参入によってずれていて
原作イベントが全体的に早まっているのだ

機動六課は来年の四月までは試験運用が続くらしいけど

『……（しかもそのレベルの魔法使ったのは……大体二週間ぐらい前だぞいくらなんでも対応が遅すぎないか？）』

「（し、仕方ないやないか！機動六課の仕事とか溜まってる上に急に全員出動クラスの魔力観測。時空管理局は大慌てや！）」

おっとこれははやてか

しっかし時空管理局も人材不足が激しいか

まあ、もともと時空世界を管理しようってのが無茶なんだけども
しかも完全に才能頼みな魔法のみのがまた人材不足を加速させてる

銃とかの質量兵器を使えばもっと人材を増やすことが出来るだろうに

『さて、雑談はここまでにして次の曲に行きましょう！（ま、それは後で聞くよ。とりあえず）』

と、ここで服装を俺は普通のBJをななかはなのはの間の書事件の
ときのBJに変わる

「（え、良太君！？管理外世界での魔法の使用は原則禁止だよ！？）」

「

『曲名は・・・（ここは未発見とほぼ同じだ。それに時空管理局に従う理由も無い）』

さて、俺の元からの特技の一つを披露しますか

「（そんな事、時空管理局が許すわけないやんか！）」

『ETERNAL BLAZE（時空管理局が武力で俺を抑えに来るか？それでも良いぞ、三元帥の人たちとクロノに伝えとけ。俺はお前等が全戦力を持つて俺を取り押さえに来て構わないって）』

・ 完全に力任せな手段だけどここで時空管理局の法律に従ってたら・・・

今後の生活がつまらないじゃないか！！！！！！

他の世界に行けなくなるし、緊急離脱の手段として転移が使えないし！

更には！あいつ等を効率よく――事が出来ないじゃないか！！！
他の人からしたらしょうもないとか言うかもしれないけど俺にとっ
ては死活問題だ！

そんなことを考えながら曲が始まる

『「遙か^{そら}天空響いている 祈りは奇跡に」』

「え？」

「この声・・・」

「フェイトちゃん？」

なのは達は俺の時儀を使った歌声に驚愕している
もうお分かりかもしれないが俺の元からの特技、それは・・・

声真似

しかもフェイトの声優、水。奈。さんは俺の十八番だ
まあ、他のやつはコレより多少劣化してるが
本人やその親友が聞いたら多少違和感を感じるレベルだ

『「黒天―真夜中―の蒼に溶けて流れてく涙の粒
迷いなく包み込む温もりに出逢った
真っ白な雪のようにどこまでも素直なコトバ
鉄の羽根纏った 僕を動かしてく
傷つくたびに 優しくなれる
君のその笑顔だけ守り抜きたい
願いはひとつ」』

サビに入る

今度は変更の範囲を調整して俺は桃色の髪に騎士服・・・シグナム
とB J（男バージョン）

そして、ななかは金髪に騎士服・・・シャルのB Jに変わる

『「^{とき}時空を越え刻まれた悲しみの記憶
まっすぐに受け止める君は光の女神^{てんし}
あの日胸に灯った永遠の炎
深い闇解き放って 自由のトビラ開いてく
強く果てない未来へ」』

今度は間奏へ

その間に俺はザフィーラのB Jに変わり、ななかはフェイトのB J
（A・S時のやつ）をまとう
そしてその後すぐに二番目と続く・・・

『「冷たい緑の月に映し出すココロの夜
淋し気に呟いた『君のそばにいたい』」

真実と向き合うこと教えてくれた勇氣は
僕を駆け巡って希望に目覚めていく

触れ合う気持ち 離れないように

しっかりと抱きしめて 確かな想い貫いてゆく

銀の海に隠した空白のページ

君だけが知っている『本当』を僕に見せて

吹き荒れる切なさ生まれゆく誓い

もう何も恐くはないよ結んだ視線そらさずに

大切な『今』始める」』

さあ、僅かな間の後にラスサ「さっきはよくもやってくれやがった
なゴラア！！！」

ラスサビ前の演奏に入ろうとしたところではたちよりも更に向
こう

バーベナ学園親衛隊が倒れてた付近から聞こえてきた

そっちへ目を向けると、親衛隊全員が魔力を一つに集め巨大な魔力
弾を形成していた

俺たちも思わず演奏を止めてしまう

「え！？」

「嘘・・・」

「まずいで！」

なのはたちの驚愕の声が聞こえる

魔力弾はランクにあらずと＋SS級

親衛隊は100人近く

歌いながら魔力を吸収していて一人Cランクくらいまで減らしてただけど

よくここまで集まったなあ

ちなみにSHUFFLEの世界での魔法は科学ではなく本当にファンタジーとかその類の物である

人間の一般人はなのはの世界と変わらず平均がC〜Dだが、魔族の平均がAランク

神族は回復や防御の魔法に限り、A〜+Aランクとなる

まあ、それはおいとして

それを見た俺は急いで魔力を集める

『（インフィニット、もっと早く集まらないか！？）』

「（これ以上は無理ですマスター）」

『ちっ』

思わず舌打ちする

魔力だけで無理なら・・・！

『（気をあわせて咸卦にするぞ。一気に負担をかけるが、行けるか？）』

「（もちろんです）」

それと共に魔力と同じ量の気を魔力に混ぜる

そのおかげで俺の生成した魔力弾は魔力換算で一気にランクが上がった

これで、ようやく+Sか

実際二、三秒で我ながら良く集まったといったところだ
だけど、このままぶつけても向こうの魔力弾に負ける
このままだったら・・・な

『（インフィニット、魔力弾収束）』

「（了解）」

そう告げると共に俺の魔力弾が収束される
イメージとしてはなのはクロスファイアーの収束だ
そして、収束すると同時に

『（スカイシューター）』

「（シュート）」

放つ

それはまだ魔力を集めていた親衛隊の魔力弾に直撃し、貫いた
それははじけ飛び

俺たちのところまで爆煙が届いた

そして、それが晴れると

俺はアインと同じ姿に（勿論男のままで）ななかははやて（A・S
時の最終決戦のやつ）の姿に
なっていた

そして、演奏は続く

『「君が君でいられる場所

悪夢―まぼろし―にさらわれぬように
消えない雨の苦しみも

鍵を壊してぶつけてよ 隣にいるから

すべてを信じて

時空を越え刻まれた悲しみの記憶^{とき}

まっすぐに受け止める君は光の女神^{てんし}

あの日胸に灯った永遠の炎

深い闇解き放って 自由のトビラ開いてく

強く果てない未来へ

そう、きつとここから始まる・・・」

そして、そのまま演奏は終わる

よくみるといつの間にか唯たち軽音部メンバーも来ていた

ちなみに親衛隊どもはまた倒れてた

あいつら良くあれで無事だったな

ギャグ補正か？

『ありがとうございます！・・・（あ、なのは。いろいろな説明は後でするから。だから今日の文化祭が終わるまで待っていてくれよ）』

「（え？う、うんわかった・・・）」

『ーーーー（すまん。ありがとな）』

そのままライブは続き

約二時間経過・・・

『さて、もうお別れの時間がやってきてしまいました。今回俺たちの演奏を皆さんに聞いていただいてすごいいれす！』

いろんな曲をやった

ななかの曲やほかにいろいろなやつを

まあ、説明すると長いから省略するけど

『俺のクラスのニーフは中華喫茶をやっています！なんか良くない噂が流れてたみたいですけど、それは嘘です！飲茶とかおいしいのでぜひ来てください』

つと忘れてた

『あと、俺は試験召喚大会にも出てるのでよかったですら応援してください。ありがとうございます！』

そういつて俺達は舞台を降りる

後ろからは

クラスのお店に絶対行くよ

や

応援しに行くからな！

などと言った声が聞こえていた

勿論演奏に関する声もあったぞ？

よっし

さて、次は四回戦

相手は見えないけど

楽しんでいきますか！

第二章 第九話　ライブはまだまだ続く（後書き）

今回も見ていただいてありがとうございます！

そして、誠に申し訳ないのですが、次は今回よりも遅くに投稿するかもしれません

作者が学生な上にもうすぐテストでして・・・汗

しかも赤点ギリギリな作者はこれでまともな点数を取らないと留年に・・・

しかもそれが許されないんです・・・学校の事情で

以上の理由で次の投稿が遅れます

誠に申し訳ありません

第二章 第十話〜四回戦〜

約二時間

原作では明久たちが店のほうに精を出してた時間だ

俺はライブに時間をかけたがしっかりと宣伝はしてある

そして次は四回戦

次の相手は誰かと少し楽しみにしていた

三回戦での清水なんか本当に二回程度しか召喚バトルをしてないの
かってぐらいに強かったからな

でもさ

「それでは、四回戦をはじめたいと思います。出場者は前へどうぞ」

マイクを持った審判の先生に呼ばれ、俺と相手のペアはステージへとあがる

外部からの来場客の為に作られた観客席

そこは先ほどと違ってほぼ満席の状態だった

しかもよく見ると、先ほどでのライブにもいた人も見える

そんな状態で四回戦は始まるうとしている
でも、でもさ

「リヨウ、手加減はしないわよ」

「私も、良太君が相手でも遠慮はしないよ」

何で明久達はずれてるのに瑞希と美波はずれてないんだよ！！

確かに自分でも戦闘中毒かと思うくらいにはこの大会を楽しんでる
バトルジャンキー
よ？

でもさ、確実にFクラスが決勝までいけるように瑞希達は明久達に当たってほしかったなあ

それなら原作通りに明久達が勝ってただろうし

ま、他の奴が相手でも、今の、明久達ならAクラスでもない限りこの教科では負けないだろうな

・・・明久はちよつと心配だけど

ま、それは置いといて

観客席はほぼ満席

出場メンバーが全員Fクラス

この絶好の宣伝のチャンスを逃すことは無い

『さてと、すまん二人とも宣伝の協力を頼む』

この会場に訪れている野郎共の視線を集めている二人に声をかける

「や、やっぱり・・・恥ずかしい・・・」

服の裾を押さえながらうつむく瑞希

耳まで真っ赤である

相当恥ずかしいようだが、その姿が更に野郎の視線を集める

「り、リヨウもチャイナかメイド服着てきなさいよ！不公平よ！」

美波も顔を真っ赤にしている

なんか明久の時と違ってチャイナが増えてるが・・・まあいい

それにしても裾の長さで言えば普段の制服のほうが短い気がするが、どうしてこんなに恥ずかしがるのだろうか？

下着と水着の違いみたいなもんか？

『何言ってるんだ。俺がチャイナかメイド服なんて着てみる誰だかバ

レちまうじゃねえか。俺は女装してるときは別人で通してるからバ
レるようなまねは最低限しないようにしてるんだよ』

それにもし、瑞希の親父さんに見られてみる

俺だけじゃない、Fクラスの評価ががた落ちだ

・・・多分

「三人とも、そろそろ良いですか？」

先生がマイクを片手に苦笑している

「あ、はい」

「それじゃ、行くわよー」

大きく息を吸い召喚獣を呼び出す

「『サモン！』『』」

俺たち三人の声が綺麗にそろいそれぞれの足元に魔法陣が現れる

それだけで観客席から小さな歓声上がる

この試合から見始めた人にはコレだけで十分に珍しい光景だろう

実は三回戦でもあがっていたのだが、やはりほぼ満席だと小さなと
言えど結構大きく聞こえる

そして、本命の召喚獣が姿を現す

相変わらずのデフォルメサイズで、見た目は愛嬌たっぷりだ

毎度御馴染の点数は今だ表示されていない

四回戦からは特別に設置されている大型ディスプレイに点数が表示
されるため情報処理に若干時間がかかるらしい

「では、四回戦をー」

審判の先生が開始を宣言しようとして、

『ちょっと待ってください』

俺が止める

「……………はい？何かありますか？」

氣勢をそがれた形になり、若干長めの沈黙の後に先生は不満そうな顔をした

『すいません、少しマイクを貸してください』

そう告げると先生の返事を待たずにマイクを奪い取る

あ、宣伝の台詞どうしよう？

・・・ま、雄二のをそのまま借りる（パクる）か

『清涼祭にご来場の皆さんこんにちわ』

まずは挨拶から

その間に瑞希達に目で隣に並ぶように指示する

・・・通じるか？

なんとか通じたようで二人は俺の横で観客に向かい合う形で並ぶ

『ここに居る俺たち三人は、本格飲茶を提供するニーフの中華喫茶

で働いています。このように可愛らしい女子も一生懸命がんばっていますので、よろしければどうぞお立ち寄りください」

そういつて丁寧にお辞儀する

それにあわせて二人もお辞儀する

「「よろしく願いします！」」

ついでに召喚獣もペコリ、とお辞儀させる
これなら多少なりとも印象が残るだろう

『先生、マイクお返しします』

軽く頭を下げてマイクを手渡す

「―――ということだそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら、出場選手たちの居る二―Ｆに立ち寄ってみてください」

先生が苦笑いしながらも俺たちの宣伝に協力してくれる
お祭りの余興として乗ってくれるようだ

感謝感謝

「さて、それではＣＭも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。Ｆクラスの三人とも、良い試合をお願いします」

そう告げると先生は俺たちから少しだけ距離をとる

「リョウ、さっきも言ったけど、手加減抜きで行くわよ！」

美波が俺に対して笑みを浮かべる

一番強敵とされそうな三年生が受験のために殆どが参加していない今、この二人は優勝候補とすら呼ばれている

その笑みに余裕のつかないのは試召戦争の時に俺を見ていたからだろう

前の俺だったらまず絶望するだろうけどな

そのあとにどうすれば勝てるのかをなりふり構わず探すけど

『おう、かかって来い。返り討ちだ』

俺は笑みを浮かべて返す

けどな、美波

瑞希は確かにどんな教科でも強い万能キャラだ

俺も似たようなもんである

でもな美波

お前が一番苦手な教科は・・・

その時ようやくディスプレイに点数が表示される

Fクラス	姫路瑞希	&	Fクラス	島田美波
古典	399点			159点

『・・・・・・・・あれ？』

159？

確か美波は古典だと一桁じゃなかったか？

「召喚大会に備えて瑞希に教えてもらいながら古典を一番勉強したのよ！」

美波の声が響く

一桁からよくここまであげたんだが！

「甘いな美波！その程度じゃ俺と瑞希の一騎打ちはかわら——」

それと同時に俺の点数も表示される

Fクラス 神炎良太

古典
185点

[illegible]

んな馬鹿な！？

大体瑞希と同じ点数だったはずなのに！

先生！これ、表示おかしくないですか？！

俺はちょうど採点してもらった審判の先生に問いかける

「神炎君。途中から回答が一個ずつずれてましたよ」

今更聞かされた衝撃事実

ちっくしょー！

点数の計算分だけ終わらせて見直しもせずに後は寝てたのがここで裏目に出るなんて

二百点の差はでかいぞくしょー!!!!!!

くっ相方が居ないから明久達のように個人戦が出来ない
しかも二人同時はきつついか

瑞希だけが相手ならどうにでも出来るんだけど・・・

しゃあない、何とか隙を見つけ出して美波を先に倒すか

とすると一つの武器と四肢じゃちときつか

なら、最近考え付いたあれを使っっていくか

あれならうまくいけば二人同時に倒せるし

とその時

「おーい、神炎！」

『ん？』

観客席から俺を呼ぶ声が聞こえた

そっちへ視線を向けるとそこには同じクラスの小野寺（通称小野D）
が居た

『小野Dか、どうしたー？』

「お前が召喚大会の副賞のペアチケットで誘おうとしてる相手が島
田ー」

「ええっ！？り、リョウってば実はうちと幸せに・・・でも瑞希に
悪いし・・・」

「ーの妹っていうのはほんとかー？」

「「殺しましょう（殺すわ）」」

『おまつ！いきなり何言ってやがる！』

な、何だこのプレッシャーは

根も葉もない噂のはずなのに俺の生命が危険なことに！

『ま、まて二人とも俺は葉月をどうこうしようなんて思っではないない！』

「さつきは妙に仲が良いと思ったらそういうことだったのね」

「良太君。私というものがありません」

目が据わっていてやたらと恐い

妹の危機に立ち上がる優しい姉は今の俺にとっては殺人鬼に見える

「良太君にはお仕置が必要のようだね？」

『み、瑞希？』

にこやかに俺のほうを見ている瑞希の背後には阿修羅が見える

あの笑顔、きつと裏側は般若のような顔に違いない

「瑞希！リヨウの召喚獣をボコして！ウチはリヨウの本体をボコすから！」

「わかりました！」

「・・・私も」

『わからない！二人の言ってることが俺にはさっぱりわからない！』

！それにいつの間にか翔子の混ざってるし！審判！良いんですかね！？」

「ええと・・・霧島さん乱にゆ「いいじゃないか」学園長！？」

先生が翔子を止めようとしたところに何処からか学園長が現れたいつの間に・・・

「ただし、霧島がここでまけた場合は相方である木下は次の試合一人で戦ってもらうよ」

「・・・別に構わない」

翔子が俺の方を向いたまま答える

その目には殺意が見える

ひやりと俺の背中に冷や汗が流れた

「・・・サモン」

翔子も召喚獣を出し、ディスプレイに翔子の点数だけ表示される

Aクラス 霧島翔子

古典 387点

これで三対一

翔子の召喚獣は戦国の鎧に日本刀と完全に戦国時代の武装だしかし、なんか日本刀から変な妖気が見えるんだけど・・・

「行きます！」

瑞希の召喚獣が一瞬で間合いに迫る
ま、まずい

いつもの俺の点数と同じぐらいだからスピードも・・・っ！

『くっ、のわっ』

ギリギリの所で避ける

いつもより百点近く低いから動きが鈍い！

「リヨウ！おとなしく殴られなさい！」

『美波、それはいくらなんでも反則だろ！？』

俺に直接攻撃を仕掛けてくる美波

今のところは何とかなってるけど召喚獣のほうに翔子まで加わった
ら対処できない

てか今の美波に直接勝負で勝てる気がしない！

コレがギャグ補正というものか！？

「反則はありません」

更に審判の無慈悲な宣言が聞こえてくる

いいのか！？教育者としてそれでいいのか！？

思わずそんなことを突っ込みながらも俺と召喚獣は回避し続ける

「くっちょこまかと」

「待ちなさい！」

「・・・逃がさない」

『止まったらその瞬間やられてフィードバックで意識が吹っ飛ぶわ！』

俺はそう言いながらも三人の死角になるところにあるものをおいてゆく

「……？」

不意に翔子の動きが止まる

「どうしたんですか？」

瑞希が俺に攻撃をしながらたずねる

「……あれは何？」

翔子が指を指す

その先には

「……武器、に見えますけど」

「……でも耐久性はオブジェ並み」

翔子の召喚獣が俺がおいた物を切り付ける
するとそれは一瞬で切り裂かれ消えた

『ちっ、見つかったか。だが、もう遅い！』

俺はそう叫ぶと召喚獣の近くにあった大剣の形をしたそれをとる

「そんな物で攻撃が防げると思ってるの！」

キャラが変わった瑞希の攻撃を

ガキイン！！

「……………え？」

『これが……俺の秘策だ』

俺はにやりと笑いながら瑞希の大剣を受け止めた

「……………そんな」

『種は秘密ってな！』

「なら、こつちも！」

美波の召喚獣が俺が置いたサーベルを持って突き刺してくる

『甘い！』

俺はそれを避けるとサーベルを上から叩き切る

「なんで！？」

『言つたろ、種は秘密って』

まあ、実際は投影で魔力を通すまではただのオブジェ程度の役目を

果たさない武器を置いて

手に取ったら魔力を通して武器の硬さを上げるっただけだけどな
これならさっきのように瑞希達が持ってもただのオブジェを使っ
てるようなもんだからな

『さあ、行くぜ!』

俺はそれと同時に持っていた大剣を翔子に投げる
それと同時に手元に投合用ダガーを投影する

「・・・ふっ」

翔子はそれを軽くかわし、突っ込んでくる
俺はそれをつぶすようにダガーをすべて投げる

「・・・っ」

それを翔子は立ち止まり、日本刀で自分に当たる物だけを弾く

「やあ!」

俺が投げた隙を逃さずに瑞希が横から大剣を薙いでくる

『くっ』

俺はそれを前転で回避

あつぶね、紙一重だった・・・

そう思いながら前転しながら二槍の槍を取る

「そこ！」

前転直後に美波はサーベルで突いてくる
狙いは・・・胴体か！

さらに横に転がる

起き上がりながら振り向き、左手の槍で足を突く
それは飛んでかわされる

『は！』

それを逃さずに右手の槍を投合する
だがそれは胴をかするだけに終わる

島田美波 149点

今のダメージでディスプレイの点数が修正される
だが、まだ十点は動きを鈍らせるには至らない

「・・・はっ」

いつの間にか後ろに回っていた翔子が刀を振り下ろしてくる
俺はそれを

『・・・っ』

「・・・！？」

白刃取りで止める

あ、やば少し手の皮切れた
だけど！

『よいしょ！』

翔子の足元に潜り込むようにすべる
刀から手を離れた瞬間にナイフを両手に投影し、足元をくぐりぬける瞬間に召喚獣の両足を切る

霧島翔子 320点

結構深めに切ったはずだけどそれでも六十点ちよつと削るにすぎなかった

まずいな

無意識のうちに斬るのを加減してるようだが、今も百点近く削るつもりで斬ったんだけど、六十点でも十分に動きは鈍っている
それでも俺の召喚獣より早い

「これで終わりよ！」

潜りぬけた先には美波が待ち構えていた

正面から確実に当たるように胴を突いてくる

それを思いっきり蹴って軌道と体の進行方向をずらす

その先にはまるで俺が避ける方向がわかるように待ち構えてた瑞希がいた

『ちいっ！』

俺は地面に近いほうの脚で地面を蹴る

それにより更に加速して瑞希の足元を潜り抜ける

勿論足を切るのを忘れてはいない

姫路瑞希 329点

今度は七十点か

翔子より強めにやったんだけどな

やつは加減されちまうのはきつちいなあ

俺は立ち上がり三人と向き合う

すると、今まで沈黙していた観客席から大きな歓声上がる

『すげー連携だな』

「これでも瑞希とコンビネーションを考えてたからね」

「単純な動きしか出来ないなら誘いこむのが一番だから」

「・・・私は合わせただけ」

そっついながらも俺たちの緊張感は持続している

あとは何かしらのきっかけがあれば再び俺達は動くだろう

その瞬間ディスプレイの点が再び更新される

神炎良太 180点

おそらくは切った手の皮の分だろう

だが俺たちにとっては十分なキツカケだった

その瞬間俺と翔子が同時に飛び出す

俺の手元には突撃の途中で回収した刀

そして、翔子の召喚獣と接触する直前で一瞬だけ限界まで加速する

『幻浪斬!』

すれ違いざまに一度きり更に回転して二度斬る
すべてを胴に集める

霧島翔子 250点

今度はかなり削れた
このままならなんとかなるか

「やあ!」

安堵の暇もなく瑞希の大剣が振り下ろされる
俺はそれを横にステップして避ける
着地すると同時に一閃

「え!?!」

周りが気づくと俺の召喚獣が刀を振りぬいた形であり、瑞希の召喚
獣が膝をついていた

姫路瑞希 219点

一気に点数が削れる
生身なら確実に膝より下が無くなるだろう一撃は召喚獣では百点削
れるに過ぎなかった

『やっぱ勝負を決めるなら頭部か心臓・・・か』

俺が呟くと同時に無言で美波が背後から突いてくる
って背後が好きだな！

『とうとう無言で……』

俺が美波の方へ向くとその目には完全に殺意のみが浮かんでいた
それに恐怖した次の瞬間

「ふっ！」

『のわ！？』

美波が俺の目の前に現れて生身のほうに攻撃を再開したのだ
マルチタスク（平行思考）が出来なかったら今行われてる翔子と瑞
希の攻撃を捌くことは……って

『美波までくわわつのわ！』

美波までマルチタスクで両方の俺に攻撃してきた！？
ええい仕方ない！

『くっ』

「あ、なにすんのよりヨウ！」

生身の方の美波を羽交い絞めにして動きを止める
その間召喚獣は捌くことに専念する

『美波……』

「な、なによ」

俺は美波の耳元に口を近づけて・・・

『・・・ふう』

「ひゃん!？」

息を吹きかけた

それで美波は腰砕けになり、俺が話すとへなへなと座り込んだ
召喚獣のほうは棒立ちになっている

俺はそれを逃さず召喚獣の心臓に持っていた刀を突き刺す
これで美波は戦死となり

あとは瑞希と翔子が相手となる

「「良太(君)」」

のだが、二人からなんか炎が出ている
しかもプレッシャーが更に増した!？
何!？なんかしたつけ俺!？

直後二人の召喚獣は俺の召喚獣の目の前に現れ、二人同時に突きを
繰り出す

それをバックステップでかわす

前髪を何本か持ってかれた

こええええええええ!

ああもう!一気に決める!

俺は再びダガーを投影する

先ほどの倍の数を二人に投げる!

「……………」

ってなんかキャラかぶってる！

二人はまた自分に当たる物だけを防ぐ
だけどそれが致命的な隙だ！

俺は再び突っ込む

二人はそれに対応し俺に向かい、同時に、振り下ろす
俺は二人の間を走り抜ける

ガキーン！

二人の剣がぶつかり合う

俺は走り抜けた直後に刀と鞘を投影する

『これで、終わりだ！』

それを居合いの横領で二人の頭部を切る

二人はそれを避けられずにともに受け、戦死となる

「……………あ、神炎良太君の勝利です！」

それと同時に観客席からは拍手と歓声が飛んでくる
き、きつかったー

点数の差がでかすぎて投影を駆使しなかったら負けてたかも……

「卑怯者」

「酷いです、良太君」

『あー、すまん。でも必ず優勝するから勘弁してくれ』

何とか勝利をもぎ取ったのは良いけど試合前の事と試合中のことで責められていた

「（それはそうとリヨウ、本気で葉月に手を出すわけじゃないわよね？）」

『（大丈夫だよ。俺はロリコンじゃない）』

とりあえずそれで納得してもらおう
まだ美波の目は恐いが……

「あの、絶対優勝してね？」

『おう、任せとけ』

とりあえず優勝しないとまずいな

まあ、如月ハイランドのペアチケット自体は別に良いんだけど優勝しないと取引が成立しないからなあ

『お、盛況みたいだな』

「よかった、宣伝の効果があったみたいだね」

「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がない物ね」

教室に戻るとFクラスには結構な数の客が入ってきていたライブでの宣伝とさっきの試合での宣伝あとは雄二達も宣伝してくれてるだろう無駄にならなくて良かった

「お。あの子達だ！」

「近くで見ると一層可愛いな！」

「手伝いの小さな子も今日室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！」

「でも、青髪のロングの女の子がいないぞ！」

お客さんの中からそんな声が上がる
うんうん

チャイナドレスには男を惑わす効果があるよな

『さって、数少ないウェイトレスが固まっていたらお客さんが落胆し

「ちまっし、働きますか」

「そうだね、喫茶店のお手伝いをしないといけないね」

「そうね。ちよつと視線が気になるけど、売り上げのためにもがんばりますか！」

「・・・うん」

いつの間にか黒のチャイナドレス（俺の私物）を着た翔子も手伝いに入っていく

『よっし、やりますか・・・あ、いらっしやいませ！中華喫茶ヨ
ーロピアンへようこそ！』

俺もチャイナドレス（B）で生成（）を着て営業に精を出すことにした

第二章 第十話〜四回戦〜（後書き）

えー、こんばんわ

テストまであと一週間切ってるのに小説を書き上げてしまった作者です

まさか、原作を挟むとここまでスラスラ進むとは予想外でした
戦闘シーンは今回はがんばってます

てか疲れた……

今度は本当に一ヶ月以上かかるかもしれません
ごめんなさい

第二章 第十一話、召喚大会準決勝！対決常夏コンビ！……（前書き）

いつの間にかPV20万突破！

読者の方々にはいつも感謝感謝です

今回はキャラからお礼の言葉を……

『皆さん、このような駄文を！見ていただいてありがとうございます
す』

待て待て！自分でもそこは自覚してるが、自分が作り出したオリキ
ヤラ主人公にまで言われるとへこむぞ！

『勝手にへこんでる』

いいもんいいもん、俺はずっと隅でいじけてるもん

『さて、作者を隅に追いやったところで』

「改めまして、読者の皆様。この作品をよんでいただいておりますと
うございます」

「……今後も応援をよろしく」

『のわっ！瑞希、翔子いつの間に……』

「え？最初からいたよ？」

「……私も」

『そうか・・・まあいい。さてと、それじゃこれからも』

「『バカとテストと召喚獣』最強の親友！？」をよろしくお願
いします『「「

本編始まるよ〜

第二章 第十一話　召喚大会準決勝！対決常夏コンビ！〜

『さつてと、んじゃ準決勝に行つて来る』

「うん、頑張つてね」

「リョウ、負けたら承知しないからね！」

「・・・頑張つて」

『おう！』

あれから働くこと約一時間

準決勝の時間となる

決勝戦は二日目の午後だから今日行われる試合はコレでラストだ

ちなみに今の店の状態は満席

外には列まで出来てるぐらいだ

あのあと、雄二が、余裕で勝利してきて宣伝の効果が更に出たようだ

・・・明久の点数が原作と変わってなかったことをここに追記し

ておく

なぜ俺が知ってるのかというと雄二に聞いたからなんだけどな

相手はBクラスコンビだったらしいけど明久が相手の足止めをして

いるうちに

雄二が、明久もろとも、片付けたらしい

まさに雄二の一人勝ちだ

会場に向かいながら俺はようやく手に入れたトーナメント表を手
に相手に確認していた

『えーっと相手は……常夏コンビか』

あちゃー、こりゃ明久の活躍を奪っちまうか
……なんだろうどっからか

何を今更

って声が聞こえたんだが……

まあいいか

とにかく次で叩きのめせるならちようどいい
明日まで手間をかけたく無いからな

ここで一気に決める

えーっと次の教科は……

と、確認する前に会場にたどり着く

『あ、確認できてねえ。ま、なんとかなるっしょ。……さあて行
きますか!』

俺は軽く気合を入れると常夏コンビのいるステージへと歩みを進める

「お待たせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います！」

俺が到着するとほぼ同時に審判の先生のアナウンスが流れた
あつぶねえ・・・時間ぎりぎりだったみたいだ

「出場選手の入場です！」

格闘技の入場のように俺は入場する

俺の向かいには対戦相手である常夏コンビがいる

『先に言っておく。あんた達の思惑通りにはやらせない』

「んだと！」

「てめえ、先輩に向かって舐めた口きいてんじゃねえぞ！」

俺からの言葉に常夏コンビは速攻で乗ってきた

・・・あれー？

ここまで挑発に乗りやすかったけ？

まあいいや

ついでに戦う間敬語は面倒だからなくす

んなもんに気を回すのがもったいないしな

「それでは召喚してください」

更に挑発する前に先生に召喚を促される

しゃあない、後はなのは流のお話（肉体言語）で行くか

「『サモン！』」

三人の声が重なる

三人の足元に魔方阵が浮き出てそこから召喚獣が姿を現す

常夏コンビはオーソドックスな剣と鎧

原作とまったく同じ装備だ

そして、俺は

『Fクラス神炎良太いざ参る 常夏コンビよ、点数の貯蔵は十分か？』

久々の口上を述べ、今回は最初から投影でステージに武器を展開する
それと共にディスプレイに点数が表示される

Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
保健体育 265点 & 285点

Fクラス 神炎良太
保健体育 348点

俺の点数と投影での武器の展開の事は事前に聞いていたのかまったく驚きを見せない常夏コンビ

多少驚いてくれれば一気に決めたのに・・・

まあいい

『行くぞ！』

ナイフを腰に、手には大剣（召喚獣サイズ）を持って踏み込む
大剣の重さが無いかのような速さで常夏コンビの召喚獣を間合いに入れる

そのままの勢いで二体まとめて切るために斜めから大剣を振り下ろす
それを常村先輩が左に夏川先輩が右に分かれ俺の横をすれ違うよう
にかわす

と見せかけ二体とも左右からすれ違いざまに切ろうとする

『ちい!』

俺は大剣を振り切りそのままステージに刺すとそれを足場に後ろに
飛ぶ

空中で腰からナイフを抜き、体を捻りながらナイフを投げる

「くそっ!」

夏川先輩の声と同時にナイフは二体共の肩に刺さる

それと同時に俺が刺した大剣が二体に倒れてきた

「うぜえんだよ!」

蹴ったときの力で自身を支えきれずに倒れる大剣が俺の変わりに切
られる

大剣とナイフが魔力に戻るのを見ながら俺は最初に展開した所まで
下がる

常村勇作 234点 夏川俊平 253点

ナイフを再び腰に準備したとき点が更新される
思ったより減らないな・・・
んじゃ、次は

『投合重視で行きますか!』

牽制でナイフを投合する

突っ込んできていた常夏コンビはそれをすべて打ち落とそうとする

「のわっ!？」

「この野郎!」

ナイフを途切れさせずに投げ続ける
そして徐々変化を加えていく

「おわっ」

「くっ卑怯だぞ!」

『戦いに卑怯もクソもあるか!まだまだ行くぜ!』

ナイフだけではなく大剣や刀、槍など思いつく限りの武器を常夏コンビに投合する

『名づけるなら、ウェポンバレルフルバースト 投影武器全弾連続発射、ってか!』

なんか似たようなのをどつかで聞いた気がするけどまあいいや
常夏コンビは攻撃速度がMAXになる前に再び左右に別れ横から挟み込んでくる

なるほど、確かにこれなら同時に対処しないと厄介だ

更に左右に分かれてるから両手を使うような武器を投げれない

これで俺の投げれる物がナイフ、ダガー、片手槍、片手剣、片手斧、
双剣、矢に絞られた

だけだな

『まだ甘い!』

俺はその場に槍を刺し、それを足場に跳躍
体の向きを左側にいた常村先輩へ向ける

『トレース 投影、オン 開始

――経験、複写完了

――ロールアウト 工程完了。バレット 全武装、クリア 待機

――フリーズアウト 停止解凍、ウエボンバレルフルバースト 投影武器全弾連続発射'!!!』

瞬間的でなく、攻撃までに使える滞空時間をめいいっぱい使って投
影を行う

武装、着弾点、照準その全てをより正確にして、打ち出す

そしてそれは常村先輩の召喚獣に向かい、着弾すると同時に何故か
土煙が舞う

啞然としている周りを無視し、俺は夏川先輩と向き合う

『さて、これで一対一だ』

「てめえ!よくも常村を!」

そう言うと同時に夏川先輩は突っ込んでくる

俺は双剣を手に迎え撃つ

カキーン

鉄同士がぶつかり合う音が響く
鐔迫り合いを一瞬で終わらせ再び一閃

カキーン

また鉄の音が響く

今度は弾かれ、その反動を利用して
更に剣戟を繰り出す

カキンカキンカキーン

それにあわせ夏川先輩も反動を利用した剣戟で対抗してくる
しばらくその状態が続く

カキーン

『だーきつつー！』

思わずそんな言葉が漏れる

だってフィードバックがきつすぎんだよ！！

しかも向こうはそれが無いから集中力が続く限りはこれが無限ループになりそうだし

しかもそろそろ

「夏川！もうちょっと足止めしてるすぐにコイツをどかしてそっちに行く！」

「おう、わかった！」

げげ！やっぱりぎりぎりです外してたとはいえやっぱり耐久力がオブリ

エ並じゃすぐに突破されちまうか
しかも夏川先輩時間稼ぎに入っただけ・・・
ああ、もう！

『どつりや！』

一瞬

俺が瞬間的に体の回転を限界まであげて夏川先輩の剣を弾く
剣は夏川先輩の手を離れ、空を舞う
俺はもう片方の剣で夏川先輩の召喚獣の心臓を貫く

「よくも夏川を！」

俺が貫くのと常村先輩が囲みを突破してきたのはほぼ同時だった
俺は腰にあるナイフで牽制しながら一旦距離をとろうとする

「何度もやられるかよ！」

『グレイズ！？』

常村先輩はナイフをかするギリギリの所でかわしながら突っ込んでくる

まさかここで弾幕ごっここの技術を見るとは予想外

驚愕で一瞬体が止まる

僅か一瞬

だが、それが常村先輩にとっては十分な一瞬だった

「はあっ！」

『・・・っ！』

一気に間合いに踏み込んできた常村先輩の剣を髪の毛数本と皮一枚を犠牲にして体を後ろに

そらして避ける

そして、そのまま膝の力を抜く

そうすることにより上半身が一気に地面に落ちることになる

両手を着き、サマーソルトで相手の顎を蹴り上げる

そのまま倒立状態から直立状態に戻ろうとしたその時

ガクッ ガン!!

『痛ったー!!!!!!』

操作を誤り、肘の力を抜いてしまいステージに顔面からぶつかったのだ

勿論フィードバックで本体も痛い

神炎良太 300点

常村勇作 223点

何故か今のでナイフを刺したぐらいのダメージが入ってる……その間、常村先輩の召喚獣は顎を蹴り上げられて膝を突いているラッキー

『召喚獣に脳を揺らしても効果があるかは知らなかったけど、どうやら効果はあるようだな』

「くそっ動け、動きやがれ!」

常村先輩は何とか動かそうとしてるけど動けない
俺はゆっくりと近づき、剣を振り上げる

『コレで・・・終わりっ！』

そのまま剣を頭部に振り下ろす
これで俺の勝ちだ

「甘いな」

『え．．．？ぐわあああ！』

常村先輩が呟き

俺は気がつくと激痛に襲われていた
激痛を我慢しながら召喚獣を見ると俺の召喚獣の右腕が動かなかった
たはずの常村先輩の剣に貫かれてた
くそっ！演技だったのか！！

神炎良太 189点

今ので一気に点を逆転される

とにかく俺は召喚獣を一旦下からせる

慢心は負けを呼ぶと何処かの慢心王ギルガメッシュを見て学ばなかったのか俺は！

「勝利の直前の時ほど人は、油断する」

『今の俺をよくあらわしてるな』

今まで何度同じような手で危ない目にあっただか・・・・・・・・数え切れないな

俺には学習能力というものが無いのかボケ！

ええい、今はそれ所じゃない

右腕は・・・使えないか

なら左に片手武器

右には盾をつければ多少はましになるだろう

そう結論付け、右腕に腕にはめるタイプの鉄の盾を、左手には片手剣を持つ

見た目はまるでハンターだな

そう思いながら左手にナイフを再び投影

それを投げる！

「ぐわ！」

ナイフは常村先輩の頭部を貫く

よし、そのまま突っ込んで・・・・・・・・あれ？

「勝者、神炎良太君！」

俺が呆然としている間に先生が勝利宣言を告げる
それと共に観客席からは拍手と歓声上がる

『あっけないにも程がある・・・まさかあれは演技じゃなくて精一杯の反撃だったとか？それとも何か裏が・・・』

あまりのあっけなさに思考を始める

だが、確認の使用が無いんじゃないや考えても意味は無い
とりあえず予測はしておく

でも何かあったような気がするんだけどな・・・

そんなことを考えながらステージを降りて、教室に向かう

ステージ付近で明久達とすれ違った気がしたけど・・・まあいいか
そのまま教室へと戻ってきた

・・・のだが

『須川？どうした』

教室の前には須川が立っていた

須川は俺を見つけると駆け寄ってきて

「神炎！ウェイトレスたちが攫われた！」

衝撃の自体を告げた

第二章 第十一話　召喚大会準決勝！対決常夏コンビ！…（後書き）

こんにちわ　作者です

テスト中だというのに勉強の合間に息抜きで書き始めたはずなのに
気づけば既に日付が変わるほど集中してた事実

あー、これはもう赤点を覚悟すべきなのだろうか・・・

あと戦闘がパターン化してきたかも

今後のバトルもなんとかマンネリ化を頑張って防ごうかと思います
さて、今回は

『攫われた瑞希達、それを囲む不良共。そして、瑞希達に魔の手が
伸びる

次回　バカとテストと召喚獣　最強の親友！？　第二章 第十二

話　良太、再びガチギレ！？

次回も大暴れ！行くぜ、試獣召喚！！

第二章第十二話　良太、再びガチギレ！？（前書き）

あけましておめでとうございます

課題、バイトの二重のきつさのせいで投稿できず、申し訳ありませんでした

気力で何とか書き上げました。眠気のせいで意味分らないところがあるかもしれませんがどうか、気にしないでください
では本編どうぞ

第二章第十二話　良太、再びガチギレ！??

「神炎！ウエイトレスが攫われた！」

『何だつて！？』

「俺たちも必死で抵抗したんだが・・・」

そういう須川の体にはいくつも傷が見える

『いや、よくやってくれた。人数とかは分かるか？』

「ああ・・・」

人数は七人で全員他校生

どうやら俺達よりも一つ年上のように全員からタバコのおいがしたことから全員喫煙者とあとは不良って所か

・・・あ

『このことを雄二達は知ってるのか？』

「今ムツツリー二が知らせに行ってる」

『とすると後は行き先か・・・』

うーん・・・

あれ？確か似たようなことが原作にも・・・あ！

『よし、俺は瑞希達を誘拐した奴等を探してくる。店はまかせた！』

「わかった！」

心当たりのある所へと向かう

つついにて

携帯を取り出し、康太に電話をかける

「・・・どうした？」

『俺は先に誘拐犯のところに行ってる。康太はあとから雄二達を連れてきてくれ』

「・・・わかった」

電話を切り、俺は走るスピードを上げあの場所へ向かう

・・・これで外れてたらどうしよう

ええいんなこと考えてると本当に外れるから考えるんじゃない俺！

「さて、どうする？坂本と――吉井と神炎だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？」

「まで、吉井つてのは知らないが、坂本と神炎は下手に手を出すとマズい。坂本は今あまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな」

「坂本つて、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが・・・」

「そうはいかないだろ・・・。神炎つて奴はどうだ？噂は余り聞かないが」

「確かに神炎は噂は聞かないが、先に動けなくしに行った奴等が一瞬で返り討ちだそうだ」

「仕掛けに行ったのは何人ぐらいだ？」

「三人だ。自分から囲まれに来てチャンスと思って殴りかかろうとしたら意識を飛ばされて気づいたら坂本に縛られていたらしい」

「な・・・」

「気持ちは分かるが仕方ないだろ。依頼は神炎含め三人を動けなくすることなんだから」

ここは文月学園から歩いて五分くらいのところにあるカラオケボックス
原作と同じ場所だ

間違っただけで無くてよかった・・・
ともかく

目当ての場所を何とか見つけた俺は壁に耳を当てて中の様子を伺っていた
いやー、フロントの人に確認を取ったらすぐ分かってよかった良かった
それにしても依頼が

・・・やっぱあの人が絡んでるのかな？

「お、お姉ちゃん・・・」

「アンタたち！いい加減葉月を離しなさいよ！」

中から美波の怒鳴り声が聞こえてくる
恐らく葉月が捕まってるく抵抗も許されずにつれてこられたのだ
ろっ

「お姉ちゃん、だってさ！かわいー！」

「ギャはははは！」

思わず吐き気がしそうな事を言っている奴等の声は七人分
情報どおりだ

さて、どうしようか

さっさと突入して不良どもを黙らせるか

もう少し待って機会を伺って瑞希達を安全に救い出すか・・・

気持ち的には前者を選択して一刻も早く瑞希達を救い出したいけど、
それであいつ等を危険になんて晒したくない

でも待つて機会が来るとも限らない

どうするか・・・ん？

『あれは・・・そうだ！』

『灰皿をお取替えいたします』

「おう。で、このオネーチャンたちどうする？ やっちゃっていいの？」

「だったら俺はコッチの巨乳チャンがいいなー！」

「あつ！ズリー！それなら俺はこっちの美人チャンにするわ！」

パーティールームの中はゲスの笑い声で包まれる

「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてください！」

「だってさ。どうする？」

「それはオネーチャンたちのがんばり次第だよな？」

瑞希が不良共に懇願するが不良共はいやらしい目で瑞希達を見ながら笑っている

お、落ち着け・・・

まだだ、せっかくの好機を怒りで無駄にするな・・・

今俺は、ここの制服を真似て、帽子をかぶり店員になりすまし、潜入している

のだが・・・

正直不良共の視線や声を聞いただけでカチキレそうになる
だけど我慢だ我慢・・・

「やつ！さ、触らないでーーーー」

「・・・やめて」

「ちょっと、やめなさいよ！」

「あーもう。うつせえ女だな！」

「きゃあっ！」

俺は一瞬何が起きたのか理解できなかった

ドンと不良の一人が美波を突き飛ばすのとほぼ同時に美波の悲鳴が響いた

その後数瞬遅れてテーブルを巻き込んで倒れたのを呆然と見ていた

だが、すぐに何が起きたのかを理解すると同時に

ああ、もう無理

そう思うと同時に頭の中でプチンと音が響いた

『すみませんお客様』

「ああん、んだぼぐわ!？」

「お、お前は神炎！なんでここが分かった!？」

美波を突き飛ばした不良に声をかけ、振り返ると同時に殴り飛ばす
それと同時に帽子が落ちて他の不良共が俺に気づく

「りよ、良太君」

「リヨウ・・・」

「・・・良太」

俺に気づいた瑞希達が俺の名前を呟く

「てめえ、何してくれてんの？」

「ばか、不用意に近づくな！」

殴り飛ばした奴のすぐ横にいた奴が俺に手を伸ばす

『あ？んなもん見りゃ分かるだろ』

そう言いながらそいつの腕を握ると同時に

ボキッ

腕をへし折りながら叩きつけるように投げる

『殴り飛ばしたんだよ』

更に止めとして男の象徴を再起不能にならないレベルで踏みつける

『ありゃ、聞いてないし』

わざとらしく言いながら男が失神したのを確認
と同時に衝撃が来ると同時に吹き飛ばされる

「てめえ！ユウスケに何しやがる！」

どうやら反対側にいた奴が俺を殴ったみたいだ
だけど

『ふ、ははははは・・・』

ゆらりと立ち上がり、俺を殴った奴に近づく
その間に他の奴が俺をサンドバックのように殴る
俺はそれを見せしめ、殴った奴の前に立つ

「んだよこの野郎！」

そいつが大きく振りかぶって殴ろうとする
その腕を掴み、踏み込んで投げる

ボキッ

「ぐわー！腕が、腕があ！！！！！」

再び骨の折れる音が響いた
折れた奴は床を転がりまわっている
俺はその顔面を踏みつける

『調子乗ってんじゃねえぞこら。あとうつせえよ。たかが腕が折れた
程度で喚くな。切られるよかましだろうが』

おとなしくなったのを確認し、残りの五人へ目を向ける

『さてと、てめえら・・・』

今までの無表情から目を細め完全に戦闘モードに入る

『美波を突き飛ばした事、瑞希達をいやらしいめで見たこと。この二つの罪は・・・貴様らの体で払ってもうぞ』

そう言うと同時に不良どもが襲い掛かってくる
俺はそれを同士討ちするように仕向けて避ける

「ぐつ。てめえヤスオ！俺じゃなくて神炎を殴れ！」

「おめえがそこにいるのが悪いんだろぅが！」

「んだと！」

早速二人が勝手に同士討ちを始める
残りの二人はと

「行くぞ！ジェットストリー」長い、うっさい、あとパクリはやめろ』ぷげら！」

なんかどっかで見たことがあるのを二人でやろぅとしてたから速攻でつぶす

あと、一人・・・

「神炎！おとなしくしやがれ！」

残りの一人が葉月を羽交い絞めにして、人質にしていた
女の子になんて事をしやがる！

「へへ、大人しくしてろよ？こいつがひでえ傷を「負うのはお前じやばけえ！！！」」

ドガン！

「あがぁ！？」

どうするかと高速で思考をしていたら最後の一人の後ろの壁が吹きとばされると同時に

人影が最後の奴を蹴り飛ばす

最後の奴は白目を向き、同士討ちしていた奴等は壁の破片に巻き込まれ気絶していた

つて誰だこんなことする奴は！

人影をよく見るとそいつは

『あ、明久！？』

「良太！他の奴等は？」

『・・・そこ』

俺は明久が壊した（と思われる）破片の下敷きになってる不良共を指差す

「なんだ！？パーティールームから大きな物音がしたぞ！？」

「急いで確認に向かえ！」

とほぼ同時に外から店員が駆けつける音が聞こえる

『話は後だな。皆ここに集まれ!』

呼びかけると同時に俺は準備に入る
皆が集まるとそれを開放する

『転移!行き先は学校の屋上だ!』

「了解マスター」

明久がどうやって壁を破壊したとかの話は全部、事が済んでから聞く事にしよう
さてと、とりあえずはあの人に事情を明久達にも話すようにいわないとな

第二章第十二話　良太、再びガチギレ！？（後書き）

もうすぐ30万PVです

こんな小説を読んでいただきありがとうございます！

では、思いつきで始めた次回予告を今回もやりたいと思います

『明久は何で壁を蹴り破ったのかは分からないけど助かったことは変わりないから気にしないけど、ああなるって考えてたんだろうか？まあいいや。さてと、今度はあの人が明久達に事情を説明する次回バカとテストと召喚獣　最強の親友！？第二章第十三話　事情』

次回也大いに大暴れ！行くぜ、試獣召喚！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0026h/>

バカとテストと召喚獣～最強の親友！？～

2010年10月9日16時52分発行